



アクセル・ワールド 18
黒の双剣士

川原 礫

電撃文庫



18

黒の双剣士

川原 礫

イラスト/HIMA

||| aCCB World 18

電撃文庫

ついに実装された《宇宙ステージ》!!!

あの《黒い双剣士》との

壮絶バトル!

《最強のカタルシス》で贈る
次世代青春エンタテインメント!

アクセル・ワールド18

—黒の最精上—

白のレギオンに挑むため、黒雪姫率いる<ネガ・ネビュラス>は、緑のレギオン<グレート・ウォール>との休戦及び共闘を申し出た。

緑の本拠地・渋谷第二エリアにて、緑の王<グリーン・グランデ>、その幹部集団<シックス・アーマー>と対峙するハルヒキたち。しかし会議が開始される直前、思いがけない人物が乱入してくる。

そのアバターは、黒雪姫と同じく、真っ黒な姿で、二本の剣を携えていた……。両レギオンに浅からぬ因縁を持つそのバーストリンカーが二人の王に持ちかけた、驚くべき提案とは——!?

ついに<宇宙>ステージも実装!? な
禁断の最新刊登場!

電撃文庫

【AW】著者、川原礫の
新シリーズ展開中!

絶対ナル
孤独者
（アイブレータ）

著 川原礫 挿絵 シメジ

1~2巻、好評発売中!





9784048651899

ISBN978-4-04-865189-9

C0193 ¥590E



1920193005905

ASCII MEDIA WORKS
アスキーメディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体 590円

※消費税別価格に消費税をプラス



『アクセル・ワールド』メディアミックス展開も要チェック!

アクセル・ワールド
デュラル
マジサ・ガーデン
01~05巻発売中!
作画 伊藤伸人
『月刊コミック
電撃大王』にて連載中!
電撃文庫MAGAZINE



アクセル・ワールド
01~05巻発売中!
作画 川口士郎



アクセル・ワールド
01~05巻発売中!
作画 川口士郎

『電撃文庫MAGAZINE』にて連載中!
電撃文庫MAGAZINE

アクセル・ワールド ⑧ めい



作画協力 めい
川原 礫

久しぶりなので上の四コマのことをすっかり忘れていて、めい切がマジヤバいことになってしまいました。色方面に深くお詫言申し上げます。

[電撃文庫作品]

アクセル・ワールド1～18

ソードアート・オンライン1～15

ソードアート・オンライン プログレッシブ1～3

絶対ナル孤狼者1,2

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵はウシリーズが初のイラストレーター。「電撃魔王」小島子への憧れを見た文庫編集者が、今更の悔

TVアニメ『アクセル・ワールド』

Blu-ray&DVD
シリーズ1～8巻
発売中!

原作 川原礫
シリーズ構成 吉野弘幸
アニメーション制作 サンライズ
発売・販売 サンライズ・エンターテインメント

©2012 株式会社サンライズ・エンターテインメント

か-16-38



アクセル・ワールド18
黒の双剣士

川原 礫



電撃文庫



18

黒の双剣士

川原 礫

イラスト/HIMA

■ aCCeB! World 18

Copyright © 2012 by KAWAHARA RYAKA

All Rights Reserved

Published by Shueisha Inc.



電撃文庫

アクセル・ワールド18

—黒の最精上—

白のレギオンに挑むため、黒雪姫率いる<ネガ・ネビュラス>は、緑のレギオン<グレート・ウォール>との休戦及び共闘を申し出た。

緑の本拠地・渋谷第二エリアにて、緑の王<グリーン・グランデ>、その幹部集団<シックス・アーマー>と対峙するハルヒキたち。しかし会議が開始される直前、思いがけない人物が乱入してくる。

そのアバターは、黒雪姫と同じく、真っ黒な姿で、二本の剣を携えていた……。両レギオンに洩からの因縁を持つそのバーストリンカーが二人の王に持ちかけた、驚くべき提案とは——！

ついに<宇宙>ステージも実装!? な禁断の最新刊登場!



9784048651899

ISBN978-4-04-865189-9

C0193 ¥590E



1920193005905

ASCII MEDIA WORKS
アスキーメディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体 590円

※消費税別価格に消費税をプラス



アクセルギガ⑧ 表紙



作画協力 あき
川原 躁

久しぶりなので上の四コマのことをすっかり忘れていて、メロがマジヤバいことになってしまいました。色方面に深くお詫言申し上げます。

[電撃文庫作品]

アクセル・ワールド1～18

ソードアート・オンライン1～15

ソードアート・オンライン プログレッシブ1～3

絶対ナル孤独者1,2

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。所在地はウシリーズが初のイラストレーター。「電撃魔王」小島子への掲載を見た文庫編集者が、今迄の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。

アクセル・ワールド 18
―星の双剣士―

川原 礫

 電撃文庫





DENGKI BUNDO

アクセル・ワールド 18

黒の双剣士

川原 礪
イラスト/HIMA
デザイン/ビィビィ



「……いっせいのもそろそろ始めるか、グラフ」

黒雪姫

新生《ネガ・ネビュラス》の
レギオンマスター。
極東中学学生会会長。
デュエルアバターは
《ブラック・ロータス》。



「いつでもいいぜ、
ロッタ」

グラファイト・エッジ

元《ネガ・ネビュラス》幹部
《四元素(エレメンツ)》の一人。
目的も正体も依然謎に包まれている。

「私は大丈夫なのです!!」
《スーパーミナル・ストローケ!!!》

四禁宮謡

新生《ネガ・ネビュラス》のメンバー。
《四元素(エレメンツ)》の一人。
元《エル・アバタ》の
「アーク・メイデン」。

そ、そ、ゆーんじやないし！



胡志帆了

現代三人衆らなる小規模レボリューション
「リブ・アゲイン」のマス・ムーブ

「日本は、この大戦で国力を失った。大戦後、日本は、この大戦で国力を失った。大戦後、日本は、この大戦で国力を失った。」



四、**四、**

[illegible]

● 專業人士

小嶋陽菜はオン
ステージのメンバー。
アパレルはロンドン・ミントン。

「今日ぐらいいは、さあ前にもうねえでもういよね」

「そんなものでしょう、バーストリンガーなんて」

高野内雪

身長—155cm—体重—45kg—三围—B85 W55 H80—
髪色—黒—髪型—ツインテール—瞳色—黒—
属性—ツインテール—

高野内雪

身長—155cm—体重—45kg—三围—B85 W55 H80—
髪色—黒—髪型—ツインテール—瞳色—黒—
属性—ツインテール—



「カウントします。」

「5、4、3、2、1……ゼロ!!!」

ハルユキ

スカー・スカー・スカー
中学内格闘部前辺の少年。
新生《ネガ・ネビュラス》の
メンバー。一
デュエルアバターは
《シルバー・クロウ》。

行きなさいか、瑞きんちゃん

倉崎 楓子

新生「水ガ」全「ジュラ」のメンバー
「心」を「ハル」に似せた「心」は「デュエル」は「スカイ」

「K」

「バド、来週の新ラビリンスで、
楽しみにしてゐるな」

「二」

『プロキシマス』の
レギオンマスターである『赤の王』
デューエルアバターは
『スカーレット・レイン』。

《ブラッド・レバート》

『プロキシマス』のサブマスター
『二重』トリプレックスの一角。
本名は伊崎美奈（カサキミナ）。

アクセル・ワールド 18

黒の双剣士

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビィビィ



[illegible]

■ハルモネー(1986年作)アリス・ハルモネー、監督中野 実、11巻められたことで有名。ゲームは得意だが、内面的、学業面では一歩引いたプレイヤーズ。ハルモネーの第一の目標は、全米高校バスケット。

■チユウ一は唱了「おのれチユウ一・チユウ一」ハユウキの切腹後、本舞自衛たて足立、字内アバターは「藍色の眼」チユウ一とアバター「チユウ一・チユウ一」(チユウ一)

■ サタムー 蟹の卵のペーストと、サタム、パルメーズ、チーズとは給食から取り合い、味が濃い、ジュエルズ・バター、アンダレー、パルメーズ、パルメーズ。

■「アーサー・ウィットネー」(1949年刊、フリスコ、ロンドン版)：半伝記文学に分類していいアーサー・ウィットネー、西門公使(エドモンド)の一人、(1949年刊)とある事柄により疑問を覚えているが、(1949年刊)とある事柄により疑問を覚えている。ハル・マーズの心算(1949年刊)とある事柄により疑問を覚えている。ハル・マーズの心算(1949年刊)とある事柄により疑問を覚えている。

[illegible]

■カレントとアンペアは電流の単位で、カレントは電圧が、アンペアは電流が流れている状態を示す。

ストレンジャー、(西)風土にエロスが宿る一人。日本を代表、(東)の「ザ・ワン」はと呼ばれる。両方ワンの人間と
掛け合う男と神とのセーサー。

■ グラファイト・エッジ・ボールは、炭素原子・水素原子に形成していたバーストリングが、400℃から500℃までの一火、10分間の加熱処理によって消失している。

■ニッポンコロリンカー—鋼と電子無縁の純鉄、鉄鋼や合金など、あらゆる金属の加工をサポートする鋼材製造。

■「ガイジン」は、日本＝韓国間の貿易に占める比率が二割を超えているというデータに基づき、国内のサブプライム市場に

■本誌「レポート」欄の「ジェンガ」で解説される、古来アジア諸国と朝鮮半島とを往來とする経路のこと。生

■最近話題のフォームデザイン・ポイントのアーティキュレート（目付し線画）を1字1字の点で、縦書きで表す

■無制限の中ジョー・ルノー・ド・バルも従来のヴェルネ・ルノー・ド・バルの延長線上にあるハイ・プレイヤー向けのパフォーマンス。ルノー・ド・バルの延長線上にあるハイ・プレイヤー向けのパフォーマンス。

「日本経済新聞」の「海外」版に「日本企業は海外に工場を移す」という記事が載っていました。その記事によると、日本企業は海外に工場を移すことが増えているとされています。これは、日本企業が海外市場に積極的に参入していることを示しています。また、日本企業が海外に工場を移すことで、現地市場に近づき、顧客のニーズに迅速に対応できるようになるとされています。これは、日本企業が海外市場に積極的に参入していることを示しています。また、日本企業が海外に工場を移すことで、現地市場に近づき、顧客のニーズに迅速に対応できるようになるとされています。

■ 既設の「おまかせ」を制御するために使うシステム。通常はすべてこのシステムによって「おまかせ」が制御される。

[illegible][illegible][illegible][illegible]

トインは、他の従業員を監視し、罰する手段で部下を他人に支配し、組織を動かした。そして、他の役員、各部長、ディレクターに監視され、罰せられる。

■スターキヤスター—コラム—ディザスターが持つ人徳のこと、無きしを嘆きをし、いふが、本来の徳は、その名の通り、何の如くに無い無きな徳である。

■「555カット」は55年一割増しの55年カットの誤り。55年一割増しの55年カットと誤る。一割増しの55年カットは55年一割増しの55年カットの誤り。

そこで、このネットを既述した、エルデンブルグのデパートでも（心算）及友人の「おれ」の同輩となる、相対的では、デパートの、
すれぬの強弱にともなう、強弱の相対性、心算の強弱でなく、強弱の「おれ」の同輩となる、相対的では、デパートの、

■もしも神様が「ブッ・ブッ」の一言で世界を滅ぼすとしたら、神様の側に反対派の人は、いったい、大抵、どのくらいいるのでしょうか。

[illegible]

■心臓の「ポンプ」エネルギーの源となるのが酸素だ。心臓の機能を高めること、その源が呼吸の改善。

对于张叔, 从音乐方面一知半解, 五线谱只认一个调, 为钢琴伴奏时, 总

[illegible]

「このようにして、無数のエッセイが、無数の中絶のチャームドに続いて、
無数のエッセイによって無数のアバターが成り立ち、この世界は無限の

同してそれ以外の要素が一切無視される。その時間軸によって決まること。

青色の空より降り注ぐ、漆黒の流星。

高さ二百三十メートルの威容を誇る渓谷ラヴィン・タワーの屋上から一直線に落下してくるデュエルアバターは、細身のシルエットが数倍の大きさに感じられるほどの高密度なオーラをまとっていた。

その存在感は、七の神諭に列せられる十字の大盾（サ・ストライフ）を携える緑の王、グリーン・グランデにも引けを取らないとハルユキには感じられた。

あれほどの高さから何の備えもなく地面に墜落すれば、常人が即死するのはもちろん、落下地点にいる対戦者も無事では済まない。しかし、この対戦ステージ兼会議場の開始者となったのは、緑のレギオン（トレイト・ウォール）の幹部集団（六層装甲）の第三席アイアン・パウンドと第二席ビリジアン・デタリオンだ。いま落下中の黒いアバターは、ハルユキたちと同じ観戦者のはずなので、どんな高さから落ちても死なないし周囲に被害をもたらすこともない。

にもかかわらず、ステージに集う十三人のうち、ハルユキを含む十一人が口々に驚きの声を漏らしながら――実際には、ハルユキは「うおわああああ」と悲鳴を上げてしまったのだが――

落下予想地点から飛び退いた。微動だにしなかったのは、グリーン・グランデと、黒の王

ブラック・ロータスだけだった。

二本の長剣を交差させて背負い、ロングコート状の裝甲板を四方に広げた黒いアバターは、胸の前でがっちり両腕を組み、昂然とフェイスマスクをもたげた姿勢のまま真つ逆様に落下し続けた。会談場となったラヴィン・スクエア中央棟屋上広場の大理石の床面が附近に近り、このままでは顔面から衝突する——と思われたその時、アバターがぎゅんっと体を前方に回転させた。

あたかも体操選手の如く、胸組みしたまま超高速の伸身前方宙返りを披露し、最後の瞬間に両手を突き出して腕を曲げる。

ドン！ と、ギャラリーの落下にしては派手な効果音が響いた。

控えめな土埃エフエクトが薄れると、漆黒の双剣士アバターは、ブラック・ロータスの眼前ほんの二メートルの場所に足事な着地を決めていた。

いや、タイミングも姿勢制御も完璧ではあったのだが、それでもこの着地を見事と表現していいのかハルユキは少々迷った。なぜなら双剣士は、両足の裏ではなく、両手と両腕を床面に着けて頭を深々と下げていたからだ。

この体勢を表現し得る言葉はたった一つ——土下座。

高度二百三十メートルからの、前方十五回宙返りジャンピング土下座だ。

顔を床面に擦りつけんばかりにしながら、双剣士は強い芯のある声を凛然と響かせた。

「すまん、 ロッタ！」

「……………」

この場に居合わせる誰もが、それぞれの理由で絶句した。ハルユキは、そして恐らくタカムとチユリも、わけが解らないにも程がある展開に呆然としたからだ。が、楓子やあきらたちもネガ・ネビュラスの古参メンバーはなぜかガクリと肩を落とし、パウンドたちダレート・ウォールの幹部はやれやれと首を振った。そして黒の王ブラッタ・ロータスは、言葉の選択に迷うかのようには何度か肩を上下させてから、少しばかり冷ややかな声で応じた。

「そのロッタというのはやめろと、何回言わせるんだ……ダラフ」

ダラフ。どうやらそれが、黒い双剣士の名前らしい。

どこかで聞いたような……と二秒ばかり考えてから、ようやく思い出す。それは、いままで何度か、あきらや楓子、隠、黒雪姫の口から出た名前だ。アバターネームの、最初の三文字を取ったあだ名。

フルネームは、ダラファイト・エッジ。

ネガ・ネビュラスの幹部たる《四元素》の、最後の一人——。

「なっ……………なん……………」

ハルユキは、半歩下がりがりながら口をばくばくさせた。ダラファイト・エッジは、あきらや隠と同じように、三年前の帝城攻略戦で四神ダンプの守る北門に於いて無謀エネミー、キル状態

に陥り、現在も封印されたままのはずだ。正確には無限E.K.になっても無制限中立フィールドにダイブできないだけで、この会談場を含む通常対戦フィールドには問題なく出入りできるのだが、それにしても消息不明と言われていた彼がどうしていまここに。

驚愕と混乱のあまり、頭から巨大なクエスチョンマークが幾つも実体化しそうなった時、すすつと隣に寄ってきた諺が囁いた。

「クーさん、アレが誰かは解ったみたいですね？」

「は……はい、四元素の、グラフィイト・エッジさん……ですよね。でも、なんで……」

どうにか頷いてから、脳内に山ほど渦巻く疑問を口にしようとしたが、諺は先んじて素早くかぶりを振る。

「グラフィイトさんのすることにいちいち驚いたり慌てたりしてたらキリがないのです。アレはもう、あーゆーモノだと思って受け流すのがコツなのです」

「は、はあ……」

諺にとっては古い仲間との感動的な再会シーンであるはずなのだが、そんな気配はみじんも感じられないアレだのモノ呼ばわりに唖然としてみると、諺の向こう側に立つ様子とあきらかにくくく顔した。

ことさら感激しているわけでもないのは黒書殿も同様らしく、盛大なため息をついてから、平伏し続けるグラフィイト・エッジに再び声を掛けた。

「だいたい、何が『すまん』なんだ？ 三年ぶりの対面早々、土下座で謝られてもわけが解らんぞ」

ジャンピング土下座の理由を問われた双剣士は、ほんの少し頭を上げながら答えた。

「いや、まあ、そのお、何と言いますか……俺、実はいま、ネガビュじゃないトコにお世話になっちゃってまして……」

「ほう？」

「んで、なんか肩書きっぽいのも貰っちゃってまして……」

「ほう？」

「具体的にはですね、ええと、あー……」

のらくらと煮え切らない答弁に、とうとう怒りを爆発させたのは、黒陣営ではなく緑陣営のビリジアン・デタリオンだった。深緑色の鎧兜を着込んだ剣闘士型アバターは、ブーツで床を強く踏みながら、張りのある声で叫んだ。

「いいかげんその情けない格好をやめたらどうだい！ どんな事情があろうと、ここに来たからには、貴様は我々の代表なのだぞ！ 正々堂々、胸を張って名乗ればよからう！」

……我々の、代表？

とはいかなる意味なりや。ハルユキが再び首を傾げていると、左にいるタタムが、掠れた声で呟いた。

「そうか……そういうことなのか」

何がそういうことなんだよ、と訊ねる必要はなかった。デカリオンに吐賣されたグラフィは、観念したように頭を垂れると、土下座スタイルからいきなり倒立し、ふわりと体を反転させて立ち上がったのだ。

同じ黒色ではあるが、黒水晶のように煌めく半透過装甲を持つブラック・ロータスに対して、しつとりとした質感のある半艶消し装甲のグラフィ・ファイト・エッジは、精悍なデザインのフェイスマスクを黒陣営の七人に向けながら名乗った。

「んじや、お初の間々もいることだし、改めて自己紹介させてもらうかな。俺はグラフィ・ファイト・エッジ。昔はネガ・ネビュラス四元素……そしていまは、ダレート・ウォール六層装甲の、第一席つーことになってる。ロット、レツカ、カリント、デンデン、久しぶり。新顔の三人、よろしくな」

双剣士の飄々とした挨拶を聞いた途端、誰か「むー」と軽く唸った。恐らくは（デンデン）なる可愛らしいあだ名で呼ばれたからだろうが、ハルユキにそのことをどうこう考える余裕はなかった。

六層装甲の、第一席。それはつまり、ビリジアン・デカリオンの上に立つ、緑のレギオンのナンバーツーということではないか。

驚いたのはネガ・ネビュラスのメンバーだけではなかった。グラランドとデカリオンを除いた

ダレイト・ウォール側の四人は、一様に上体を仰け反らせ、口々に声を漏らした。

「第一席が……元ネガビュロ」と、アイアン・パウンド。

「あの……（アノマリ）……」と、リダナム・パイタ。

「アンタが、ビリーさんに勝って、ボスと引き分けたデスカ？」と、サンタン・シエイファア。

「こいつはブタマゲツティンダだぜ!!」と、アッシュ・ローラー。

その反応を見て、ハルユキはようやく数分前のパウンドの台詞を思い出した。確かに彼は、第一席と会ったことがあるのは緑の王とデタリオンだけで、それ以外のメンバーは顔はおろか名前も知らないのだと言っていた。

体を百八十度回転させ、ダレイト・ウォールのメンバーに相対したダラファイト・エッジは、ヘルメットの側面を指先でこりこり引っ掻きながら言った。

「（矛盾存在）か、懐かしい二つ名だなあ。グツさんとビリー以外にも俺の名前を知ってる奴もいるみたいだけど、まあ一応な。二年と十一ヶ月前から第一席をやらせて貰ってるダラファイト・エッジだ。以後よろしく」

パウンドたちは、突然登場したレギオンのナンバーツーにどう反応すべきか迷うかのように硬直を続けていたが、やがて「……ども」「オス」などと短く挨拶を返した。その様子を尚も呆然としながら眺めていると、隣の話がかすかな吹きを漏らした。

「二年……十一ヶ月前……」

暗闇にハルユキは胸裏でカレンダーを測った。いまが二〇四七年七月なので、二年十一ヶ月前は二〇四四年の八月ということになる。

それは、黒雪姫が、初代赤の王レッド・ライダーの首を落とした月。

そして第一期ネガ・ネビュラスが、帝城攻略戦での大敗を経て消滅した月だ。

つまりドラファイト・エッジは、レギオン消滅の直後にはもうグレート・ウォールに移轉していたことになる。あまりと言えばあまりな変り身の早さだ。

十数人の視線を一身に集める黒い双剣士は、ブレッツシャーなど一切感じていないかのようにひょいと肩をすくめると言った。

「さて、俺の乱入でちと時間食っちゃったな。残り二十分が、こりやさくさく語を進めないとヤバイな……つーわけで、後は頼むよ、ロッタ」

「……ここで私に丸投げするなら、お前は何をしに出てきたんだ……」

他にも色々言いたいことが山積みであろう黒雪姫は、しかしそれを短いため息に紛らわせると一歩前に出た。

「だがまあ確かに時間がない。予想外の顔ではあるが双方七名ずつ揃ったことだし、さっそく会谈を始めさせて貰うぞ」

そう宣言すると、広場の中央に二脚向かい合わせて設置されているベンチの片方に歩み寄る。十字盾を背中に装着したダリーン・グランデも無言で移動し、二人の王はそれぞれのベンチの

中央にがしつと腰掛ける。

梶子と謡、あきらが黒雪姫の右側に座ったので、ハルユキはそそくさと左側に腰を下ろした。するとなぜか正面がグラフィイト・エッジになってしまい、慌てて顔を伏せる。

ネガ・ネビュラス四元素で唯一の男性バーストリンカー。緑の王ダリーン・グランデと一対一の戦いで引き分け、誰もが恐れる神獣級エネミー（太陽神インティ）にも挑んだという猛者。黒鉛という、純色の黒に限りなく近いカラーネームを持つ真正正銘のハイランカー――。

この人物の登場をどのように受け止めればいいのか解らず、ハルユキは上目遣いに黒い双剣士を盗み見た。シルバー・クロウの鏡面ゴーグルと同じく、グラフィの鋭利な形状のゴーグルもアイレンズを隠すタイプで、アバターの内面をまったく感じさせない。

敵なのか、味方なのか。

何かを金んでいるのか、そうでないのか。

この場にメタトロンを呼び出して、グラフィを（観て）もらえば色々と解るはずだが、万が一グレート・ウォール側にアイコンを見替められて説明を求められたら残り時間を全部使っても終わらないだろう。いまは、ハルユキ自身がしつかりと見て、感じるしかない。

などと考えているうちに全員がベンチに座り終え、再び黒雪姫が発言した。

「まずは、我々の求めに応じてくれたグレート・ウォールの諸君に改めて感謝する。先ほども言いかけたが、この会議の目的は、加速研究会への対抗策を論じることだ。先週の七王会議で

ISSキット本体の破壊と全てのキット端末の不活性化が確認されたが、これで研究会が動きを止めるとは我々は考えていない。奴らは、キット本体から転送された負の心意エネルギーを使つて、より大規模な破壊と混沌を加速世界にもたらそうとするだろう。それを、未然に防ぎたい」

静かだが冷厳とした意思を秘めた言葉に、黒サイドのみならず緑サイドのグラフとグランデ以外の面々もいくぶん背筋を伸ばした。アイアン・パウンドが、鋼鉄のグローブを抵めた右手を軽く持ち上げて発言する。

「そりゃまあ、俺らもミッドタウン・タワーのISSキット本体を破壊するために、あそこを守つてたメタトロンのヤローをぶつとばせるチャンスは何ヶ月も待ち続けたくらいだからな……」

メタロンを召喚していなくてよかった！ と心の底から思いつつも、ハルユキはパウンドの言葉に耳を傾けた。

「……研究会の連中がまたそろ何かを企んでるつつうなら、それをぶつ潰すのはやぶさかじやねーよ。だが黒の王、どうやらあんたは、奴らが次に何をするのかを、具体的に推測できてるみたいだな。なぜだ？ そして、どうしてこの話を、ネガビュと仲がいい赤のレギオンじやなくてウチに持ってきたんだ？」

当然の疑問と言えるだろう。先の七王会議では、ハルユキたちが加速研究会の本拠地で体験

したことをほとんど報告できなかったのだから。

どうにか王たちに周知できたのは、キット本体から膨大な心意エネルギーが転送されたことだけで、それを受け入れる器となったウルフラム・サーベラスや、赤の王の強化外装を奪って送り出された災禍の鎧マークII、そして本拠地の具体的な位置に関しても秘匿せざるを得なかった。

赤の王が「インビンシブル」のパーツを一つ失ったままであることを知れば、黄の王あたりがまた良からぬ金みを逸らせかねないし、本拠地の位置を公開することは、七王のレギオンのひとつが研究会の隠れ費であるとか何の証拠もなく宣言するに等しいからだ。

その状況は、七王会議の時から変わっていない。いったい黒雪姫はバウンドにどう答えるつもりなのか、とハルユキが息を詰めていると、少し離れて座る楓子が発言した。

「華ちゃん……いえバウンド。あなたの疑問に答えることは簡単よ。でも残念ながら、わたしたちの体験と信念以外に、その答えが正しいと証明する根拠は存在しないわ。つまり、聞けば、あなたたちは選択しなくてはならなくなる。わたしたちを信じて全面的に協力するか……あるいは信じずに今後一切の交渉を断つか」

「……ずいぶんと両極端な選択技だ」

低い声で呟ったのは、ハルユキから見ても緑の王の右に座るデカリオンだ。

「部分的に信用して、限定的に協力するという選択はないのか？」

「ないわ。聞けば、その理由も解る」

「……………」

デカリオンは両眼を細めて沈黙し、パウンドも考え込むように腕を組んだ。レギオンのナンバーにして六層装甲第一席のグラフは微動だにせず、リグナムとサンタンも沈黙を守っている。

視界上部の残り時間が九百秒を切った時、がつん！ という無遠慮な音が響いた。ベンチの端に座るアッシュ・ローラーが、こついライディング・ブーツの踵を大理石のタイルに落としたのだ。

「ギガ・マダルツコイ展開だぜ。ここまで来たらネガビュは言わなきゃネバー・ビギンだし、グレウォも聞かなきゃボーン・ブレイクのゲット・タイヤードだろ？ 悩むだけウェイスト・オブ・タイムってもんだぜ」

「最後の《時間》の無駄」だけ正しい英語なのが余計にイラッとききましたよ、アッシュ」

楓子の声に、世紀末ライダーはしゅばっと両足を揃えて背筋を伸ばす。そのやり取りに軽く苦笑したデカリオンは、ちらりとレギオンマスターを見やり、沈黙を守る緑の王の横顔に何らかの意思を見出したかのように頷いた。

「……よからう。どんな爆弾なのかは知らないが、確かに聞かねば始まらないし、骨折り損のくたびれ儲けというものだ。……その《答え》とは何なんだ？」

「……………では、話そう」

眩くように応じた黒雪姫は、視線を港区エリア方面の夕焼け空に向けながら続けた。

「ミッドタウン・タワー上層階から転送された心意エネルギー。その行き先を、我々はすでに突き止めている」

「……………ならどうして、七王会議で報告しなかった？」

アイアン・パウンドの問いかけにすぐには答えず、黒の王は空から戻した視線をちらりと左――ハルユキたちに向けた。

「ここから先は、私ではなくシルバー・クロウ、シアン・バイル、そしてライム・ベルの三人が体験したことだ。クロウたちは、ミッドタウン・タワーから逃亡した加速研究会メンバーを追跡して、収容の本拠地への潜入に成功した。時をほぼ同じくして、私とスカイ・レイカー、アクア・カレント、アーダー・メイデンはISSキット本体を破壊し、心意エネルギーの転送現象を目撃した。そのエネルギーは、クロウたちが戦っているまさにその場所に降り注ぎ……そこに存在した強化外装を汚染して、最悪の怪物を生み出した……」

「……………怪物、デスか？」

驚き返して咬いたサントーン・シェイプアーに頷きかけると、黒雪姫は言った。

「その怪物をどう呼ぶべきか……………もういちど教えてくれ、シルバー・クロウ」

突然指名され、ハルユキは緊張しつつも頷いた。

「は……はい。あれは……新しい（鎧）。復讐の鎧、マークⅡ……です」

「なん……」

「だと……」

緑の王の右側で、デクリオンとバウンドが異口同音に叫んだ。リダナムとシェイファーは振って胸の前で両手を握り合わせ、グラフさえもかすかにフェイスマスクを動かす。

「い、いや、しかし……いくら研究会の速中でも、作ろうと思つて作れるモンなのか？ 元々の（鎧）ってのは、何年もかけて何人ものバーストリンカーに取り憑いて、その結果とんでもねえスベクタになっちまったんだろ？ それを、そんな簡単に……」

叫ぶバウンドの、灰色のアイレンズをしっかりと凝視しながらハルユキは言った。

「簡単に、ってことはなかったと思います。研究会は、ヘルメス・コードのレースに乱入して、心意システムの威力を観客に見せつけた。次にISSキットを何十人もものバーストリンカーに感染させて、彼らの負の心意をキット本体に溜め込んだ。それらはみんな、新しい災禍の鎧を作るためだったんです。結果出来上がったマークⅡは、単純なパワーだけなら、オリジナルを遥かに超えてました。解るんです……僕は、最後の（タロム・ディザスター）でしたから」

「……………」

かつてディザスター化したハルユキと戦い、破れた経験のあるバウンドは、その時貰かれた胸アーマーに右手を触れさせながら沈黙した。

バウンドから外した視線を順に緑の幹部たちに向けながら、ハルユキは続けた。

「生まれたてのマークⅡは、エネミーみたいに暴れるだけで、知能のようなものは感じませんでした。それでも僕は手も足も出なくて……けど、頼もしい助けもあって、どうにか行動停止に追い込むところまでは行けたんです」

あの戦場には、ハルユキとタム、チユリだけではなく、ニコとバドさん、そして大天使メタトロンがいた。ことにメタトロンが自らの命を賭^かけてまで守ってくれなければ、ハルユキはマークⅡの虚無属性レーザーに直撃^{ちくげつ}されて蒸発^{じょうぱつ}していただろう。

しかし、いまはまだ彼女たちの名前を出せない。胸の奥で改めて感謝するに留^{とど}めつつ、話を締めくくる。

「でも、元の強化外装に還元^{かえん}しようとした時、依代^{よしろ}になってたバーストリンカーのドローパーが、彼女が外部から切斷されてしまつて……マークⅡはいまも、研究会の手中にあります。奴^{やつ}らがあれを使って何をするつもりなのかは解りませんが、たぶんマークⅡも、目的じゃなくて手段なんです。研究会のリーダーが言っていましたから……あれは、彼女にとっては〈希望〉なんだ、つて」

どうにか役割を果たし終え、ハルユキが小さく息を吐^ついたその時、ダクリオンがきつと右手を持ち上げた。

「待て。加速研究会のリーダー……彼女、だど？ シルバー・タロウ、お前は、奴らのボスに

遭遇したのか？」

「クロウだけではない。我々ネガ・ネビュラスのメンバー全員の前に、あいつは姿を現した」
硬質な冷気を帯びた声で答えたのは黒言殿だった。

黒の王ブラック・ロータスは、ここがこの会談の本舞台だと言わんばかりに右足の剣先を大理石に音高く突き立てると、青紫色のアイレンズでダレート・ウォールの七名をしかと見据えながら宣言した。

「加速研究会の本拠地は、港区第三エリアに存在する学校。そして奴らのリーダーは、白の王ホワイト・コスモス。つまり……加速研究会は、白のレギオン（オシラトリ・ユニヴァース）内部に結成された組織だ」

今度こそ、緑の王グリーン・グランデもわずかながら反応を見せた。分厚い装甲をがしゅつと鳴らし、エメラルドを思わせる四角いアイレンズをゆつくりと動かせる。

驚愕と戦慄に満ちた沈黙を最初に破ったのは、会談に参加している緑陣営の中で最も口数の少ないリグナム・バイタだった。樹をモチーフにしたデザインを持つ女性型アバターは、華奢な体をいっそうすばめるようにしながら、囁くように訊ねる。

「その名前を出したのに……何の証拠もないと？」

「ああ、ない。物的証拠があれば、先週の七王会議でアイボリー・タワーにぶつけていたさ」
 平然と答えた黒雪姫は、鋭利な脚を組むと、正面のグランデをじっと見詰めた。

「物証はないが、加速研究会と何度も戦ってきた我々にそれは必要ない。ネガ・ネビュラスは、研究会が新たな災禍を引き起こす前に、オシラトリ・ユニヴァースを攻撃する。具体的には、奴らの本拠地が存在する港区第三エリアを領土戦にて攻め落とし、マツチングリストに現れた研究会メンバーの名前を他の王たちに確認させる。そこまで行けば、七王会議で決議された、セレギオン……いや六レギオンによる総攻撃の発動条件を十分に満たせる」

黒の王の果敢な意思表明を受けて、緑の王はアイレンズをいちど明滅させた。分厚い装甲を鳴らして鎮くと、長い沈黙を破る。

「その条件が満たされたならば、我自ら白を攻めるに否やはない。——しかし」
 それだけ言って沈黙モードに戻ってしまったグランデに代わって、彼のスポークスマン役であるらしい六層装甲第三席のアイアン・パウンドが発言する。

「しかし黒の王、オシラトリに領土戦を仕掛けるつつつても、現状そいつはできないよな？」
 あんたらの杉並エリアと、白の港区エリアは隣接してないからな」

「その通りだ。それゆえ、今日の会議を申し入れたのだ」

頷くと、黒雪姫はシルクのように滑らかな声音で二つ目の爆弾を投下した。

「ネガ・ネビュラスは、白のレギオンを攻撃するために、現在グレート・ウォールの領土である渋谷第一および第二エリアの返還を申し入れる。補償ポイントの額については目を改めて協議したい」

どええええ——— ？

と腹の底から放たれた絶叫を、ハルユキは危うく吞み込んだ。

左側ではタタムとチユリも体を硬直させている。黒雪姫の右側に座る楓子たちは事前に話を聞いていたが、もしくは予測していたらしく驚いた様子はなかったが、まとう気配は厳しさを増している。

譲渡ではなく、返還と黒雪姫は言った。

第一期ネガ・ネビュラスの本拠地は杉並ではなく渋谷だったのだと、以前にどこかで聞いた記憶はある。黒雪姫が杉並で一人暮らしを始めたのは梅郷中学校に進学した時で、それ以前は白の王と一緒に港区の実家で暮らしていたのだから、初期の拠点が隣接する渋谷エリアだったことに不自然さはない。

しかし今までハルユキは、第一期ネガ・ネビュラスの消滅で空白地となった渋谷エリアを、南の目黒エリアや品川エリアを本拠としていたグレート・ウォールが自衛的に獲得したのだと思っていた。だが黒雪姫が〈返還〉という言葉を使ったからには、かつてある種の交渉なり、



《加速世界》のレギオン領土MAP

赤のレギオン(プロキシマス) 領土: 北海道、中部第一エリア

黄のレギオン(ゴガ・ネビュラス) 領土: 北海道第一エリア

青のレギオン(レオニス) 領土: 北海道第二エリア、文京エリア

緑のレギオン(グレート・ウォール) 領土: 北海道第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三、第十四、第十五、第十六、第十七、第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十七、第二十八、第二十九、第三十、第三十一、第三十二、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十七、第三十八、第三十九、第四十、第四十一、第四十二、第四十三、第四十四、第四十五、第四十六、第四十七、第四十八、第四十九、第五十、第五十一、第五十二、第五十三、第五十四、第五十五、第五十六、第五十七、第五十八、第五十九、第六十、第六十一、第六十二、第六十三、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七、第六十八、第六十九、第七十、第七十一、第七十二、第七十三、第七十四、第七十五、第七十六、第七十七、第七十八、第七十九、第八十、第八十一、第八十二、第八十三、第八十四、第八十五、第八十六、第八十七、第八十八、第八十九、第九十、第九十一、第九十二、第九十三、第九十四、第九十五、第九十六、第九十七、第九十八、第九十九、第一百、第一百零一、第一百零二、第一百零三、第一百零四、第一百零五、第一百零六、第一百零七、第一百零八、第一百零九、第一百一十、第一百一十一、第一百一十二、第一百一十三、第一百一十四、第一百一十五、第一百一十六、第一百一十七、第一百一十八、第一百一十九、第一百二十、第一百二十一、第一百二十二、第一百二十三、第一百二十四、第一百二十五、第一百二十六、第一百二十七、第一百二十八、第一百二十九、第一百三十、第一百三十一、第一百三十二、第一百三十三、第一百三十四、第一百三十五、第一百三十六、第一百三十七、第一百三十八、第一百三十九、第一百四十、第一百四十一、第一百四十二、第一百四十三、第一百四十四、第一百四十五、第一百四十六、第一百四十七、第一百四十八、第一百四十九、第一百五十、第一百五十一、第一百五十二、第一百五十三、第一百五十四、第一百五十五、第一百五十六、第一百五十七、第一百五十八、第一百五十九、第一百六十、第一百六十一、第一百六十二、第一百六十三、第一百六十四、第一百六十五、第一百六十六、第一百六十七、第一百六十八、第一百六十九、第一百七十、第一百七十一、第一百七十二、第一百七十三、第一百七十四、第一百七十五、第一百七十六、第一百七十七、第一百七十八、第一百七十九、第一百八十、第一百八十一、第一百八十二、第一百八十三、第一百八十四、第一百八十五、第一百八十六、第一百八十七、第一百八十八、第一百八十九、第一百九十、第一百九十一、第一百九十二、第一百九十三、第一百九十四、第一百九十五、第一百九十六、第一百九十七、第一百九十八、第一百九十九、第二百

白のレギオン(オシャトリ・ユニヴァース) 領土: 北海道第二エリア

空白地帯: 北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州、沖縄

契約があつた……ということなのだろうか。

そう考えた瞬間、驛裏に一週間前の黒の王と緑の王のふた話^{ふたわたり}が甦る。

七王会議が終つたあと、別れ際に黒雪姫はグランデに問ひかけたのだ。

——グランデ。二年と十一ヶ月前の、我々の会話を覚えてゐるか。

それに対して、緑の王は「無論」とのみ答えた。すると続けて、黒雪姫は言った。

——そうか。ならば、《選択の時》は遠からず訪れる。

またしても、二年と十一ヶ月前だ。全てが始まり、そして終つた二〇四四年八月。やはり

黒の王と緑の王は、渋谷エリアの支配権移転に際して何らかの交渉をしていたのだろうか。

となると、《選択の時》とはいつたい――。

息を殺して状況を見守るハルユキの耳に、聞き慣れただみ声が届いた。

「待て……待て待て、待つてくれ・ア・モーメント！」

ベンチから腰を浮かせ気味にしてそう喚いたのは、ハルユキと同じく何も知らなかったらし

いアツシュ・ローラーだった。

「や……ヤーシブを、ネガビュに返還^{へんたん}だあ？　んなこととして、ミドルランタ以下のレギメンが

納得^{なつやく}するわきゃナッシングだぜ！」

「もちろん、ただでとは言いません。それなりの代償^{だいてい}は支払いますよ、アツシュ」

穏やかな声で、アツシュの親であり師匠でもある楓子^{あきこ}が論じた。

「し、しかしですね師匠……代償つつつても、ブレイン・バーストで領土に替えられるようなモノなんてですね……」

珍しくアッシュ語の混じらない抗弁を押し留めたのは、親子ではなく縁陣営のボスの意外なひと言だった。

「代償は、すでに受け取っている」

縁の王の発言は、黒雪姫にとっても予想しないものだったようで、アイレンズを鋭く光らせながら「なんだと？」と問い返す。

「誰から受け取ったんだ、グランデ？」

「俺」

とあっさり答えたのは、ベンチに座ってからずっと黙りこくっていたグラフィイト・エッジだった。

「……グラフィ、お前が？」

さすがに驚いたような声で、黒雪姫が問い返す。

「……お前がグレート・ウォールに入ったのは、自ら人質の役を買って出たからかと思っていたのだが……」

「ひ……人質？ どういうことですか!?」

穏やかでない言葉に、今度こそハルユキは叫び声を上げてしまった。黒雪姫はちらりとハル

ユキを見やり、一瞬考えてから言った。

「残り十分か、まあ間に合うだろう。それではここで三分ほど貰って、ちよつと昔話をしよう。二年十一ヶ月前に、この渋谷エリアで、何があったのか……………」

ハルユキ、チユリ、タタムの黒陣営若干三人はもちろん、緑陣営のリグナム、サンタン、そしてアツシユも当時の出来事を詳しくは知らなかったようで、黒雪姫の語る言葉は誰にも達されることなく黄昏ステージの微風に乗って静かに響いた。

——帝城での壊滅的な敗戦を経て、私はネガ・ネビユラスの解散を決めた。もちろん、誰かを後継のマスターに指名してレギオンを存続させることも考えたが、四元素の三人が無限E K状態、残る一人も一線から退くと宣言しているところであつてはそれも難しかった。ならば、深く解散し、進む道はそれぞれのメンバーに選ばせようと思つたのだが……………ひとつだけ未解決の問題、いや我々が私の中に存在した。

——私が何の手も打たずにレギオンを解散し、加速世界から去れば、当時の領主だった渋谷エリアとレギオンメンバーのはほとんどはオシラトリ・ユニヴァースに吸収されることになっただろう。私は、どうしてもその事象を避けたかった。仲間たちが、私のように白の王に顧みられ、便利な手駒として使い捨てられることは耐えがたかつたのだ。それゆえ私は、レギオンを解散する前にグランデと面会し、頼んだ。渋谷エリアと、黒のレギオンメンバーたちの受け皿

となってくれ、とな。

——そのわずか十日前に、私はレベル10になるためにグランデを含む王五人の首を獲ろうとしたのだから、これほど熟知^{てい}らずな話もないが……。それだけ必死^{めいじ}だったのだ。さっきのドラフのように、地面に両手両足をつけて懇願^{こんがん}する私に向けて、グランデは言った。

——いつか、再び《選択の時》が訪れる。その時に逃げないと誓^{ちか}うならば、領土と戦士たちを引き受けよう、と……。

「もちろん約束するしかなかったが、当時まだ小学生だった私には、正直言葉の意味^{みい}が解^とらなかったよ。金^{かね}を捨ててローカルネットに引きこもるしかない私に、いったい何を述べと言^いうのか、とな。だが……悔^くしいが、グランデの予言は当たった。私はシルバー・クロウと出会い、ネガ・ネビュラスを再び興^きし、古い友を一人ずつ呼び戻し……そして選択の時を迎えたのだ。二年十一ヶ月前には尻尾^{しつぽ}を巻いて逃げることにしかできなかった白の王ホワイト・コスモスと、再び戦^{いく}うか否^{いか}か、というな……」

長い話^{はなし}が終わりに差し掛^かかったことを知らせるように、黒雪姫は組んでいた足をゆっくりと解いた。

「加速研究会の黒幕がコスモスだと知った時、驚^{おどろ}きと同時に『やはり』という気分もあった。いまに思えば、ISSキット本体が港区^{みなと}エリア内の東京ミッドタウンに設置^{ていし}されていると

知った時から、淡い予感があったのかもしれん。コスモスは、私が加速世界で最も恐れる相手だ。一対一で戦って勝てる確信はない。ゆえに、白のレギオンに戦いを挑むか否かという選択に際し、当然恐れはあった。挑めば、私はまた大切なものを全て失ってしまうのではないか、という……。——だが、今回は、逃げるという選択肢は最初から存在しなかった。なぜなら私は、ダランデに誓ってしまっただけから。次は逃けない、と」

そこで黒雪姫はかすかな笑みにも似た息遣いを漏らしたが、もちろん緑の王は身動きひとつしない。静寂の中、黒の王は語り続ける。

「ダランデは私の懇願を聞き入れ、ネガ・ネビュラスが渋谷エリアを放棄した直後に領土宣言し、またかつてのネガ・ネビュラスメンバーで移轉を望む者は全てグレート・ウォールに受け入れてくれた。しかし、移轉する者たちにも、また受け入れる者たちにも小さからぬ不安があったはずだ。何せ、レギオンマスターには『断罪の一撃』という恐るべき特権があるから……。假にダランデがその気になれば、ネガ・ネビュラスからの移轉者たちをまとめて強制全損に追い込むことも、システムのには可能なわけだ。一方グレート・ウォール生え抜きのメンバーたちからも、昨日までの敵を二十人以上も受け入れることには異論が出ただろう……」

「出たとも。何せ、当時は第一席だった俺と第二席のパウンドが真っ先に反対したからな」

デカリオンが頷くと、パウンドも軽く肩をすくめる。

「当然だ。レギオンが、実質的に分裂しちまうようなモンだからな」

「しかし、結果として移籍は成り、渋谷は緑の領土となった。私はその理由を、グランデの統率力ゆえと考^{さく}えて納得^{なつとく}していたのだが……どうやらそれだけではなかったようだ。裏でお前が動いていたというわけだ、ドラフ」

黒雪姫に名前を呼ばれた双剣使^{イブキ}は、困ったように上体を引いた。

「いやあ、そんな大層なモンでもないけどな……とりあえずグッさん、もとい緑の王に会って、俺もグレウオに入るからヨロシク、みたいな……」

あっけらかんとした物言いに、フットワークの軽い人だなあ……などと思っ^{おも}てしまっ^{しま}ってから、ハルユキは気付いた。

ことは、そんなに簡単な話ではない。先刻黒雪姫が言^いったとおり、レギオンマスターには、レギオンメンバーを問答無用で強制アインストールに追^おい込^こめる（断罪の一撃）があるのだ。ドラファイト・エッジは、自分の命をグリーン・グランデに預けたに等しい。それこそが、黒雪姫の使^{つか}った、人質という言葉の意味だ。

そのこととつ^つくに気付いていたらしい諺^{ことわざ}が、彼女にしては最大級の感情を内包した声を響^{ひび}かせた。

「ドラフさん！ あなたは、いつもそうなのです！ 同じ四元素の私たちに何も相談しないで勝手なことばかりして、後になって私たちを助けるためだったと気付いても、ぜんぜん嬉^{うれ}しくないのです！」

一ヶ月間、帝城の中で、話はハルユキに言った。

——私の力は、《四神スザク》にはまるで通じませんでした。かつての帝城攻略作戦のおり、対スザクの部隊を率いることを望んだのは私自身です。それが炎であれば、いかなる力であろうとも闘してみせると、当時の私は感かしくも思ひ上がっていたのです。

話は、帝城攻略作戦が失敗し、アクア・カレントとグラフアイト・エッジが無限EK状態になってしまったのは自分の責任だと思い詰めていた。それゆえに彼女は、対《四神ダンプ》用の広範破壊型心意技を独力で開発し、グラフ救出作戦に備えていたのだ。

もちろん無制限フィールドでは、グラフはまだ帝城北門に封印されたままのはずだが、今日ここで再会するとは話も想像していなかったのだろう。長いあいだ押し隠していたものが溢れ出してしまったかのように、話は尚も叫んだ。

「確かに、同じ四元素とはいえ、私とグラフさんには大きな力の差があるのです。その気になればすぐにでもレベル9に……《王》になれるあなたが、私たちを子供扱いするのは仕方ないのかもしれない。でも、それでも、私たちは黒の旗の下に集った仲間だったはず。なぜ、自分を危険に晒す前に、ひとこと言ってくれなかったのですか！」

小柄な巫女から、高温の炎にも似た糾弾を浴びせられた夏剣使いは、両手で両膝を掴むと、ぐっと頭を下げた。

「済まん、デンデン……メイデン。それにレイカーも、カレントも」

今度ばかりは、デタリオンも「第一席が情けない格好をするな」とは言わなかった。三秒ほど頭を下げて続けてからようやく体を起こし、グラフィは真剣味の増した声で続けた。

「グレウォへの移籍を相談しなかったのは悪かった。けど、こいつが公になると、その、何だ……加速世界のパワーバランス的なモンが、ちっと揺らいじまうかなーって思ってる。だからグラフィさんとピリーにも、俺がグレウォに入ったことは内緒にしてくれて頼んだんだ」

「最初は何を勝手なことを、と思ったが……」

口を挟んだデタリオンは、大きな飾りのついたヘルメットを左右に振り動かしした。

「当時は俺も血の気が多くてな、対戦で俺に勝てたらそうしてやると条件を付けて、あっさり負けたわけだ」

続いて、パウンドもヘッドギアを脱いだ頭をやれやれとばかりに振る。

「ピリーに、『今日から五層装甲が六層装甲になって、席次が一個ずつ下にずれる』って言われた時は、何のこっちゃと思ったもんなさ」

「私も」「ワタシも」と、リダナムとサンタンが口を揃える。

「……いやまあ、お前らにも迷惑かけたよ……」

かりかり頭を掻いたグラフィは、ちらりと視線を上に向かした。

「おっと、あと五分か。急がないとな……えーと、さっきテンデンが『すぐにでもレベル9になれる』つつつてたけど、そいつはもう無理なんだ。また勝手なことをって怒られそうだけど、

渋谷エリアの代金として、余剰ポイントをごっそりダッさんに払っちゃったからな」

「……………なんだと？」

と、黒雪姫が怖い声を出す。

「……………ちなみに、何ポイント払ったんだ？」

「ロッタが怖いから内緒だ。まあ、ダッさんはそいつを小分けにして、全部エネミーに喰わせちゃったみたいだけだな。これからしばらくは、ポーナスエネミーの出現率倍増キャンペーンだな、ハハハ」

とダラフが笑い、アツシユが「マジリアリー？」と呟いた。

ハルユキも、内心で「いいなあ……………」と思っただけで、思考を立て直す。

黒雪姫が支払う意思を示した渋谷第一、第二エリア返還の代金は、ダラフ・アイト・エッジが先払いしてくれたらしい。つまり、緑の王はすでに代金を受け取り、しかも使い果たした——自分のためではなく、加速世界存続という大義のためだが——わけで、これでエリアの返還は実現する運びとなった、と考えていいのだろうか。

……………え……………この渋谷エリアが、ほんとにネガ・ネビュラスの領土に？ それって一時的な話？ それとも恒久的な……………？

状況に頭が追いつかず、ハルユキがぼんやり周囲の喜劇ビル群を見回していると——。

「でもな、話はそう簡単じゃないぜ」

ハルユキの内心を見透かしたかのように、グラフが言った。

「ダレート・ウォールは、三年前に渋谷エリアを無事占領したわけだ。同じく渋谷を狙ってた、オシラトリ・ユニヴァーシスの鼻先からかすめ取るみたいにな。具体的に何が起きたかと言うと……帝都攻略でネガビユが大打撃を受けた直後の領土戦、オシラトリは渋谷第一と第二エリアに攻撃登録してたんだ。そのまま戦争が始まれば、両エリアは間違いないく陥落していただろう……」

黒雪姫が無言で頷く。それをちらりと見つつ、グラフは語り続ける。

「しかし、領土戦開始時間である午後四時のわずか五秒前に、ロツタは渋谷エリアを放棄するという奇策を繰り出した。エリアが空白地域になった瞬間、オシラトリの攻撃登録は自動的にキャンセルされ、直後グレウオが両エリアに攻撃登録……オシラトリの再登録は間に合わずに開始時間になって、攻めはグレウオだけだったから戦闘ナシで占領。オシラトリとグレウオの間にはもう相互不可侵条約が発効してたから、オシラトリは二度と渋谷を攻められないまま、三年が経った。その間ずっと、両レギオンは微妙な緊張状態を続けている。もちろん領土戦はないけど、恵比寿や青山界隈の通常対戦じゃ、オシラトリの（七連流星）あたりに痛い目見せられたグレウオのメンバーは多いはずだぜ」

そこでグラフが一息入れると、バウンドとサンタンが同時にフンと鼻を鳴らした。

「そりゃあ連戦連勝とは行かないが、こっちは負けっ放しじゃないぞ」

「ウス。あの連中にイモは引けないデス」

——確かに、緑と白の確執はただならぬものがあるようだ。

しかし、それはむしろ、ネガ・ネビュラスへの渋谷エリア返還を後押しする要素なのではないだろうか。返還の目的は、グレート・ウォールにはできないオシラトリへの直接攻撃なのだから。

というハルエキの思考をまたしても見抜いたのが、ドラフが素早くかぶりを振った。

「冷戦状態だからこそ、このタイミングでの渋谷返還は、グレウオからオシラトリへの明確な敵対行為と取られるだろうな。実質的に不可侵条約を破棄したと見なして、オシラトリが日黒エリアや品川エリアを攻撃してくる可能性さえある。つまり、ちよつと前にレイカーが言ったとおり、グレウオはネガビュへの全面的な協力か、はたまた断交かを選択しなきゃならないってわけだ……いや、断交じゃ済まないかな。ロツタは、グレウオが渋谷返還を拒否したら、領土戦で攻め落とすつもりだろう？」

「無論」

という即座の返答を聞いた途端、デタリオンやバウンドのアイレンズが鋭く光った。しかしドランデは変わらず沈黙を守り続け、ドラフも軽く頷いただけで、再びフェイスマスクを上向ける。

「残り三分か……ま、どうにか本題までは通り着けたな。さっきも言ったが、渋谷第一、第二

エリアの代金は、俺がネガビュ時代の貯金でもう支払ってる。けどそれだけじゃ、ここにいるビリーたちはもちろん、それ以外のレギオンメンバーも納得させられない。俺も、まがりなりにもグレート・ウォール六層装甲第一席として筋は通さなきゃならないしな。そんなわけで、ロッタ……いや、ロータス。正式な領土戦をしろとは言わない。だが、いまのお前たちの力を見せてもらう必要はある」

漆黒の双剣使いは、精悍なフェイスマスクでネガ・ネビュラスの七人をしかと見据えると、緑の王に優るとも劣らない威厳をまとう声で宣言した。

「このステージを、バトルロイヤル・モードに移行する。全力で戦い、お前たちの意志を示せ。それが、渋谷返還の、もう一つの条件だ」



時間の進み方が遅い。

と、橋居美早が考えた途端、さして広くもない室内に叫び声が響いた。

「あーもおー、ガマンできねーっ！」

声の主は、燃えるような赤毛をツインテールに結った少女。ソファにひっくり返って両足をバタバタさせてから、がばつと体を起こす。

「なあバド、やつばあたしたちもこっそり渋谷に行こーぜ！ ステージの隅っこから観戦して
るだけならバレねーよ多分！」

「ダメ」

短く答えてから、壁の古めかしいアナログクロックを見やる。

午後二時四十五分。三時になれば、渋谷エリアでネガ・ネビュラスとグレート・ウォールの
トップ会議が始まる。始まってしまえば最長でもたった一・八秒なので、すぐに結果の連絡が
来るはずだが、そこまでの十五分間が永遠にも感じられる。美早もともと気の長いほうでは
ない、と言うより自他共に認めるせっかちも星人なのだから頭首の提案に乗ってしまいたいの
はやまやまだが、ここはキツバリ言わねばならない。

「会談場に潜り込んで、もし縁に見つかったらぶち壊しだし、それ以前に私のバイクでももう間に合わない」

「……ううー、わーってるよ。言ってみただけ」

赤毛の少女は、小さな背中をソファに預けると、はふーっとため息をつく。

加速世界での猛々しい戦い振りとは打って変わった、十一歳という年齢そのままでの幼い姿に、美早は思わず淡い笑みを浮かべてしまった。それを誤魔化すために、ローテーブルから紅茶のカップを取り上げ、砂糖なしのアップルティーを一口含む。

練馬区板台のケーキ店、(パティスリー・ラ・ブラージュ)の一階パタヤードにある美早のプライベート・ルームに二人はいる。窓はなく、壁もドアも電磁遮断材入りで、ニューロリオンカーをグローバルネットに繋ぐには、テーブル下に設置されたルータと有線接続する必要がある。

シエフ・パティシエールとして実質的に店を切り回している伯母は、いまだきワイヤレスが使えない部屋なんて、と呆れて近寄らないが、それはむしろありがたい。なぜならこの小さな洋室は、実質的に赤のレギオン(プロミネンス)の司令部なのだから。

「……そーいやバド、レベル8のボーンラスはもう取ったのか？」

少女——プロミネンス頭首たる二代目赤の王、(不動要塞)スカーレット・レインこと上月由仁子にそう訊かれ、美早はかぶりを振った。

「まだ」

「へえ、さすがのパドもレベル8ボーナスは達うのか？ 7の時は、《常時全面走行》をあっさり取ったくせに」

にやにや笑いながらそう言われれば、五つも年上ではあるが、子供のように唇を尖らせなくなる。

「ニコだって、8のボーナスは達ってた」

「そりやだって、ヘビーカノンとレーザカノンって言われりや達うだろー！ どっちがどんな性能とか、調べなきゃ解んないし……」

「私も、色々調べてるところ」

先日、レベル6から一気に8へ到達したばかりの美早は、澄まし顔でそう答えると、紅茶をもう一口啜った。

ニコの前で弱音は吐けないが、レベル8のプレッシャーは予想以上のものがあった。七人の王を除けば実質的に最高レベルであり、周囲からの扱いも変わるし、対戦でミドルランカーに負けた時に奪われるポイントも増える。プロミネンスの幹部集団《三獣士》の筆頭として、これまでも全力で戦ってきたつもりだが、やはり心のどこかでレベル6という数字に甘えていたらしい。

美早が最大の好敵手にして最高の目標と見据えるネガ・ネビュラス副長スカイ・レイカーは、

ずっと昔からこの重圧と戦ってきたのだ。きっと、これから対面するダレイト・ウォールの猛者たちの前でも、いつもの涼しげな顔を賣くのだらう。

ニコにはダメと言ったが、その場に同席したかった、という思いは美早の中にも拭いがたく存在する。加速研究会は、誰よりも愛する頭首を拉致し、十字架に磔にした挙げ句、強化外装（インピンシブル）のパーツを四つも奪ったのだ。ネガ・ネビュラスの（時計の魔女）ライム・ベルの、状態変化を巻き戻すという恐るべき特殊能力によって四つのうち三つは戻ってきたものの、スラスト・プロッタが奪われたままになってしまった。

ニコはまったく気にしていないように振る舞っているが、内心では不安を感じていないはずがない。研究会に、今度はこちらから戦いを挑み、スラストを取り戻すのは副長である美早の義務だ。

長いあいだ正体不明だった加速研究会が、こともあろうに白のレギオンの内部組織であると解ったのは一歩前進だが、その事実はまだ、研究会と戦うことの難しさを表してもいる。

黒のレギオンは、白のレギオンの本拠地がある港区第三エリアを落とすという正攻法に出た。今日の会談はその第一歩であり、またそれ以外の選択肢は事実上存在しないことは、美早にも解る。しかし、緑のレギオンとの交渉が成功し、港区第三と隣接する渋谷第二エリアがネガ・ネビュラスに返還されても、それで美早が白のレギオンと戦えるようになるわけではない。領土戦に参加できるのはネガ・ネビュラスのメンバーであり、プロミネンスに所属する美早

にはその権利はないからだ。

黒のレギオンが研究会の隠れ資を引き剥がし、六大レギオンの合同攻撃戦が発動したその晩には、もちろん真っ先に駆けつけるつもりだ。だが、それまで待たなくてはならないのが、実に歯がゆい。事に当たれば即対戦、それこそが（血まみれ仔猫）ブラッド・レバードたる美早のポリシーなのだから。

「……あのさあ、バド」

遅々として進まない時計の針を見詰めながら考えを巡らせていると、ニコが少し迷いの滲む声を出した。

「なに？」

「例の話だけども……そろそろカッシーとボツキーにも相談してみようと思うんだけど、どうかな……」

「……………hm」

即断即決主義の美早も、こればかりは即答できない。

カッシーこと（カシス・ムース）と、ボツキーこと（シスル・ボーキュバイン）は、プロミネンス三獣士の第二位と第三位だ。二人とも、先代赤の王消滅直後の混乱期に頭角をあらわし、新生プロミネンスを表裏から支えてきた功労者で、それゆえにレギオンへの愛着は美早以上のものがある。

そんな二人にとって、ニコが相談しようとしている（話）は相当にショッキングなはずだ。時間をかけて慎重に説明しないと、レギオンの再分裂すら招きかねない。

「……二人いっしょよりは、まずカシスだけに話したほうがいいかもしれない」

躊躇いつつも美早が助言らしきものを口にする、ニコも難しい顔で頷いた。

「そーだな……。ボツキーは聞いた瞬間ハジけるだろうから、そこをカッシーに抑えてもらわねーとな。つっても、カッシーもあれでかなり頑固だからなあ……」

「甘いもの好きだから、ケーキを食べさせれば頭が柔らかくなるかも」

「お、それいいな。じゃあ、ここのカシスムース・タルトで懐柔してみろかな」

「いいかも」

二人同時に短く笑い、同時に時計を見る。午後三時まで、あと二分。

「……ようやくだな」

表情を改めたニコは、そう呟くとテーブルに埋め込まれているXSBコネクタにケーブルを挿し、自分のニューロリンカーに繋いだ。美早も同じようにすると、視界にグローバルネット接続アイコンが表示される。

いまごろネガ・ネビュラスの七人も、渋谷エリアのどこかで残り時間を数えているだろう。加速研究会との最終決戦の第一歩となる交渉がうまくいくことを、遠く離れた練馬エリアから祈ることしかいまはできない。

「……みんなが帰ってきたら、差し入れのケーキを持って会いに行こう」

美早が言うと、ニコは少し驚いたような顔をしてから、光の加減で緑色を帯びる大きな瞳を輝かせた。

「そうだな。でもバドのバイク、ケーキ十個も積めたっけ？」

「NP」

答え、最後のカウントダウンを開始する。

黒雪姫たちには、会議が終わったらすぐさま結果を伝えるように念押ししてあるので、ボイスコマンドを発音する時間を入れても三時を五秒回った頃には着信があるはずだ。

壁のアナログクロックの秒針が、焦らすようにゆっくり、ゆっくりと動いていく。

午後二時五十九分五十七秒。五十八秒。五十九秒。

午後三時。

午後三時一秒。二秒。三秒。四秒。五秒。

六秒。七秒。八秒――。

3

……きつと、ニコとバドさんがやきもちしてるだろうなあ。

と思いながら、ハルユキは自分の目の前に表示された確認ダイアログを見下ろした。

《バトルロイヤル・モードに招待されました イエス／ノー》という意味の英文メッセージは、もちろん初めて見るものではない。いままでにも、ギヤララーからバトルロイヤルに参加したことは何度もある。

しかし、今回ばかりはとても平常心ではいられない。グレート・ウォールの猛者たちと戦うことへの緊張感（きんじやうかん）ももちろんあるが、より大きいのは、双方のメンバーに王——レベル9の「**E**」が含まれているという事実だ。

「……先輩、本当に大丈夫なんですか？」

ダイアログから外した視線を隣に向けながら、ハルユキは小声で訊ねた。

すると黒雪姫（クロユキヒメ）は、すでにイエスポタンを押しているにもかかわらず、軽く首を傾（な）げてみせる。

「さて……」

「さて、つてそんな呑気（呑気）な……。これ、正式な領土戦（りやうどせん）じゃないんだから、適用されちゃうんですよね？ 例の、レベル9サドンデス・ルールが……」

「それは確実だな。何せ、私がレッド・ライダーの首を落としたのも、ノーマル討戦じゃなくてバトルロイヤルだったからな」

「な、なら、やっぱり先輩は止めておいたほうがいいです。先輩に万が一のことがあったら、僕……」

何度目かの説得を試みようとするハルユキの右肩を、黒雪姫は左手の剣の鞘面でばんと軽く叩いた。

「心配してくれてありがとう、クロウ。だが、ここで私だけがギヤラリーに残るわけにはいかない。いずれ白の王と相見えた時には、確実にサドンデス・ルールの下で戦うことになるんだからな……それに、このバトルロイヤルでは、私とグランデは直接戦わないという約束になっている。それを反故にして首を取りにくるような奴なら、そもそもこんな会議には乗らないだろう。むしろ、心配しているのはあっちじゃないかな」

その言葉に、少し離れたところに固まっている緑陣営の様子を見やる。

会談をバトルロイヤル・モードに変更して擬似的な領土戦を行うというアイデアは、緑の王とグラフィイト・エッジの間ではすでに了解されていたらしい。だがビリジアン・デカリオン以下の幹部たちは初耳だったようで、大筋は承となったいまも、アイアン・バウンドが緑の王に何やら盛んに進言している。

思わず耳を澄ませると、その内容はしかし、参加を思いとどませようとしているわけでは

なく、戦場でいかに王の安全を守るかという具体的な作戦案らしい。負けてはならじとハルユキも、

「……解りました、じゃあ先輩はなるべく、いえ絶対に敵陣には突っ込まないで、後ろのほうに……」

と覚悟を決めつつ言いかけたのだが、その時録陣営からのんびりした声が響いた。

「おーい、あと三十秒だぞー。まだボタン押してないヤツ、誰だー？」

発言者は、バトルロイヤルの発案者でもある双剣使いだ。慌てて視界上部を見ると、確かに1800から始まったタイムカウントが0030を切っている。

「えと、あの、とにかく……先輩は、僕が守りますから！」

そう宣言すると、ハルユキはダイアログに指を伸ばした。

いつの間にか、すぐそばに楓子、誠、あきら、タタム、チユリの五人も集まってきている。

頼もしい仲間たちの顔を順に見やり、深く頷き合うと、ハルユキはYESのボタンを押した。

目の前に、『A BATTLE ROYAL IS BEGINNING!!』という英文字が赤々と燃え上がる。モード変更のカウントダウンは十秒。

「だいじょぶだよハル、あたしたちなら絶対勝てる！」

チユリがごく小さな、しかし確固たる声でそう告げると、ハルユキの背中をばんと叩いた。

「ああ……がんばろう！」

いつもハルエキを跳ましてくれる幼馴染にそう答え、両の拳を固く握る。カウントダウンの数字は、勝手に燃え尽きながら次々と切り替わり——ゼロへ。

視界左上に、シルバー・クロウの体力ゲージが勝手に金属音とともに出現すると同時に、空の色が変わり始めた。黄昏ステージの永遠の夕陽が、物凄いスピードで地平線に沈んでいく。茜色を藍色が塗り直し、それを黒が追いかける。

夜のステージだ。(月光) か (墓地) か、はたまた (奇境) か——。

だが、次の瞬間。

ゴウン——と凄まじい揺れが、一同の立つビル全体を震わせた。慌てて周囲を見回すと、予想だにしない光景が眼に飛び込んできた。

対戦ステージの地面が、各所で崩落していく。渋谷駅を中心とするラヴィン・スクエアはいまのところ無事だが、道玄坂や宮益坂方面では建物が次々と地面に呑み込まれ、後には巨大な穴だけが残る。無数の穴はどんどん拡がって互いに繋がり、やがて地面は、幾つかのブロックが浮島のように残るだけとなる。

最後に、黒チームと緑チームが少し離れて陣取る十階建てのビルが、双方の中間地点で轟音とともに二つに裂けた。北側と南側に分離したラヴィン・スクエアの浮島は、徐々に遠ざかり始める。他に十数ヶ所ある浮島も、思い思いの方向にゆっくり動いているようだ。

こんなステージは見たことがない。穴の底はどうなってるんだろう、と裂け目の縁から見下

ろした途端、ハルユキは囁いだ。

「えっ……そ、底がない……!!」

視線の先に存在するのは、あらゆる光を吸い込むような、無限の暗闇。

いや、違う。何かは解らないが、小さな光が幾つか浮かんでいる。光はたちまち数を増やし、白や青、赤色に冷たく輝く。あれは――

「……星……?」

隣で、タカムが呟いた。確かに、星屑にしか見えない。しかし、地面の下に星があるとは、いったいどういうことなのか。

その時、すぐ後ろのチユリが掠れ声で言った。

「ちよっと……上、上見て、うえ」

「え……」

言われるがまま、タカムと同時に顔を仰向ける。

「うあっ……」

二人同時に漏らした声に、謎の「凄いのです……」という喉声が重なった。

頭上にも、やはり星空が広がっていた。しかしそれは、月光や墓地ステージの寂しげなそれとはまったく違った。

明るい。背景は完全な黒なのだが、数え切れないほどの星々が全天を埋め尽くし、赤や青、

黄色の星雲が鮮やかな彩りを添えている。まるで、銀河系の中心部を、すぐそばから見上げているかのような――。

思考がそこまで至った瞬間、ハルユキは再び叫んでいた。

「あつ……ここ、これ、このステージ、まさか……！」

「どうやら、そのまさかのような……」

さすがに驚きを隠せない声で、黒雪姫が肯定した。

「今日あたり実証されるかもとは思っていたが、まさかここで引くとはな。間違いないまい。

これは――（宇宙）ステージだ」

「でも、それにしては、普通に立っていられるの」

というあきらの指摘に、七人は下を見る。確かにアバターの足は、ひび割れたビルの屋上タイルをすっかり踏み締めたまま、浮き上がる気配はない。

「……つまり、宇宙ステージって、宇宙っぽいのは見た目だけで重力はあるってこと……？」
少々拍子抜けしたように、チュリが呟いた、その時。

「ノッ、ノオオオオ――ッ!? ちよつ、だ、誰か、ヘルブミィ……ッ！」

という野太い悲鳴が響いた。再度顔を仰向けたハルユキが見たのは、壮麗な星空を背景に、ふよんふよんと上昇していく世紀末ライダーのシルエットだった。

「……あ、浮いてる……」

ハルユキが言うと、タカムが存在しないメガネを持ち上げながらコメントした。

「どうやら、うかつにジャンプすると、重力が効かなくなるみたいだね。何らかの推進手段を持っていない場合は、浮島の地面に足を着けたまま戦う必要があるってことか……」

「遠距離攻撃ができるなら、その限りじゃないの。無重力空間に浮かびながら、浮島の敵を撃てばいい」

あきらの指摘に、なるほどと頷く。考えてみれば、宇宙を舞台にしたアニメなどではビームライフルやらミサイルやらを撃ち合って戦うわけで、この宇宙ステージにもその原則が適用されると考えてよさそうだ。

しかし、となると――。

「……これは、ちよつとヤバイかも……」

「……？」

振り向くあきらに、懸念を説明する。

「えっと……ヘルメス・コードのレースの時もそうだったんですけど、宇宙ステージは空気がないんで、僕の羽根じゃ飛べないんです……」

「へー」

と他人事のような声を出したチユリが、ひょいと首を傾げる。

「でも、空気がないわりには息苦しくないし、こうして話もできるんだね」

「そ、そこはホウ、突っ込んだじゃダメな所っていうか……」

BBシステムになり代わってフォローを入れてから、ふとあることに気付き、再びあきらかに眼を開ける。銀河の光を受けて美しく輝くアクア・カレントの流水装甲にチャブんと人差し指を突っ込んでみると、表面に小さな波紋が広がる。

「ちよっと、何やってんのよクロウ!」

チユリに左の脇腹をどやされ、慌てて言い訳。

「ち、ちやうねん! ほら、宇宙は絶対零度のはずなのに、カレンさんが凍ってないなーって思っ……」

すると今度は、右側から楓子の突っ込みが入る。

「ちよっと違うわね、鶴さん。宇宙空間には(宇宙背景放射)っていうマイクロ波が充満して、そのせいで絶対零度より摄氏三度だけ温かいのよ」

「……で、でもそれって、マイナス二百七十度くらいですよ? あったかいとは言えないんじゃない……」

「ふふ、そうね。確かに、この宇宙ステージは暑くも寒くもないわね……温度も風も、匂いも感じないわ」

確かに、楓子の着ている薄手のワンピースや帽子のリボンはずっと風になぞいでもない。黒雪姫が、星空を見上げながら唸る。

「うーむ……強いて属性をつけるなら（無）、ということなのかな。これは、何が有効で何が無効になるのか、あれこれ試す必要がありそうだな。とりあえず……そのへんのものを壊して、ゲージを溜めておくか」

「そうですね……」

ハルユキは頷き、すぐそばに立っているコンタリートの柱をパンチで砕いてみた。地形オブジェクトの強度は、黄昏ステージほどではないがかなり脆い。

他のメンバーも柱だの壁だのを次々に破壊し、浮島がほぼ平地になったその時、三十メートルほど離れたところにあるグレート・ウォール側の浮島で、またしても悲しみの声が響いた。

「ノッ、ノオオホホホホ……ウッー オレ様のッー スーパー・マッスライイ……ンが ああああ……ッ!!」

見れば、無重力空間を漂っていたアッシュ・ローラーが、いつの間にか召喚したアメリカンバイタにまたがり、盛んにアクセルを捻っている。だが、自機のVライン・エンジンはぶすんとも言わない。

「あー……空気がないから、昔のエンジンは動かないのか……」

こりやあ僕もアッシュさんもキビシイ戦いになりそうだなあ、と思いつつ見守っていると、リダナム・バイタが地形オブジェクトを壊すのに使っていた日傘をアッシュのほうに向けた。本製のシャフトがするすると伸び、鋭い石突きがバイタのホイールに引っかかる。その状態で

傘を下ろしていくと、バイクはゆるゆると浮島に近付き、やがて両輪を接地させる。

シュツと一瞬で元の長さに戻る傘に、チユリが熱い視線を注ぐ。

「わー、あの日傘ステキ！ 伸び縮みするのがすごい便利そう……どこのショップで売ってるのかな……」

「残念だけどベル、あの傘はリダナムの初版装備だから、たぶんショップには売っていないと思うの」

「ちえーっ」

などと賑やかなやり取りを繰り返すチユリとあきらから少し離れた場所で、霞が暮しい顔をしているのにハルユキは気付いた。ジャンプしないよう気をつけながら数歩移動し、小声で話しかける。

「メイさん、どうかしたの？」

「あ……はい、ターさんも大変そうですが、私もちよつと困ったことになりました……」
「いったい何が、と小柄な巫女をまじまじ眺めてからやっとな気づく。

「あ、そ、そっか……空気がないと、炎も……」

「ええ、たぶん、私の火属性攻撃もほとんど無効になりそうなのです。この大切な一戦で、皆さんの足を引っ張ってしまいそうで……」

しょんぼりと重なる顔の両肩に、ハルユキは無我夢中で手を乗せた。

「だ、だいじょう……」

ぶだよ、のひとことも言い終えられないうちに、闇の体がひょいっと奪い取られる。後方から抱き上げたのは、(ICBM)の二つ名を持つ飄子だった。

「大丈夫よ、メイデン。火炎ダメージがなくてもあなたの力は十分に強いわ。足りないぶんは、わたしが頑張っちゃいますから」

闇をむぎゆうりうつと抱き締めてから、天を仰いで叫ぶ。

「――着装、(グイルスラストー)!!」

すると、満天の星空から、二条の光線が降り注いで飄子の背中に命中する。眩い閃光が弾け、ワンピースと飄子が散り散りになって消えると、背中には流麗なフォルムの強化外装が出現している。かつてハルユキも惜りたことのある、圧倒的推進力を秘めたロケット・ブースターだ。宇宙ステージでもまったく問題なく使える――いや、本来このステージを飛翔するために創造された、スカイ・レイカーの翼。

グイルスラストーを装着した飄子は、抱いたままだった闇を優しく下ろすと、ハイヒール状の両足で音高く地面を踏み鳴らした。これまでの柔らかな雰囲気を一変させ、凛とした声を響かせる。

「――かつて、ヘルメス・コードの最上部で、シルバー・タロウは言いました。私、スカイ・レイカーは、星の海を飛ぶために生まれた宇宙戦用デュエルアバターなのだ、と。その言葉が

「真実であつたと、わたしは今日、ここで証明してみせます」

「うむ、頼んだぞ、レイカー。私は敵陣に斬り込めないルールなので、前線はお前に任せる。大暴れしてやれ」

「もちろん！」

打てば響くような、頭首と副長のやりとりが、数十メートル離れた敵陣にも届いたかのよう
に――。

南に漂う浮島の上で、ダレート・ウォールの七人が、一斉に身構えた。どうやらあちらも、新ステージの検分と必殺技ゲージの充填を終えたいらしい。タイムカウントは、残り一五二三秒。数字が一五〇〇まで到達した瞬間に戦闘が開始されると、ハルユキは直感した。と言っても、飛べないカラスにできることは少ない。せいぜい、誰かの盾になるくらいのこと……。

「……あ、いや、ちよつと待てよ」

眩き、敵チームを再度監視する。

緑の王ダリーン・グランデは浮島の後方に下がり、大盾（サ・ストライフ）をでんと構えている。その手前に一列になって並ぶのは、剣闘士のピリジアン・デクリオン、ボクサーのアイアン・パウンド、カンフー使いのサンタン・シェイファー、なんだか樹っぱいリダナム・パイタ、動かないパイタにまたがるアッシュ・ローラー、そして黒衣の双剣使い、グラファイト・エッジ。

「……あの、先輩。もしかして、あっちには連絡型っていませんか？」

「ん？ ……………む、確かに、そうかもしれん」

「せいぜいアッシュさんのバイクのミサイルくらいで……でもあれは連発できないし、こっちには同装備のメイさんと遠隔必殺技持ちのバイルがいますから、つてことはこの状態のまま、二人が撃ちまくればそれで勝てるんじゃないか……？」

「……そんな気が、してきちゃったの」

あきらも、こくりと頷く。

二つの浮島はすでに三十メートル以上も離れている。この距離をジャンプで渡するには、助走したうえで思い切り跳躍する必要があるが、それをした瞬間、先刻のアッシュ・ローラーのように星空のどこかに飛んでいってしまうはずだ。

「……………」

ネガ・ネビュラス一同が、実に微妙な雰囲気包まれつつ顔を見合わせた瞬間、残り時間が一五〇〇秒に到達した。

ハルユキたちが気を緩めたのは、ほんの一瞬だった。

だがその時にはもう、敵に先手を取られていた。

敵戦列の中央で、グラフィイト・エッジがふわりとジャンプする。体を深く前に倒し、脚を折り畳む。その足裏めがけて、アイアン・バウンドが渾身の右ストレートを撃ち込む。

ドウツー という衝撃波がステージを震わせた。直後、双剣使いの体が、ブースターに点火したかの如く、猛然たる勢いで飛び出した。ドラフは、バウンドのストレートを絶妙のタイミングで蹴ること、水平方向に急加速したのだ。これなら、星空に飛んでいってしまうことはない。

「――来るぞー」

黒雪姫の声に、諺が長弓（フレイム・コーラー）を引き絞った。弦が鳴り、放たれた矢は、火炎の代わりに白銀色の尾を引きながら、正確に双剣使いのフェイスマスクへと吸い込まれていく。

しかしドラフは、右肩から抜いた長剣の腹で諺の矢を受けた。カーン！ という甲高い音が響き、矢は果敢なく弾かれて星空へと消えていく。

「くっ……」

ハルユキは無我夢中で前に出ると、両拳を構えた。剣、つまり切膚属性攻撃への耐性は、チームの中ではメタルカラーのシルバー・クロウが最も高い。ドラフアイト・エッジの相手はハルユキがしなくてはならない。

だが、片方の剣だけを抜いたドラフは、再び予想外のアクションを繰り出した。

まだ無重力空間を飛翔している間に、右手の剣を高々と振りかぶり、必殺技であろう技名を叫んだのだ。

「――（バーチカル・スクエア）目」

長剣が、目にも留まらぬ超高速で悉く四回、垂直に斬り払われた。鮮やかなブルーの軌跡が、虚空に巨大な正方形を描き出す。しかし、まだハルユキとは遠く離れている。剣先が届くはずがない。

――空振り？ ただのデモンストレーション……？

では、なかった。

単なるライト・エフェクトかと思われた、一辺三メートルほどもある青い正方形は、その場で消滅する代わりに縦回転しながら前進し、黒チームが陣取る浮島に触れた。

今度こそ、確かな震動をハルユキは感じた。光の正方形が、コンタリートの浮島を切り裂きながら、ハルユキに迫る。

「避ける、クロウー」

後方から放たれた黒雪姫の声に押されるかのように、ハルユキは真横に体を投げ出した。右足の爪先を青い光が擦れ、チツと小さな火花を散らした。

正方形は、そのまま浮島の中に沈み込み、見えなくなる。

一秒後。

差し渡し三十メートルはあろうかという浮島が、バガツ、と音を立てて真っ二つに割れた。

「う、うわわっ」

慌てて地面にしがみつこうとしたハルユキは、突然仮想の重力が弱まるのを感じた。デュエルアバターの重さがほとんど半減し、激しく震える浮島から振り落とされそうになる。

「み、みんな……!」

どうにか姿勢を安定させつつ振り回くと、分断された浮島の、ハルユキと同じ側に立つタタムとチユリと黒雪姫、そしてもう一方に立つ楓子と譲とあきらも、両腕を広げたり腰を落したりしてバランスを取っている。

恐らく、浮島が破壊されて小さくなればなるほど、発生する重力も弱まるのだろう。この不安定な足場では、精密な射撃は覚束ない。

しかしより大きな問題は、グラフィイト・エッジが、最初からこの重力減少を狙って浮島を斬ったのか否かだ。もし狙っていたなら、双剣使いは宇宙ステージを知っている、ということになる。

黒衣のアバターが、ふわりと音もなく着地したのはハルユキ側の浮島だった。頼りない重力に途惑う様子もなく、完全に体を静止させている。

右手の剣を肩に担ぐと、グラフィイトはのんびりとした声を出した。

「まさかここで、実装されたばかりの《宇宙》を引くかーって感じだよな。最後にボタンを押したのはお前だろ、シルバー・クロウ? ツモ運がいいんだか悪いんだか」

——え、僕が引いたことになってるの?

と慌てるハルユキのすぐ後ろから、鋭い声が投げ掛けられた。

「……宇宙ステージが初めてではないような口ぶりだな、グラフ？」

ホバー移動でハルユキの前に出た黒の王の問いかけに、双剣士は軽く肩を上下させる。

「まさか、もちろんここじや初めてだよ。けど、他のゲームなら、似たようなマップで戦ったことは何度もあるからさ……基本、宇宙だと遠隔技持ちが有利すぎるんだよな。つてわけで、乱戦にさせてもらうぜ」

そう宣言するや、担いでいた剣をゆるりと振りかぶり――。

「(スラント)！」

再びの技名発声とともに、斜めに振り下ろす。青い剣光がハルユキと黒雪姫の目の前を過ぎ、灰色のコンクリートに一直線のラインを刻み込む。

ゴゴン―と再び地面が揺れた。またしても必殺技の一撃で切断された浮島が、震えながら分離していく。当初の四分の一になってしまった足場に慌ててしがみつくが、重力も更に減少し、もうほとんどアバターの重さを感じられない。

グラフの二撃目が合図だったかのように、数十メートル離れた緑陣営の島から、グラフデを除く五人が一斉に――アッシュ・ローラーはバイクから降りて――飛び出した。どうやらこの低重力下で大人数の混戦に持ち込み、遠隔攻撃を無効化するつもりらしい。

しかし、先にハルユキが推測したとおり、ただ斜め上空にジャンプしただけではすぐに浮島

の重力圏を外れ、星空めがけて飛んでいってしまうはずだ。五人はどうやって軌道を変えるつもりなのか、と這いつくばったまま眼を見開いていると――。

「(ディスタント・シールド)」

重々しい技名発声が、飛翔する五人の後方から響いた。声の主は、浮島に残る緑の王。右手の大盾(ザ・ストライフ)を高々と持ち上げ、激しく地面に打ち下ろす。

ずしん、という衝撃波が広がった、その直後。

グレート・ウォールの五人の前方に、巨大な十字盾が出現した。色も形もザ・ストライフとまったく同じだが、背後の星々が透けるそれは、しかし確かな実体を持っていた。アイアン・バウンドたちは幻の盾を次々に蹴り、ジャンプの角度を変える。

「来るよッ！」

チユリが叫んだ直後、黒雪姫が矢継ぎ早に指示した。

「グラフは私が相手をする！ バイルとベル、メイデンとカレントでそれぞれチームを組んで敵に当たれ！ クロウとレイカーは自由に戦ってよし！」

「了解!!」

ネガ・ネビュラスの六人も、声を揃えて叫ぶと連撃態勢を取った。

上空から接近するバウンドたち目掛けて、論が一足先に矢を射掛け始める。そのほとんどはビリジアン・デタリオンの円盾に阻まれるが、挑発効果はあったようだ。五人は空中で互い

に押し合つて二手に分かれ、デカリオンとパウンドは諸たちが陣取る浮島へ、そしてリダナムとサンタンとアツシュがハルユキたちの島へと降下してくる。

重力の薄い地面から慎重に立ち上がると、ハルユキは黒雪姫から離れ、タクム、チユリと並んで身構えた。指示された役割は遊軍だが、敵が三人来るなら迎え撃たねばならない。

一秒後、まずリダナムとサンタンの女性型コンビが見事な身のこなしで着地し、続いてアツシュが両手両足でビタン！と地面に貼り付く。

恐る恐るといった様子で立ち上がろうとする世紀末ライダーに向けて、ハルユキは思わず問いかけた。

「あの、アツシュさん。バイク無しで、何しに来たんですか」

「ウルツセイ！ そーゆーオメエも空気がしじや飛べねーだろ！」

びしっと指さされれば、むぐつと黙るしかない。思い返せば、バイクから降りたアツシュ・ローラーと戦うのは、バーストリンカーになって二度目の対戦以来だ。あの時は、ニュービー丸出しなドツキ合いの末にハルユキが勝利したが、あれからもう八ヶ月以上が経つ。アツシュ本人の戦闘力が当時と同じだとは考えないほうがよさそうだ。

「……解りました、油断はしません！」

宣言し、ハルユキは両手をびしっと前で構えた——のだが。

コガネムシの名を持つチャイナドレス姿のアバターが、手振りアツシュを下がらせると言

った。

「アッシュはリダナムと組んで。シルバー・クロウとは、まずワタンが戦うデス」

「へっ……？」「ホワイツ？」

同時に叫ぶハルユキとアッシュにはもう答えず、サンタンは中国拳法の型と思われる、優美かつ剛悍な演武を短く披露した。通常の四分の一の低重力環境であることをまるで意識させない、ずしりと落ち着いた構えを取ると、叫ぶ。

「バウンド大哥にタイマンで勝った腕前、見せて貰うデス！」

「い、いや、あれはっ……」

——クロム・ディザスターになってた時の話でっ。

という脅喝を口にする余裕は与えられなかった。ひび割れたコンクリートの上を、するすると滑るような歩行で、サンタンが急激に間合いを詰めてくる。

「呀！」

短気合いとともに突き出される右手は、拳を握っていない。ハルユキは咄嗟に顔面狙いの掌底打ちだと予測し、両腕でガードしようとした。しかし。

サンタンの掌は、ハルユキの左手首あたりに柔らかく触れただけだった。ダメージはなかったが、背筋に冷たい戦慄が走る。慌てて手を引こうとしたが、その時にはもう、吸い付くような掌に手首を掴まれていた。

逃れる隙もなく、一瞬でハルユキの左腕が内向きに回転し、肘関節と肩関節が可動域の限界で激しく軋む。その状態で、今度こそサントンの左の掌打が飛んでくる。

「くっ……！」

辛くも右腕でガードしたが、インパクトの瞬間、極められた左腕の関節から火花が散った。鋭い痛みとともに、体力ゲージが五パーセントほど削られる。

ゴードルの下で歯を食い縛りながら、ハルユキは遅まきながら悟った。

重力が四分の一ということとは、単純な打撃攻撃の威力も四分の一かそれ以下になるということだ。ただ蹴ったり殴ったりしても大した効果はないし、反動で自分が地面から浮き上がってしまいかねない。この状況の格闘戦で的確にダメージを与えるには、相手をしっかりホールドした上で打撃を入れるか、あるいは関節技を仕掛けるしかないのだ。サントンが繰り出した、左腕を極めつつ右手で打つという攻撃は、その両方を同時に行う高度な技だ。

恐らくサントンたちは、宇宙ステーションの低重力環境での戦いかたを、事前にドラフからレタチャーされているのだろう。

懸命に考えを巡らせつつ、ハルユキは極められたままの左手首をどうにか振り解こうとしたが、サントンの右手は接着されてしまったかの如く外れようとしなない。

「無駄デス！ ワタシの掌は微細な吸盤の集合体、力じや外せないデスよ！」

「なっ……」

なにそれ怖っ！ と一瞬考えてしまったが、確かにガラスを登れる昆虫の足はそういう構造になっていると何かで読んだ気もする。

「……なら！」

ハルユキは、左腕の痛みを堪えながら、右足で回し蹴りを放った。胸が接触されているなら、こちらの打撃も通じる理屈だ。

しかし、

「甘いデス！」

絶妙のタイミングで左腕を引かれ、蹴りの軸がブレてしまう。サンタンは左前腕部の分厚い装甲でキックを軽々とガードすると、お返しとばかりに蹴りを放つ。

「哈ッ！」

脚が真上にピンと伸びる見事な垂直蹴りが、ハルユキの下顎を掠めてダメージを三パーセント削り取った。

ハルユキも近距離での格闘戦は決して苦手ではない、というより主たる攻撃手段なのだが、高速の三次元機動が持ち味なので、間合いゼロの密着を強いられているこの状況は分が悪い。どうにかして、相手をこちらの土俵に引きずり込まねばならない。

……腕が、外せないなら！

腹を括り、ハルユキは体を沈めた。

「うりゃあー」

両足で、思い切りジャンプする。サントタンも、足の裏にまでは吸盤がなかったようで、ハルユキにくっついたまま地面から離れる。

「何デスロ」

急いで手を離そうとするサントタンの右手首を逆に握み、引き寄せる。薄い重力はあつというまに消失し、二人は無限の星空めがけて上昇し始める。こうなれば、遠く上空に存在するはずのステージ境界面にぶつかるか、運動エネルギーを発生させ得る必殺技を使う以外に、浮島に戻る方法は存在しない。

「このっ、離すデスー」

さすがに焦りの色が滲む声でサントタンが叫び、再びハルユキを離ろうとした。だが、双方の体がぐるぐる回転してしまうだけで、まともな攻撃にはならない。事前にレクチャーされてはいても、初体験の完全無重力環境下でいきなり戦えはしないだろう。

もちろん、宇宙戦が初めてなのはハルユキも同じだ。しかし、よくよく考えてみれば、似た状況ならば何度となく経験している。すなわち、超高空からの自由落下。

落下中は、キックもパンチもまともに当たらない。効果があるのは、完全に相手を拘束したうえでの攻撃のみ。

「失礼します！」

無意識のうちにそう断りながら、ハルユキはサンタンの背中側に回り込むと、チャイナドレスを着た細い胴体に両腕を回してありつたけの力で締め上げた。

デュエルアバターは呼吸しないし血流もないので、本来の意味での絞め技は一切効かない。ダメージを与えるには、相手の装甲を破壊するほどの圧力を加える必要があるが、シルバー・クロウにそこまでのパワーはない。

「無駄……デス！ ワタシの装甲は、こんな力では砕けません！」

サンタンが叫び、両手でハルユキの腕を外そうとし始める。その言葉どおり、甲虫モチーフだけあって装甲強度はかなりのものだ。このまま締め続けていても、小さなひび割れを作れるかどうかというところだろう。

しかし、ハルユキの狙いは他にあった。

相手の意識が絞め技からの脱出に向いた瞬間、両腕をわずかに緩めて滑らせ、サンタンを抱えたまま前腕部をクロスさせる。同時に上体をいっばいに仰け反らせながら、叫ぶ。

「ヘッド……………」

シルバー・クロウのフェイスマスクが純白に輝き、星々の光を遠ざけた。クロウの腕を外すことにやつきになっていたサンタンは、ほんのわずかだが反応が遅れた。

「……………バァ———クッ！！」

目の前の後頭部に、ハルユキは渾身の頭突きをぶちかました。

《矛盾存在》 グラファイト・エッジ。

二つ名の理由は、何でも切れる剣と何でも防ぐ盾の双方を重ね備えているからだ。もっとも、正しくは《盾》ではない。

グラフが右手で構える長剣、固有名（ルークス）は、エッジ部分が融消しの黒、刀身部分がガラスのように透明な素材で構成されている。それゆえに、暗いところでは、まるで細い黒棒だけでできているようにも見える。

エッジを成すのは、単分子シート（グラフエン）の積層材。刃の先端部は分子ひとつぶんの薄さしかないため、加速世界のあらゆる物質を切り裂く。

刀身を成すのは、炭素分子ボールの超集体である（ハイパーダイヤモンド）。圧倒的な硬度と塑性を誇り、加速世界のあらゆる物質を阻む。

まだ抜いていないが、グラフはまったく同じ外見、同じ性能の長剣（アンブラ）を左肩にも装備している。ならば、剣で剣に斬りつけたらどうなるのか。それは古来より多くのパーストリンカーが抱いてきた疑問だが、グラフはにやにやするばかりで教えなかった。

かつては《地》の四元素、そして今は六層装甲第一席たるグラフアイト・エッジと戦うのは、

実に三年ぶりだ。考えてみれば、最後の対戦の舞台となったのもラヴィン・スクエアの隣に建つ商業ビル、渋谷ヒカリエの屋上だった。

あの時は双剣によるクロスガードを破れずに惜しくも敗れたが、今日こそは三年間の成長を見せつけてやらねばならない。この模擬闘士戦を落とすわけにはいかないし、何よりグラフィイト・エッジは、黒雪姫の剣の師なのだから。

「……まずは、二本目の剣を抜かせないとな」

油断なく身構えながら黒雪姫が言うのと、グラフィはフェイスマスクの奥でにやりと笑った――ように思えた。

「そいつは楽しみなな。ずいぶん長い間、左は抜いてないからな」

「そもそも対戦自体が無沙汰じゃないのか」

「言われてみればそうかもしれん」

相変わらず人を食った物言いだ。が、右手に握られた長剣の切っ先は、この超低重力ステージでもびたりと静止している。

対峙を続けながらも、黒雪姫はさつと周囲の状況を確認した。

グラフィの遠近両用型必殺技（バーチカル・スクエア）によって分断された浮島の、左側の島に黒雪姫は立っている。同じ島では数秒前までシルバー・クロウとサンタン・シェイプアールが戦っていたが、クロウが自らジャンプして無重力ゾーンに飛んでいってしまったので、いまは

視界に捉えられない。

少し離れたところで、シアン・バイルとライム・ベルのコンビが、緑のリダナム・バイタ・アッシュ・ローラーを相手にしている。バイルとベルは二人とも接近戦を得意としているが、慣れないステージに加えて、リダナムの伸びたり縮んだり開いたり閉じたりする日傘に幻惑されてしまっているようだ。しかし、まだ大したダメージは受けていない。

右側に遠ざかりつつあるもう一つの浮島では、アクア・カレントがアイアン・バウンドと、スカイ・レイカーがビリジアン・デクリオンと戦っている。バウンドの打撃をカレントが水流装甲で受け流し、デクリオンの斬撃をレイカーが手刀で捌いているあいだに、後方に下がったアーダー・メイデンが射撃する作戦らしいが、バウンドの鉄甲とデクリオンの円盾を突なしの矢ではなかなか射貫けないようだ。

両チームとも戦局は膠着状態だが、誰かが必殺技を使い始めれば大きく動くだろう。黒雪姫も、いつまでも睨み合ってはいられない。

「……こちらこそそろそろ始めるか、グラフ」

黒雪姫がその声を発しつつ右手の剣を持ち上げると、グラフアイト・エッジもまったく同じ構えを取った。

「いつでもいいぞ、ロッタ」

「言っておくが……三年前のようには行かないぞ！」

叫び、右足の切っ先をコンタリートに突き刺して、後方に押しやる感覚で蹴り飛ばす。

これほどの低重力環境だと、ダッシュするために地面を蹴った瞬間アバターが浮き上がった。しかし、両足をスパイクとして使えるブラック・ロータスはその限りではない。地を這うような低空ダッシュから、左下に構えた右手の剣を斜め上に斬り上げる。

グラフは、その一撃を難なく長剣で受けた。しかし、そこまでは計算済みだ。黒雪姫の狙いは他にある。

「とっ……」

小さく声を漏らしたグラフの体が、斬撃のエネルギーを吸収しきれずにふわりと浮いた。

その隙を逃さず、右足を地面に突き刺しながら、左手の剣で再度斬り上げ攻撃。今度も剣でバリエされたものの、グラフは更に浮き上がる。

普通なら最も威力が乗る上段斬りではなく、下段斬りをメインに使うことが、宇宙ステージでの剣を使った戦闘のキモだ。下からの攻撃なら、地面に脚を突っ張ることで最大限のパワーを引き出せるし、それを防衛した相手を浮かせる効果もある。しかも、いったん地面から離れてしまえば、剣使いに反撃のすべはない。

——行くぞ！

心の中で叫びながら、二メートルばかり浮き上がったグラフの真下に潜り込む。両足を折り畳んで体を低くしながら、右腕を真上に向けて引き絞る。

「――(デス・バイ・ビアーシング)!!!」

全力の技名発声が、外燃機関じみた金属質のサウンド・エフェクトに掻き消される。青紫色のライト・エフェクトが、暗いステージを鮮やかに照らし出す。

体を思い切り伸び上がらせながら、黒雪姫は必殺の突きを垂直に放った。

グラフィット・エッジが取り得る行動は二つ。剣によるバリエーションがブロッタ。だが、文字通り地に足のついていない通常技で軌道を逃らされるほどブロッタ・ロータスのレベル5必殺技は甘くないし、ブロッタならば、仮にハイパーダイヤモンドの刀身を砕けずとも、グラフィットは星空の彼方まで飛んでいってしまうはずだ。戻ってくるまでのあいだに、他のメンバーを一人でも倒せれば上等。

致死の輝きを帯びた(終決の剣)の切っ先が、双剣使いの胸へと迫る。王の必殺技にタリティカル・ポイントを買われれば、いかなハイランカーでも即死確定なのに、右手に握られた(ルークス)は動き出す気配がない。

――バリエーションでも、ブロッタでもない？

――構わん、ならば貫くまで！

「オオッー」

短く吼えながら、黒雪姫はグラフィットの薄い胸郭装甲をぶち抜こうとした。

そこでようやく、双剣使いが反応した。しかし、動いたのは右手ではなく、左手だった。

何も持っていない、男性型にしては華奢な手が、黒雪姫の剣の切っ先を無造作に掴む。

《絶対切斷》の二つ名の由来となった黒の王の四肢剣は、触れたものの全てを切り裂く。例外は王たちの持つ七の神器、歴代クロム・ディザスターの武器、そしてグラフアイト・エッジの双剣くらいものだ。ことにグラフは、スカイ・レイカーに《剣が本体のヒト》と言われたほど、デュエルアバター本体の防衛力は低い。

ゆえに黒の王の剣を、しかも必殺技発動中に握ったグラフの左手は、五本の指が瞬時に落ちるはずだった。だが――。

「ッ!?」

黒雪姫は、驚愕のあまり息を呑んだ。必殺の威力を秘めた突きが、まるで分厚いゴムの塊に受け止められたかの如く減速していく。切っ先を握るグラフの左手の隙間から、青紫色の輝きだけが空しく拡散する。指は一本も切斷されていないし、視界右上に表示されたグラフの体力ゲージも一ドットたりとも減っていない。

胸部装甲に触れる寸前でエネルギーを失い、完全に静止させられた自分の剣を見上げながら、黒雪姫は囁いた。

「……いったい、何をした」

答えは、憎たらしいほどの余裕に満ちていた。

「お前に《柔法》を教えたのは俺だぜ、ロット」



黒雪姫の剣を左手で握ったまま、グラフィイト・エッジは剣を軽く振った。

漆黒の単分子ブレードが、突き上げられたままの剣の側面に触れた。キン、と軽やかな音とともに、自分の右手の先端十五センチほどが呆気なく切断されるのを黒雪姫は見た。

渾身の頭突きがサントタン・シェイファアの後頭部を突えた瞬間、純白のライト・エフェクトが両者の装甲を眩く輝かせた。メタルカラー並みの強度を誇っていたサントタンの装甲が放射状にひび割れ、微細な破片を散らす。

シルバー・クロウ唯一の必殺技たる（ヘッド・バット）は、物理／打撃とエネルギー／光の二属性を兼ね備える。物理ダメージの大部分は分厚い装甲に阻まれたろうが、光ダメージは非指向性の衝撃波となってアバター素体まで浸透したはずだ。

「クッ……」

呻いたサントタンの体力ゲージが、二割近くも減少した。

直後、両者は、まったく同じ勢いで前後に弾き飛ばされた。サントタンは、ステージの空を彩る星の海へ。そしてハルユキは、下方の浮島へ。

通常対戦ステージの空には境界障壁があるので、サントタンがこのまま宇宙のどこかに飛んで

いつてしまうことはないはずだ。しかし、障壁に当たって跳ね返ってくるにはかなりの時間がかかるだろう。その前に浮島へと戻り、リグナム&アッシュ相手に苦戦しているらしいタムとチユリに加勢せねばならない。

無重力空間を一直線に降下しつつ、ハルユキは両眼を見開いて戦況を確認しようとした。途端、浮島の片方で鮮やかなバイオレット・ブルーの閃光が発生し、周囲を染め上げた。あれは――黒の王ブラック・ロータスの必殺技、〈デス・バイ・ビアーシング〉の光だ。

眼を凝らせば、双剣使いグラファイト・エッジが地面から浮き上がり、黒雪姫はその真下に潜り込んでいる。あの体勢から刺突系必殺技を放てば、仮にブロックされてもグラファの体は真上に弾かれ、サンタン同様に星空へと飛んでいつてしまうはずだ。

さすが先輩、とハルユキが右拳を握った、その時だった。

槍のようにグラフを貫くはずだった必殺技の光が、四方に拡散し、消えた。直後、ハルユキの視界右側に、敵チームのそれと並んで表示されている黒雪姫の体力ゲージが一刻以上も減少した。

「――先輩！」

何が起きたのか解らないまま、ハルユキは叫んだ。恐らくは、グラフが何らかの手段で〈デス・バイ・ビアーシング〉を弾き飛ばされることなく防衛し、直後にカウンター攻撃を決めたのだ。

やはり、かつての四元素、そしていまの六層装甲第一席はただ者ではない。降下目標をタムたちの所から黒雪姫の傍に變更しようとして、ハルユキは歯を食い縛った。

ダラフは私が相手をする——戦闘が始まる直前、黒雪姫はそう宣言したのだ。である以上、このままやられてしまうような黒の王では絶対じゃない。ここは、信じて任せる。

そう決意すると、ハルユキは黒雪姫から視線を外し、タムとチユリの戦場を注視した。

シアン・パイルの右腕に装備された大型強化外装（杭打ち機）は、この宇宙ステージでも、浮島に足を着けている限りは有効な武器だ。しかし、無重力圏に出た瞬間、鉄杭の威力はほぼ失われる。なぜなら、杭を射出する瞬間、反動を吸収できずに体が後方へ押し出されてしまうからだ。

タムはその事態を避けるため、万が一にも浮き上がってしまったわないう、慎重に動いている。しかしそのせいで、軽量のリダナム・バイタを鉄杭の射程に捉えられずにいるらしい。一方リダナムの主武器である日傘も、伸縮、開閉しつつタムを幻惑してはいるが、シアン・パイルの装甲を貫くほどのパワーはないようだ。

片や、アッシュ・ローラー対ライム・ベルの戦いは、いつそうシンプルな展開となっている。具体的には、

「この……！ 待て……！」

と喚きつつ打撃武器（タワイアー・チャイム）を振り回すベルから、

「オレ様ネバー・ストップ!」

と叫びながらアッシュが逃げ回るだけ。アメリカン・バイクから降りたライダー本人に戦闘能力はほばないはずだが、逃げ足だけは健在らしい。低重力環境で器用にびよーんびよーんとジャンプし続け、チェリに近づかせない。

リグナムもアッシュも、頭上から近づくとハルユキにはまだ気付いていないようだ。どちらを奇襲するべきか、と考え——ふと顔をしかめる。

リグナム・バイタとアッシュ・ローラーがチームを組んだのは、無意味な編成ではあるまい。何らかのシナジー効果があるからこそこのコンビのはずなのに、現状、二人ともただ逃げ回っているだけにしか見えない。時間稼ぎなのかもしれないが、通常対戦ステージに変遷は起きないし、いったん始まったバトルロイヤルに援軍が乱入してくることも有り得ない。

——いや、あれこれ悩む前に倒すんだ!

腹を括り、ハルユキは着地点により近いリグナムを奇襲するべく狙いを定めた。

その時だった。遠く離れた浮島の向こうから強烈な光源が出現し、ステージに白黒のコントラストを描き出した。

「た……太陽?」

思わず叫んだハルユキの声を、下方で響いた女性の声が極き消した。

「——(カルビン・サイクル)!!」

タカムに対して防戦一方だったはずのリグナム・パイタが、太陽の出現を待ちわびていたかの如く、足を止めて右手の日傘を高々と掲げる。その傘が急激に巨大化し、リグナムの姿を覆い隠す。

どんな技なのかは解らない。だが、黙ってやらせる訳にもいかない。

両足を深く折り曲げて着地の衝撃を吸収すると、ハルユキはリグナム目掛けて走った。同じことを考えたらしいタカムも、右手の杭打ち機を構えながら距離を詰める。

リグナムの必殺技は、どうやら変身系だったらしい。ドレスを着た胴体は細い円筒と化して伸び、足は地面に同化する。上半身は円錐状に膨らんだ日傘に吞み込まれ、見えなくなる。

この形は、木だ。高さ三メートルにも達する、緑の大樹。

「うおおっ！」

直径三十センチほどの幹をへし折るべく、ハルユキは回し蹴りを繰り出した。反対側では、タカムが両足を踏ん張り、杭打ち機を発射した。

ガガアアアン！ と凄まじい衝撃音が轟き——ハルユキとタカムは、ほぼ同時に跳ね返されて、背中から地面に倒れ込んだ。

「む……無傷だ」

尻餅をついたまま、タカムが驚愕の声を漏らす。リグナムの胴体改め幹には傷ひとつついていない。ハルユキの脳裏に、会話開始前にアタア・カレントが囁いた言葉が甦る。

——リダナムバイタっていうのは、世界でいちばん硬いって言われてる本の名前。

つまり、これはリダナムの、攻撃を捨てた完全防御形態なのだろうか。ならば、彼女の時間稼ぎは、樹に変身したいまま続いているのか。

というハルユキの推測は、直後に破られた。

巨大な円錐体と化した日傘改め樹冠の表面に、ライトグリーンに輝く幾何学模様（カタチガタ）が浮き上がる。光は、幹を伝って根元へと流れていく。あたかも、陽光を浴びた樹木が光合成でエネルギーを生み出すかのように。

根元に集まった光は、一本のラインとなって地面を流れ、十メートルほど離れた場所にいたアツシュ・ローラーに接触した。途端、

「ヘイ、ヘイ、ヘエエエ……イヨ」

立ち止まったアツシュが威勢良く叫んだ。

「来たぜ来たぜえ、ギガ・みなぎってきたぜえええヨ 待たせたなオマエら!! こっから!!」

オレ様のヨ! タ——ンだぜええええ——ッ!!」

びしっ、と両手でハルユキたちを指さす。瞬間と立ち止まっていたチユリが、我に返ったように走り、左手の大型ベルを振り上げる。

「アンタのターンなんてネバー来ないのよ! そこで寝てな——い!」

とチユリが叫ぶのと、

「（ハウリング・パンヘッド）オオオオ!!!」

とアッシュが喚いたのはほぼ同時だった。

その必殺技名は記憶にあった。アッシュ・ローラーのバイクに装備されたランチャーから、対空ミサイルを発射するのが（フライング・ナックルヘッド）で、対地ミサイルを発射するのが（ハウリング・パンヘッド）。しかしバイクは遠く離れた練陣営の浮島に置きっぱなしで、アッシュに操作できるはずがない——……

いや、違う。

「ベル、逃げる！」

それを視認する前に、ハルユキは指示していた。直後、ステージの北側から、二つの光点が猛スピードで飛来するのが見えた。シーカーレンズの一つ目を赤く輝かせる、大型のミサイル。アッシュは、バイクに乗っていない時でも、技名発声だけでミサイルを遠隔発射できるのだ。

「わわわっ！」

チユリは両足で急ブレーキを掛けると、くるりと振り向いてハルユキのほうに戻り始めた。だがミサイルの飛翔速度は、全速で飛ぶシルバー・クロウに追いつくほどだ。ただでさえ走りにくい宇宙ステージで、足だけで振り切れるはずがない。

その時、十五メートルほど離れた場所にいたタクムが、上体を大きく反らしながら叫んだ。

「（スプラッシュ・ステインガー）!!!」

シアン・パイルの胸アーマーが左右に開き、そこから小型のニードル・ミサイルが立て続けに発射される。樹木モードのリグナム・バイタを掠めて飛び、アッシュのミサイルを左側から返え撃つ。

小型ミサイルの群れと二発の大型ミサイルが交錯するのと、体を前に投げ出したハルユキがチユリを纏まえて地面に引き倒したのはほぼ同時だった。

真っ赤な閃光、そして轟音。浮島全体が激しく震動し、チユリをかばうハルユキの全額装甲に、微細な破片を含んだ熱波が叩き付けられる。直撃は免れたのに、体力ゲージが目に見えて減少する。

タクムのニードル・ミサイルが全て誘爆したせいもあるだろうが、それにしても大した破壊力だ。一発でも喰らえば決定的ダメージを受けてしまうだろうが、幸い、アッシュのこの技は必殺技ゲージの消費量が大きい。二発目のぶんがリチャージされる前に接近し、倒さねばならない。

そう考えながら、ハルユキは視界右上に並ぶゲージの中から、アッシュのそれを確認した。

「うえっ………？」

直後、目を刺した。アッシュの必殺技ゲージが、みるみるうちに回復していく。ナントカ、ドリンクでも飲んでいいるのか、いやいや通常対戦にそんなものないし、などと考えながら顔を上げてアッシュを見るが、浮島の端でただ仁王立ちになっているだけで、地形オブジェクトを

壊したりしている様子もない……。

「リグナムだよ、クロウ！」

というタタムの叫び声が聞こえた瞬間、ハルユキもようやく何が起きているのかを悟った。樹木と化してそびえ立つリグナム・パイタから、地面を伝ってアッシュに接触している光のライン。あれが必殺技ゲージを充填させているのだ。

リグナムの変身は、単なる防衛形態ではない。恐らく、陽光を浴びるとあたかも光合成するかの如くエネルギーを生成し、それを仲間に分け与えることができるのだ。つまり、アッシュのミサイルは実質的に弾数無限と言える。これこそが、リグナム&アッシュコンビのシナジー効果——。

「よお……やくアングスタったようだなア、キヤラス野郎！」

スカルフェイスをにんまりさせながら、世紀末ライダーが叫んだ。

「しかしもうトゥー・レイトだぜ！ オレ様のターンは！ ネバー・エンディングだぜえええ

—— ツ!! (ハウリング・パンヘッド)!! もいっちゃよ、(ハウリング・パンヘッド)!!

ダメ押しで、(ハウリング・パンヘッド)—— ツ!!

ドドドドドドウツ!! という連射音とともに、彼方に停車してあるアメリカン・パイタから、六発もの大型ミサイルが連続発射された。

アーダー・メイダンこと四葉宮謡は、深く息を吸いながら、長弓（フレイム・コーラー）の弦を引き始めた。右手と左手を光の粒が包み、それは細長い直線となって、朱塗りの矢を實體化させる。

普段なら、矢は赤々とした炎に包まれているのだが、空気の無い宇宙ステージでは火は燃えることができない。銀色の矢尻は鋭く輝いているが、単純な物理／貫通属性ダメージだけでは、アイアン・パウンドの分厚い装甲や、ビリジアン・デカリオンの強固な円盾を貫くことは残念ながらできないようだ。

ドラファイト・エッジによって分断された浮島の一方で、謡とスカイ・レイカー、アタア・カレントの三人が、パウンド、デカリオンの二人と戦い始めてからすでに五分近くが経過している。レイカーとカレントが足を止めて緑の二人の猛攻を跳き、後方から謡が矢を射掛けるという戦術だが、これは最善手というよりもこうせざるを得ない状況だ。なぜなら、炎の加護を失った謡は、（鉄拳）パウンドまたは（十人長）デカリオンとの接近戦にはまず耐えられない。謡に敵を近づけないために、決して純粋な近接型ではないレイカーとカレントが頑張ってくれているのだ。

いっそ、遠く離れた別の浮島に避難して、そこから遠距離射撃を試みたほうがまだしも役に立てるのではという気がする。もちろん、この近間から放つ矢ですらほとんど防がれてしまうのだから、近間からではよほどの工夫をしなければダメージを与えられないだろう。それでも、こうしてただ守られているよりはいい——、議はどうしてもそんなふうに思ってしまう。

議の〈親〉にして実兄であるミラー・マスカー／四禁宮寛也は、倒れる大鏡から議をかばい、命を落とした。もう、誰かが自分を守って傷つく姿は絶対に見たくない。それは、我が身を千回切り裂かれるよりも辛いことだ。

しかし、この戦闘が始まる直前、スカイ・レイカー／倉崎楓子は言った。後ろで、辛抱して矢を撃ち続けて、それが必ず活きるから、と。

旧ネガ・ネビュラス時代にはずっとコンピを組んで戦っていたレイカーのことは信頼しているし、現実世界の楓子を深く慕っていてもいる。しかし議の中には、彼女に対して、ほんの少しの気後れがある。理由は、楓子がいついかなる時も議を守ろうとするからだ。街いのない愛情で議を包み、庇護しようとするからだ。そして、それが、とてもとても心地良いからだ。

守られるのは仕方がないのかもしれない。スカイ・レイカーとの実力差は、レベル8と7の数字を遥かに超えるものがある。もう何年もしていないが、仮にいま彼女と対戦すれば、議の放つ矢はレイカーの掌に全て叩き落とされ、瞬時に閉合いを詰められて、そのまま何もできずに負けるだろう。

でも、いつか。

いつかはレイカーと同じ高さにまで通り着き、守られるだけではない、本当のパートナーになりたい。

そう思えるようになったのは、新しいネガ・ネビュラスに加入してから……正確には、シルバー・クロウ／有田春雪と出会ってからだ。

正直、最初は少し頼りないと思っていた。あの黒の王、《絶対切斯》ブラック・ロータスが《子》に運び、レギオンの未来を託すほどのパーストリンカーにはなかなか見えなかった。でも、クロウにスザクの祭壇から救出され、ともに帝城から生還した頃には、話にももう解っていた。

クロウの強さは、遠かな高みを目指す意志そのものだ。どんな絶望的な状況でも——たとえば百回負けて地に這おうとも、歯を食い縛って立ち上がり、百一回目の戦いに挑む意志の強さ。だから彼は、加速世界唯一の完全飛行型デュエルアバターとして、美しい白銀の双翼を持って生まれたのだ。

苦境で踏み留まり、愚直に繰り返すことの大切さを、話はシルバー・クロウから学んだ。ただのお荷物だとは思えないこの状況でも、レイカーの言葉を信じて矢を放ち続ければ、きっと何かが動くはずだ。

愛弓フレイム・コーラーには矢を無限に生成する能力があるので、銃系強化外装と違って、

どんなに撃つても撃ち尽くすことはない。三十三本目は、アイアン・バウンドを狙って放つ。空気がないのにひょうつと風切り音を響かせて飛翔した矢は、狙い通りバウンドの顔面に吸い込まれようとしたが、その直前に左ドロップでブロッタされる。ノーダメージで弾かれた矢は、空中で溶け崩れるように消滅する。

まだまだ、と思いながら次の矢をつがえようとした時、バウンドの右側で戦うデタリオンが、「ぬっ」と短い声を漏らした。アタム・カレントの手から鞭のように放たれた高速水流を盾で防弾しそこねて、わずかながらダメージを受けたらしい。

しかし、なぜデタリオンが乱れたのだろう。誰が狙ったのはバウンドで、彼は矢をさっもり防いだのに……。

と、そこまで考えてふと気付く。矢が生成された長刀を素早く引き絞り、今度はデタリオンを射る。十人長はこれまでと同様に矢を円盾で受けたが、同時にバウンドがレイカーの手刀を回避しそこね、「チッ」と舌打ちする。

「……なるほど……なのです」

誰は、小声で呟いた。ようやく、スカイ・レイカーの狙いが理解できたのだ。

この五分間、誰はほぼ一定のペースで矢を射続けているが、標的はランダムだ。バウンドとデタリオンを交互に撃つこともあれば、片方を何度も続けて狙うこともある。その地道な蓄積が、経験豊かなグレート・ウォールの猛者たちに、「次はどっちに来る」という迷いや苛立ち

を生み出したのだ。

——ならば。

謡は、いままでは狙いを怖れられないために抑えてきた殺気を、遂に思い切り矢へ込めながら弦を引いた。(念) でびたりと全身を静止させたまま、溜める。

まだ撃たない。撃たない。撃たない——。

バウンドとデクリオンが、焦れたかのようにちらりと謡を見た。

その隙を、スカイ・レイカーとアクア・カレントは逃さなかった。

「はっ!!」

「フッ!!」

二人同時に気合いを発しながら深く踏み込み、這うような低い体勢からレイカーは掌打で、カレントは水刃で、それぞれの標的を痛撃する。狙い澄ました(浮かせ技)は見事に決まり、バウンドとデクリオンは同時に高々と打ち上げられる。

「クソッ……」

浮島の重力圏から外れたバウンドが、毒づきながら両拳を星空へと向けた。何らかの必殺技を上に乗ち、その反動で島に戻るつもりだろう。しかし、無重力空間に浮遊している状況は、謡にとっては最高の的だ。

引き絞ったまま溜めていた弓を、更にもう一段階引きながら、謡は叫んだ。

「（スーパーウルミナル・ストローク）!!」

このステージでも唯一威力を減殺されない、アーダー・メイデンのレベル7必殺技。射撃と速度、そして貫通力に特化した光属性の矢を放つ。（フレイム・トーレンツ）や（フレイム・ボルテクス）といった火属性の必殺技と違って爆発効果は持たないが、敵の急所を撃ち抜けば大ダメージを与えられる。しかし、大抵の必殺技が持つ命中補正は一切利かないので、わずかにでも心が揺ればピンポイントの狙撃はできない。

つがえられた矢が、純白の光に包まれる。意識がデュエルアバターの指先にまで行き渡り、更には弓と矢までが己の一部のように感じられた瞬間――離す。

無音の煌めきが宙を走り、アイアン・パウンドの体に吸い込まれた。

現象としてはそれだけだったが、両拳を持ち上げていたアイアン・パウンドの分厚い胸アーマーの中央が、びしっと放射状に砕けた。九割近くを維持していた体力ゲージが急速に減少し、黄色から赤に変色しつつ、残り二割でようやく停止する。光は瞬時にアバターを貫通したため運動エネルギーには変わらず、パウンドはその場に浮いたままだ。

さすがに即死はさせられなかったが、高レベルのメタルカラー相手としては期待以上のダメージを与えられた。あとは、レイカーが止めを刺してくれるはず。

そう思った瞬間が、次の矢でデタリオンを狙おうとした、その時。

「パウンド、いったん引け！」

デクリオンが、右手の両方小剣を掲げながら叫んだ。

それを聞いたパウンドは、悔しそうにアイレンズを睨めながらも、上に伸ばしていた両腕を前方に向ける。

「（イラプション・ブロー）！」

技名発声と同時に両手のグローブから爆炎が噴き出し、反動でアイアン・パウンドは後方の浮島へと飛んでいく。敵チームに体力ダージ回復手段はないはずだが、それでもスカイ・レイカーが追撃するべく体を沈めた。

しかし、止めを刺すことは叶わなかった。空中のデクリオンが、剣を掲げたまま雷のような声を轟かせたのだ。

「（トリダイン・リージョンナリー）！！」

剣から緑色の稲妻が四本進み、浮島の地面に次々と突き立った。寸前にレイカーとカレントは飛び退いていたので、ダメージはない。だがデクリオンのこの必殺技は、単なる範囲攻撃ではない。

「来たわね……」

レイカーが呟くのと同時に、雷に打たれた地面から、濛み出すように起き上がる影があった。デクリオンよりやや薄い緑色の重装甲に身を包み、長方形の盾と無骨な槍を携えた四人の戦士たち。

先日、世田谷エリアからネガ・ネビュラスに加入した新メンバーのシヨコラ・パベクターは、(チョコベクト)なる自動人形を生み出す能力を持っている。チョコレート製ボディはちよつとした物理攻撃なら無効化し、かなり高度な命令も理解するなかなかの優れたものだが、(十人長)デカリオンが召喚する(緑玉の軍団兵)の性能は桁違いだ。必殺技ダージ一本で四体、それをもういちど繰り返せば同時に八体まで召喚できるというから恐ろしい。

呼び出された緑色の兵士たちは、二体がレイカー、二体がカレントへと向かった。そのうち一体の槍に掴まって浮島に戻ったデカリオンは、無言のまま地面を蹴り、謎に向かって猛然と突っ込んできた。

左では、ミサイルの巨大な爆発音。

右では、軍団兵の勇ましい足音。

仲間たちの苦闘を、黒雪姫はまざまざと感じた。しかし、視線を横に向ける余裕はなかった。右手の剣は切っ先が欠損し、もう突き攻撃は行えない。そのダメージを与えた双剣使いは、いまだ二本目の剣を抜かずに、悠揚迫らぬ立ち姿で黒雪姫と対峙し続けている。

これまで数多の強敵を貫いてきた必殺技、(アス・バイ・ピアシング)をグラフィット・

エッジに素手で受け止められた衝撃はまだ消えない。確かに黒雪姫に柔法、シルバー・クロウ風に言えば（ガード・リバーサル）を授けたのはグラフだが、貫通属性の必殺技を一握りしただけで無力化するのは常軌を逸している。

「そう深刻な顔すんなよ、ロッタ」

黒雪姫の強張りを見抜いたか、グラフがのんびりとした声を出した。

「お前のデバビをノーダメで受け流せたのは、重力が薄いからだぜ。感覚的には、アバターが発泡スチロールでできてるみたいだなモンだからな」

「……妙な略し方をするな」

ぶっきらぼうに答えながら、黒雪姫は思考を切り替えようとした。

グラフの言うとおり、重力が弱ければ体も軽くなり、攻撃の威力が完全には伝わらなくなる。ならばなぜ、グラフは黒雪姫の剣を斬ることができたのか。それは、必殺技を受け止めた左手で、そのまま切っ先を固定していたからだ。

宇宙ステージでの近接戦闘のキモは、自分を重量物にしっかりと固定すること。そこまでは実行していたつもりだが、まだ足りなかった。相手をも固定しなければ、達人相手には通用しないというわけだ。

しかし、四肢が剣であるブラッタ・ロータスに、掴み技は使えない。仲間には捕まえてもらおうという手もあるにはあるが、それは心情的には敗北だ。あくまで自力でグラフを斬ろうとする

ならば、残された手段はたった一つ。

その手も、悉くグラフには読まれているだろう。闇雲に狙っても手痛いカウンターを喰らうだけだ。その王^{キング}手に至るまでの戦略を、秘密に組み立てる必要がある。

——こういうのは、キミが得意だったな、ハルユキ君。

心の中で〈子〉に呼びかけると、重圧が少しばかり薄れた。

確かにこの模擬領土戦は負けられない戦いだ。ここで勝利し、渋谷エリア返還を成さねば、白の王ホワイト・コスモスとの決戦は遙かに遠ざかる。その間にコスモスは、手に入れた災禍の鎧マークIIを使って、加速世界に新たな惨禍をもたらすだろう。

実の姉である彼女が、いったい何を望み、どこを目指して戦っているのか……それは黒雪姫にもまだ解らない。

しかし、〈親〉として黒雪姫にブレイン・バーストを与えたこと、偽りの情報で換って赤の王レッド・ライダーを全損させたこと。六大レギオンで不可侵条約を結んだ裏で加速研究会を立ち上げ、バックドア・プログラムや辺境ファームング、ISSキットを使って多くの混乱を引き起こしたこと、ニコを攫い、強化外装を奪ってマークIIを造り上げたこと。それら全てが、ひとつの目的を実現するためのプロセスであるはずだ。

秘めたる目的が何なのかは、ホワイト・コスモスを倒し、剣を突き付けて語らせればいい。そのためにもここでグラフに敗れるわけにはいかないが——しかし、先だけを見ていては戦う

甲斐がないことを、黒雪姫は有田春雪に教わった。

いまの対戦に、全力を尽くすこと。そして、楽しむこと。

……そうだな、ハルユキ君。

左の戦場で頑張っているはずのシルバー・タロウに思念で囁きかけると、黒雪姫は深く息を吸い、吐いた。

「（オーバードライブ）、（ソード・ブルー）」

囁くようにコマンドを発声すると、全身のモールドに青い光が浮き上がる。装甲強度と技の射程を捨てて、アバターを近接攻撃に特化させたのだ。

黒雪姫の変身を見た途端、ダラフの気配も変わった。正確には、気配や雰囲気といったものが完全に消滅し、内面が感じられなくなった。

剣士の左腕がゆるりと動き、左肩から伸びる（アンブラ）の柄を廻るや滑らかに抜き放つ。ついに双剣を装備した（矛盾存在）に、黒雪姫は半身になりつつ対峙する。

残り体力ゲージは、黒雪姫が八割で、ダラフはほぼ無傷。必殺技ゲージは、黒雪姫が六割、ダラフが七割。どちらも上回られているが、このくらいの差などいくらでもひっくり返るのがブレイン・バーストの対戦というものだ。

折れた右手の剣を前に、左手の剣を後ろに構える。ダラフも、鏡に映したように同じ構えを取る。急激に高まるプレッシャーが手足を痺れさせようとするが、それを取って受け入れる。

——案しめ、いや喜べ。あるいはもう二度と剣を交える機会はないかとさえ思っていた師とこうして再び向き合い、離れていたあいだに得たもの、磨いた力を見て貰えるのだから。

ゴードルの下で、黒雪姫は我知らず微笑んだ。あらゆる音が消え、重圧が消え、恐れが消えたその時、黒雪姫は動いた。

まさかの（ハウリング・パンヘッド）三連発で発射された六本の大型ミサイルは、シーカーレンズを弾猛に輝かせながらハルユキたちに迫った。

「く……もういちど！」

タカムが再び上体を反らし、必殺技のモーションに入るが、ハルユキは急いでそれを止めた。「待てバイル、たぶん足りない！」

一回の（スプラッシュ・ステインガー）では、二本のミサイルを連撃するのが精一杯だったのだ。時間差をつけて飛来する六本を全て爆発させるのは不可能。しかもアッシュ・ローラーは、リダナム・バイタとのコンボでミサイルを無限に発射できる。

そもそもあのミサイルたちは、何を頼りにハルユキたちをロックオンしているのだろうか。熱ではあるまい。デュエルアバターに体温はないし、あんなふうに撃てば、後ろのミサイルが

前のミサイルをロククオンしてしまはずだ。

あるいは單純に（敵アバター）をロククするのか。いや、領土戦やタッグマッチならそれも有り得るが、この封戦のルールはバトルロイヤル。システムのには自分以外の全員が敵であり、ミサイルはリダナムをも攻撃してしまふ。

少なくとも、レンズがついているのだから何かを見ているのは間違いない。赤外線ではなく可視光画像、しかも敵味方を識別するとなれば外部誘導か。つまり――

アツシユ・ローラーの視線！

ハルユキが素早く顔を上げると、浮島の崖でこちらを凝視する髑髏ライダーの眼窩とパチツと眼が合った。間違いない。ならば、視線を通らなくすればいいのだ。

「――バイル！ 地面を！」

それだけで、タクムはハルユキの意図を察したようだった。出た所勝負だが、もうこれしか方法がない。鎖いたタクムは、右手の杭打ち機を足許に向け、叫んだ。

「（スバイラル・グラビティ・ドライバー）――ッ！！」

巨大化した強化外装から、高速旋回するハンマードリルが撃ち出され、コンクリートに激突する。ステージの鉛直方向にしか撃てないという制約があるが、ブラック・バイスが生成した閉鎖空間（八面断絶）すらも破壊したほどの威力を持つ。しかも杭打ち機の後端から爆炎が噴射されるため、低重力環境でも反動で浮き上がることはない。

鋼鉄のハンマードリルは、浮島を深々と貫いた。

直後、ハルユキたちの立つ浮島の左半分が、無数の破片となって砕け散った。周囲の重力は完全に消失し、コンタリート塊が無軌道に漂う。

「きゃあっ！」

悲鳴を上げたチユリの右手を、ハルユキは懸命に掴んだ。そこにミサイル群が飛来したが、アツシュ・ローラーの視線は無数の障害物に阻まれ、ミサイルは次々とコンタリートにぶつかって爆発する。

「くっ……！」

押し寄せる熱気と細かい欠片からチユリをかばいつつ、ハルユキは次の一手を模索した。

ツリー・モードのリダナム・バイタは、足許が直径三メートルの岩塊になってしまっても、動じずに光合成を続けている。同じ岩塊にしがみつくアツシュは何やら盛んに毒づいているが、必殺技「ダージ」の光増は継続しているようだ。即座のアステロイド地帯からうかつに飛び出すと、再びミサイルに狙われるだろう。しかし、いつまでも隠れたままでは、せつかく空の果てへと吹っ飛ばしたサンタン・シェイプアーが戻ってきてしまうかもしれない。

「タク、チュ」

ハルユキは、大きなコンタリート塊の陰で以心伝心の幼馴染と顔を寄せ合い、小声で作戦を伝えた。

二人はわずかに躊躇ったようだがすぐに頷き、ハルユキの指示どおりのポジションについた。再び頷き合うと手近な岩を蹴り、建物の陰から出る。アッシュの姿が視認できた瞬間、

「いけっ！」

ハルユキが叫ぶと、直後に陣取ったタタムが右腕の杭打ち機を発射した。猛然と撃ち出された鉄杭を、ハルユキは右足の裏で受けた。柔法の要領で脚を折り曲げて、攻撃力を推進力へと変える。

無重力状態でもさすがに鉄杭の威力を完全には吸収できず、足裏の装甲がひび割れるのを感じた。しかし貫通まではされることなく、シルバー・クロウは銀色の砲弾となって宇宙空間を突進した。

「ギガ・フウウウ——ル!! そんなバンザイ・アタックじゃ、いまのインフィニティーなオレ様は倒せぬぜ!!」

前方で、岩塊にしがみついたままのアッシュ・ローラーが叫んだ。左手でビシツとハルユキを指差しながら、再びミサイルを発射——しようとする寸前、

「(シトロン・コ——ル)!!」

チュリの叫び声とともにハルユキの後方から黄緑色の光線が降り注ぎ、アッシュの全身を包んだ。

「ワアッツ!?」

喚くアツシユの必殺技ゲージが、みるみる減っていく。対象アバターの状態を秒単位で表示するタイム・ベルの（シトロン・コール・モード）によって、いったんはフルチャージされつつあったアツシユのゲージが逆転しているのだ。

「は、は、（ハウリング・パンヘッド）!!」

アツシユは大慌てで技名を叫んだが、その時にはもうゲージが必要量を下回っていて、彼方に持機するバイクはうんともすんとも言わなかった。もちろんチュリの必殺技が終了すれば、リダナムの能力によってゲージは再び溜まっていくはずだが、接近するためのほんの数秒間を稼げればそれで充分だ。

「うおりやあああ——ッ!」

雄叫びとともに、ハルユキはアツシユの胸板にフライング・タロスチョップを叩き込んだ。

シアン・バイルの杭打ち機が発生させた運動エネルギーがビリヤードのボールのように伝わり、アツシユの大柄なアバターは、

「アイル・ビー・バアアア——ッター」

という悲鳴とともに暗闇の彼方へすっ飛んでいった。

——当然帰ってこなくていいです!

と頭の中で叫びながら、一秒前までアツシユがしがみついていた岩塊を両手で掴む。予想はしていたが、リダナムから溢れる光のラインはハルユキの体にも流れ込み、必殺技ゲージを

充填し始める。

数秒経って、リダナムはエネルギー泥棒に気付いたようだった。

「(タレブル・サイクル)」

掛け声とともに、ツリー・モードを解除しようとする。円錐形の衝冠が日傘に戻り、輪は女性らしいラインを取り戻していく。

アニメやマンガの主人公サイド、あるいは紳士道を重んじるバーストリンカーなら、(変身中は攻撃しない)というお約束を守るのかもしれない。しかしまだレベル6のハルユキには、ハイランカー相手にそこまでの余裕はない。

「……ッ！」

無音の気合いとともに、岩塊を駆け上る。リダナムの両足が、木の根状のアンカーから華奢なヒールに戻った瞬間を捉って、横取りした必殺技ゲージをさっさと消費する。

「——(ヘッド・バ——ット)!!」

日傘を持つ両手を高々と掲げた状態のリダナムは、ガードが間に合わずにハルユキの頭突きを胸で受けた。いや、ガードしても結果は同じだっただろう。

「あいるびー、ばっく」

小さな声だけを残して、六層装甲第四席も、アツシユとは別の方向に飛んでいく。すかさず上空を振り仰いだが、まだサンタンの変は見えない。



これで、黒雪姫に逆撃を命じられた三人はひとまず排除した。稼いだ時間で他の戦場に加勢できれば、戦況は大きくネガ・ネビユラス側に向く。

「――先輩！」

ハルユキは、黒雪姫とグラファイト・エツジが戦っている浮島に眼を凝らそうとした。その瞬間、背筋を強烈な冷気が貫いた。

予感。戦慄。恐怖。何か大きな……取り返しのつかない見落としをしていた、という確信。三メートルの岩塊の上で、弾かれたように振り向いたハルユキが見たのは、あたかも巨大な惑星の如き重量感を振りまきながら急接近する十字のシルエットだった。

「メイデン！」

と鋭く呼びかける楓子の声は、議の身を案じる気持ちに満ち満ちていた。

旧レギオン時代の領土戦では、楓子に抱えられた状態で敵陣上空まで飛行し、そこから爆弾代わりに敵拠点に投下されるという目に遭っていた議だが、思い返してみればその作戦のせいで死んだという記憶はほとんどない。議が戦闘技で周囲を焼き尽くしたあとは必ず楓子も降りてきて、敵の反撃から守ってくれたのだ。

いまこの瞬間も、楓子は鎧をデカリオンの強襲から守るべく動き出している。自分に向かってくる《軍団兵》——一体に背を向け、こちらに駆け寄ろうとする姿が見える。

だが、いつまでも楓子に甘えるわけにはいかない。胸を張って《火の四元素》を名乗れるようにならねば、前には進めないのだ。

「私は大丈夫なのです!!」

ありったけの氣力を振り絞ってそう答えると、鎧は長弓を引き始めた。

遠隔型のアーダー・メイデンが、近接型のビリジアン・デカリオンに格闘戦で勝てるはずがない。剣の間合いまで近づかれる前に、敵の足を止める必要がある。頼れるのは、アイアン・バウンドを撃ち抜いた必殺技《スーパールミナル・ストローク》のみ。いちかばちか、これでデカリオンの急所を狙う……。

いや、だめだ。格上相手に《いちかばちか》など通用するはずがない。こんな時、シルバー・クロウならきつと、やけにならずに活路を探そうとするだろう。

恐怖に耐え、鎧はデカリオンを限界まで引きつけた。

グラディウスの間合いに捉えられるその寸前、

「やあっ！」

両足を深く曲げると、思い切り地面を蹴る。ただでさえ軽量なアバターは、あっという間に浮島の重力圏を離れ、星空目掛けて上昇していく。

「逃がさんッ！」

叫び、デクリオンもジャンプした。

直後、己の過ちを悟ったか、「ぬうっ」と唸った。

二人は、わずか四メートルの間に保ったまま、ほぼ垂直に飛翔し続ける。無重力空間で慣性移動している限り、デクリオンは誰に追いつけない。それどころか、浮島に戻ることも、軌道を変えることもすらできない。

恐らく、誰が一秒でも早くジャンプしていればデクリオンも狙いに気付いただろう。しかし、もう新撃体勢に入っていたがゆえに、誰の拍子に合わせてしまったのだ。

恐らくデクリオンも、運動エネルギーを発生できるタイプの必殺技を持ってはいるだろう。だが、直前に四体の（軍団兵）を生成したばかりのいまは、ゲージが空のはずだ。この機に、可能な限りのダメージを与えねばならない。

色鮮やかな星空に向かって移動しながら、誰は長弓を引き絞った。当然、デクリオンは円盾を構えて防衛しようとする。しかし、直径四十センチ程度の盾では、全身をカバーすることは不可能。しかも距離はたったの四メートル。

乾いた弦音とともに放たれた矢は、デクリオンの右足を包む装甲の隙間を深くと射貫いた。

体力ゲージの減少は五パーセント程度だったが、体の末端部を直撃されたデクリオンは、回転モーメントを与えられて縦に回り始める。誰も矢の発射時に作用反作用の法則によって後ろに

押され、両者は少しずつ離れ始める。

「ぬぬっ……………」

デカリオンは慌てたように四肢を動かすが、いったん始まった回転を止めることは、宇宙では不可能だ。すぐに諦めて体を丸め、円盾でカバーできる限りの範囲を守ろうとするが、背中からは空きにならざるを得ない。

すうっと息を吸いながら、再び弓を引く。慎重に威力を加減しつつ、ピンポイントで一点を狙撃する。

びしっ、と矢が突き立ったのは、デカリオンの腰から長く伸びる装甲板。奥にアバター素体がないためダメージは徹らないが、謎の狙いは別にある。逆方向の力を与えられ、デカリオンの縦回転が、謎に背中を向けた状態で停止する。

「——いやあああああッ!!」

珍しく激しい気合いを込めながら、謎は立て続けに愛弓の弦を鳴らした。コンマ五秒間隔で連射される矢が、次々にデカリオンの背中を貫く。

「ぬあああああッ!」

デカリオンは縮めていた腕を振り回して体を反転させようとするが、作用反作用の法則だけでは謎の矢のエネルギーに対抗できない。装甲の薄い背中にはたちまち針山のように矢が生え、デカリオンの体力ゲージが急減すると同時に双方の必殺技ゲージが急増していく。

それが五割を上回った瞬間、話はひときわ強く弦を引き、叫んだ。

「（スーパーバルミナル・ストローク）！」

右手と左手の間で、純白の閃光が弾ける。満天の星々さえ色褪せるほどの光量で輝く矢を、躊躇いなく放つ。

しゅばっ！ という衝撃音が響いた時にはもう、光の矢はデカリオンの背中を貫通していた。バウンドの時と同じく倒すには至らなかったが、体力ゲージを真っ赤に染めたデカリオンは、両手両足を広げた格好で浮島へと落下していく。いっぽう譲も、これまでとは比較にならない反動を受け、無限の星空へと押し流される。こうなればもう、ステージの境界面にぶつかると戻れないだろう。あとは、楓子とあさらに託すしかない――。

その時、話は見た。

遠く下方の浮島で、音もなく爆めく青い光を。

かつて何度も眼にした輝き。加減世界唯一の宇宙戦用強化外装、ダイヤルスラスターの噴射炎。

「……………フリーねえ」

無意識のうちに呟いた、直後。

浮島から、途轍もないスピードで急上昇してくるシルエットがあった。左手を体の脇に折りたたみ、右拳をまっすぐに突き出して飛翔するのは、もちろん（鉄腕）スカイ・レイカーでしか有り得ない。

「かくなる上はああああ——ッ!!」

落下するデクリオンが、雷声轟かせながら右手の両刃小剣を振りかぶった。急接近するレイカーとの相討ちを狙っているのだらう。

剣が、緑色のスパークを帯びる。タイミングを計り、デクリオンが技名発声。

「——（ビリディウス……）」

だが、その技が発動することはなかった。レイカーの圧倒的なスピードが、技名の後半を叫ぶことすら許さなかったのだ。

垂直に飛翔するスカイブルーの木星が、デクリオンを捉えた。

謎の必殺技が胸アーマーに開けた穴を、レイカーの拳が逆方向から再度貫く。体力ゲージが瞬時に消し飛び、〈六層装甲〉第二席たるビリジアン・デクリオンは、無数のエメラルドにも似た破片を振りまいて爆散する。

このバトルロイヤルで最初の勝ち星を挙げたスカイ・レイカーは、ガッツポーズをするでもなく飛び続け、たちまち謎に追いついた。

「メイデン!」

叫びながら両手を伸ばし、謎のアバターをキャッチすると、胸に強く抱き締める。

——また、助けられてしまったのです。

胸の奥でそう呟く讀だったが、残念な気持ちはなかった。赤の遠隔型として、やれるだけの

ことはやったと思えたからだ。

「……フリーねえ」

もういちど名前を呼びながら、誰も楓子の体に右手を回そうとした——のだが。

いきなり激しい憤り（いきどお）が襲ってきて、思わず「うぐ」と叫ぶ。レイカーが急角度でターンしたのだ。続いて、耳許で声。

「メイデン、まだよ！」

「ど……どうしたのです？」

「やられたわ……アレがずっと傍観してたのは、余裕を見せてたわけじゃなかった。最初から作戦だったのよ」

「アレとは？」

「グランデ!!」

その名を叫ぶと、レイカーは激しくブラスターを噴射させ、戦場の反対側へと一直線に飛び始めた。

ブレイン・バーストでは、生身の体と同様にデュエルアバターを操作するので、当然ながら

現実世界での利き腕がアバターの利き腕となる。

黒雪姫は、大多数のバーストリンカーと同じく右利きだ。二十数年前までは、子供が左利きだと幼い頃に矯正する親もいたようだが、その後には脳の研究が進み、強引な利き手の矯正は脳の発達を阻害することが解ってからはそんなこともなくなったらしい。

現在のネガ・ネビュラスは全員が右利きだが、旧レギオンには数人のサウスボーが存在した。更にたった一人だけ、右手も左手も同じように操れる、いわゆる両利きのメンバーもいたのだ。二本の長剣を自在に振り回す、《矛盾存在》グラフアイト・エッジである。

そのグラフは、黒雪姫が全力のダッシュで距離を詰めても、一步も動こうとしなかった。

右手の《ルークス》と左手の《アンブラ》は、だらりとぶら下げられたまま。視線さえも、濃い色のゴーグルに遮られてどこを見ているのか解らない。

しかし、この脱力した自然体こそがグラフの柔法の予備動作。あらゆる攻撃を最小の動作で吸い込み、ベクトルを反転させて叩き返す。初代米の王、《銃匠》レッド・タイダーとの一戦では、二丁拳銃から連射される銃弾を二本の剣で残らず跳ね返したという伝説じみた逸話すら残しているのだ。

黒雪姫がなまぐらな斬撃を繰り出せば、先ほどと同じく軽々と受け止められ、直後に手痛い反撃を喰らうだろう。まずは、柔法では対処できない場合のみグラフが用いる最大の防弾技、《双剣クロスガード》を引き出さねばならない。

「オオオオッ!!」

雄叫びとともに、両手の剣をクロスさせつつ高々と振りかぶる。

特異なモーションだが、必殺技というわけではない。このまま両手を同時に斬り下ろしても、片手での攻撃と大差ない威力しか出せないだろう。グラフの実力なら、柔法を使うまでもなく片方の長剣だけでガードし、もう一方の長剣でカウンターのダメージを与えることは可能なのはずだ。

しかし、ブラック・ロータスの両腕に宿る（モード・ブルー）の青いエフェクト光が、グラフの脇を鈍らせた。

この三年の間に新たに身につけたアビリティもしくは必殺技だと判断したのだろう、グラフは交差させた双剣を頭上に掲げ、防御の構えを取った。

三年前の立ち合いでは、黒雪姫はこのクロスガードを破れずに敗北した。その、あるいは緑の王の神器（ザ・ストライフ）にすら比肩するかもしれない絶対の防御技に、黒雪姫はクロスさせた両腕を叩き付ける——と見せかけて、

「ハアッ!!」

右腕の前腕りをノーモーションで繰り出した。

双剣を掲げているのがら空きになっているグラフの腹に、鋭い切っ先が吸い込まれていく。命中すれば、間違いなく背中まで貫く。

しかし。

「なんのっ!!」

叫んだグラフが、顔の前でクロスさせた双剣を、有り得ないスピードで内側に回転させた。シャアアン! と擦過音を放ちながら、まるで鉄のように降りてきたルークスとアンブラの剣尖が、ぎりぎりのところで黒雪姫の右脚を受け止めた。

グラフアイト・エッジの双剣に左右から挟まれて、切断されないものなど加速世界には数えるほどしか存在しない。黒雪姫の四肢剣は、そこには含まれない。

鋭くも偉い悲鳴とともに、右脚の剣が膝下から呆気なく切断された。体力ゲージが激減し、一気に五割を下回った。

だが、ここまでは読みの内だ。

右脚を斬られても一瞬たりとも動きを止めず、黒雪姫は両腕でグラフアイト・エッジの体を双剣ごと抱え込んだ。

この技を、グラフ相手に使ったことはない。しかもグラフの両手首は、双剣を内側に回転させたために、可動域の限界に達している。ここから即座の反撃は不可能。

右脚を犠牲にして生み出した刹那の機を逃さず、黒雪姫は叫んだ。

「(デス・バイ・エンブレッシング)!!」

ブラッタ・ロータスの、レベル8必殺技。

射程距離、わずか七十センチ。しかし、両腕で抱き締めたものは、何であれ切断する。

ドラフの体と双剣を致死のあざとに捉えた（終決の剣）から、強烈なパイオレット・ブルーの閃光が進った。

水晶が割れるような切断音とともに両腕が交差し、ドラフ・ナイト・エッジは双剣ごと両断される——はずだった。

だが、響いたのは、神経を逆なでするような異様な金属音だった。閉じかけた両腕が、半ばで停止した。

閃光が収まると同時に、黒雪姫は両眼を見開いた。

ブラック・ロータスの右手剣と左手剣が、ドラフの双剣（ルータス）と（アンブラ）の刀身の半ばにまで食い込み、そこで停止している。黒水晶とハイパー・ダイヤモンドの接合面からは青白いスパークが断続的に発生し、果たしてどちらがどちらに切り込んでいるのか、それとも双方同じくらいのダメージを負っているのか、咄嗟には判断できない。

「ッ……」

黒雪姫は、追撃を入れるべく両腕を開こうとした。

だが、何たることか、両手の剣はどんなに力を入れてもドラフの双剣から外れてくれない。

「あ、ありやつ……」

ドラフも間の抜けた声を出しながら剣を引き抜こうとするが、知恵の輪のように絡み合った

四本の刃はかすかに軋むのみ。

「……………」

かつての師と弟子は、しばし無言で顔を見合わせた。

最初に沈黙を破ったのは、黒雪姫だった。

「……間抜けな状況だが、このまま貴様を押さえていられるなら私の勝ちだ。あとは仲間たちが頑張ってくれる」

するとグラフは、にやりと笑みの気配を滲ませながら答えた。

「いい若手が育つてゐるみたいだな、ロッタ。けど、ここからが正念場だぜ？」

「何……………」

ゴーグルの下で細めたアイレンズを、直後、黒雪姫はいっぱいに見開いた。

グラフの背後に広がる無限の星空。その彼方から、圧倒的な重量感を放射しながら飛来する

一つの影。極限まで分厚い装甲と、左腕に携えられた十字盾。

〔絶対防衛〕グリーン・グランデ。

緑の王が目指す先は、黒雪姫とグラフが戦う中央の浮島ではない。左側、シルバー・クロウたちが戦っているアステロイド地帯だ。

——ハルユキ君!!

内心で叫びながら、黒雪姫は再び両腕を振り解こうとした。しかし、噛み合う剣は溶接でも

されてしまったかの如く感動だにしない。

対するグラフは、逆に黒雪姫を動かすまいとするかのように双剣をがっちりと固定しながら言った。

「ダッさんが最後まで傍観してると思つたなら、ちと甘いゼロッタ。待つて待つて待ち続けて、ここぞつてとこで持つてくのがあのおっさんのスタイルなんだよ、昔っからな」

「……………ほう、それは楽しみなな」

熱りを抑え込み、そう囁く。

「へ？ でも、お前はもう動けないし、動けてもルールでダッさんとは直接戦えないぜ？」

「私じゃないさ。うちにも、ここぞという時に必ず決めてくれるメンバーがいてね」

言い返しながら、黒雪姫は深く信頼するサブマスターに恩念を送った。

——頼んだぞ、レイカー！

——このタイミングで来るのか!!

猛然と迫り来る緑の王ダリーン・グランデを視認しつつも、ハルユキは暗闇にどうしていいか解らずに凍り付いた。

リグナム・バイタとアツシュ・ローラーをステージの彼方に吹っ飛ばし、どうやらこの戦場は黒チームが勝った……と思った一瞬の隙みを衝かれたのだ。いや、それだけではない。ハルユキの、そして恐らくタタムやチユリの意識からも、グランデの存在がすっぱり抜け落ちていた。冒頭に一度緑チームの足場を作っただけで、あとはずっと沈黙していたので、グランデはもうこのまま最後まで傍観し続けるのだと思ひ込んでしまったのだ。

最大戦力である王の存在を消す。それこそが、緑チームの戦略だったのだらう。黒チームがまるで予想していない時と場所に最強の駒を投入すれば、マキシマムの破壊力を発揮できる。敵の狙いは推測できても、対応策までは思ひ浮かばず、ハルユキは接近するグランデをただ監視した。

最初に金縛りから立ち直ったのはタタムだった。

「――押し返す！」

低く叫び、近くで最大の岩塊を背負いながら、右腕の杭打ち機を構える。

確かに、無重力空間を慣性移動中のいまが、緑の王を攻撃する最大最後のチャンスだ。たとえガードされても、衝撃で再びステージ後方に押し戻すことは可能はず。

「頼んだ！」

「やっっちゃえ！」

ハルユキとチユリの声に力強く頷いたタタムは、慎重に狙いを定めると、技名を発声した。

「——（ライトニング・シアン・スパイク）!!」

鉄杭をプラズマ化して発射する、シアン・パイルのレベル4必殺技。青白く輝く超高温のエネルギー流が、長大な槍となって発射された。

対する緑の王は、無造作に左手の大盾を動かした。プラズマの槍は、十字の中央部分に命中し、球状に膨れ上がった。

やはり、必殺技でも神器（ザ・ストライフ）は撃ち抜けない。しかし、少なくともグランデの前進は止められるはず。この隙に対応策を考えないと……。

「……………えっ!?」

ハルユキは、ようやく回転し始めた思考を再び中断させられた。

グランデの十字盾に命中したプラズマが、爆発しない。まるである種の力場に捉えられているかの如く、球になったまま震えている。

瞬間、ハルユキの背筋を氷のような悪寒が襲った。脳裏に、かつて黒雪姫が口にした言葉が甦る。

——グランデの大盾は、攻撃を完全に受け切ると、その威力を倍返しで反射するのだ。

「パイル！ 避ける!!」

ハルユキの絶叫は、しかし、間に合わなかった。

ズバツ！ と強烈な音を立てて、プラズマは再び光の槍となって発射された。その太さは、

元の（ライトニング・シアン・スパイク）の二倍。

青白いエネルギー流は、完全に同じ軌道をなぞって跳ね返り、シアン・パイルの杭打ち機を貫いた。

「ぐっ—」

叫いたタタムの右腕が、肩口から一瞬にして蒸発し、背後の巨大岩塊さえも半分以上が蒸発した。

「パイル—」

悲鳴じみた声で呼びかけながら、チュリが後方に流されかけたタタムに飛びつき、捕まえる。そちらに、

「ベル、パイルの回復頼んだ—」

とだけ叫び、ハルユキはグランデに向き直った。王は、わずかにスピードを落としたものの、尚も着実に接近しつつある。

神器（ザ・ストライフ）の特殊性能を救わっていたのに思い出せなかったのは、グランデの緊急参戦に度肝を抜かれたせいもあるが、そこも含めてハルユキのミスだ。だが反省はあとで機材でもできる。いまは、この窮地を切り抜けるのだ。

再び、脳裏に黒雪姫の言葉が響く。

——あの盾による防衛を崩すには、超々威力の一撃で弾き飛ばすか、終わりのなき連続攻撃で

隙を作りアバター本体を狙うしかない。

前者は、ハルユキには不可能だ。だが、後者なら、もしかしたら。どうせこのままアステロイドの中に留まっていっても、グランデから逃れることはできないのだ。

「……………行けッ!!」

自分を叱咤すると、ハルユキは背後の岩塊を思い切り切り蹴り飛ばした。

無重力空間を一直線に飛翔しつつ、右手を握り締める。グランデの巨体が、みるみる眼前に迫る。

「う……………おおおおお——ッ!!」

雄叫びでブレスシャーを振り払い、十字盾の真ん中に拳を叩き付ける。

まるで（塵埃）ステージの地面を殴ったかのような重すぎる手応えに、肩関節までが軋んだ。しかしここで攻撃を止めたら、（償返し）を喰らうだけだ。反動を利用して左の膝蹴り。再び右のストレートパンチ。更に左のフック。殴る。蹴る。殴る。蹴る。

一撃入れるたびに、エメラルド色の盾の表面に銀色の輝きが溜まっていく。これが恐らく、ハルユキの物理攻撃のエネルギーだ。連続攻撃がほんの一回でも停滯すれば、このエネルギーが二倍になって跳ね返り、シルバー・タロウをばらばらに粉砕するだろう。

無重力空間なのにアバターが後ろに跳ね返ってしまわないのが奇妙だが、殴ったり蹴ったりする時に不思議な磁力感がある。恐らく、タタムのプラズマ流を表面に（溜めた）ことから、

ザ・ストライフは防衛時に弱い吸い込み効果が発生させるのだと思われる。

「うおあああああッ!!」

叫びながら、ハルユキはありったけのスピードで打撃技を回転させた。

たった一発でも盾の真芯を外せば、体勢が崩れて連撃は止まる。最大のスピードと、最高の正確さで攻撃し続ける必要がある。

極限まで集中力を振り絞りながらも、ハルユキは約一ヶ月前にグランデと戦った時のことを思い出していた。

場所は、無制限中立フィールドの六本木ヒルズタワー屋上。災禍の鎧を装備して六代目クロム・ディザスターとなったハルユキは、大剣を振りかぶってザ・ストライフに撃ち込んだのだ。あれは、まさしく黒書姫の言う「超々威力の一撃」だった。しかしそれでもグランデの盾を弾くには至らず、かといって当たり負けもしなかった結果、反射した威力は下方に拡散して、ヒルズタワー上部を丸ごと崩壊させた。

いまのハルユキに、当時の戦闘力はない。強化外装「ザ・ディザスター」が生み出すパワー、呪いの大剣（スター・キャスター）の攻撃力、そして鎧に宿る疑似思考体（獣）の予測能力があつてようやくグランデと互角に渡り合えたのだ。現時点の実力差は天と地ほども開いているだろうが、それでもグランデが受けに徹している限り、連打を続けることはできる。

集中力が一定のラインを超えた時にのみ訪れる、「超加速感覚」の波が後方から押し寄せて

ハルユキを包んだ。

ノイズが遠さかり、視界の色が変わる。世界に存在するのは、眼前の十字盾と己の拳足のみ。もっと速く。もっと速く。

打撃の間隔が更に短縮され、マシンガンのように連続する衝撃の音が轟いた。銀色に光る「保留エネルギー」は際限なく増加し、やがて十字盾全体を輝かせ始める。

もっと速く、もっと速く、もっともっともっと速く！

極限まで圧縮された瞬間の中で、ハルユキはデュエルアバターを躍動させ続けた。この感覚の中ならば、永遠に連打を続けられそうだった。

その集中を破ったのは、真上から降り注いできた叫び声だった。

「そこまでデス、クロウ！」

視線を動かさずとも、誰だか解った。バトルロイヤル序盤にステージ上空の境界障壁まで吹き飛ばしたサンタン・シェイファーが、このタイミングで戻ってきたのだ。

それだけではない。

「いま行くぞ、ボス！」

「オレ様もどー・バツクだぜ！」

横並びで威勢良く叫びながら飛来するのは、アイアン・バウンドとアッシュ・ローラー。同じく戦場の後方から復帰してきたようだ。

三人に邪魔されれば、連打を続けることは不可能。ハルエキの拳が止まった瞬間、溜まりに溜まった物理属性エネルギーが倍返しされ、いかなメタルカラーといえども粉微塵に消し飛ぶことは確実。

——どうする。どうすれば。

——どうもこうもない。最後の一瞬まで、続けるだけだ！

「うああああああ——ッ!!」

ありったけの気力をかき集め、ハルエキはラッシュを更に加速させた。自分でもコマ送りに見えるほどのスピードで手足が唳り、過負荷となったアバターの関節部が赤熱する。もう何百発打ち込んだか解らないのに、神器（ザ・ストライフ）は巖の如く立ちはだかり、小振るぎもない。

以前辞書を引いてみたところ、（Surrender）とは（闘争）という意味らしい。では闘争とは何か、競争とはどう違うのかとこれまた調べてみたら、競争が何らかの目的のために相手と争うことであるのに対して、闘争は相手の否定そのものを目的に争うことなのだそうだ。

身を守る盾に闘争とはミスマッチな名前だ、とその時は感じた。しかし、倍返しの特効効果を体感したいまなら大いに納得できる。あらゆる攻撃を拒絶し、反射し、破壊する……（否定）という概念を、これ以上純粋に体現した能力もそうあるまい。

否定。考えてみれば、グリーン・グランデ自身が、ブレイン・バースト2039のシステム

そのものを否定するために戦っている人物だ。無制限フィールドで単身エネミーを狩り続け、深い膨大なポイントを中位のバーストリンカーたちに惜しげもなく分け与えることで、世界の終わりを拒絶している。

そこまでの理由を、以前にグランデはこう説明した。

すでに廃棄されてしまったアタセル・アサルト2038や、コスモス・コラプト2040に足りなかった何らかの因子を、恐らくブレイン・バースト2039は備えている。その因子が具象化されるまで、世界を閉じさせるわけにはいかない――。

その言葉の真意を、ハルユキはまだ理解できていない。しかし、一つだけ確かなことがある。グランデは、確固たる意志に基づいて、いまハルユキの前に立ちほだかっているのだ。ならばハルユキも、己の信じるところを最後の最後まで示さねばならない。たとえ数秒後にサンタンたちの攻撃を受け、倍返しが発動してアバターが砕け散るのだとしても、その瞬間まで諦めてはならない。

真つ赤に焼けた各関節から火の粉を飛び散らせながら、ハルユキは最後のラッシュを繰り出そうとした。

その刹那。聞こえた。

――鴉さん、もう少し頑張って!!

声だったのが、思念だったのかは解らなかった。しかしハルユキは、両手両足をフル回転さ

せながらも一瞬だけ視線を右上空に向け、それを見た。

濃い紫色のガス星雲をバックに飛翔する、青い彗星。

彗星に抱かれた、赤い流星。

（ICBM）スカイ・レイカーと、（青色弾頭）アーダー・メイデン。

高速飛行するレイカーの腕に抱かれたメイデンが、弓を引きながら叫んだ。

（「フレイム・トールレンツ」！！）

放たれた矢は炎をまといていなかった。しかし必殺技そのものは発動し、瞬時に数十本にも分裂した矢が、銀色の雨となって戦場に降り注いだ。

「くっ……」

上空から肉迫しつつあったサンタンと、グランデの後方から接近するバウンドとアッシュが、揃って両腕を掲げて防御姿勢を取った。直後、カカカカカン！ と乾いた金属音が立て続けに響く。

必殺技は効果範囲にハルキをも捉えていたが、当たる可能性のあった矢は頭上のサンタンと目の前の大盾に全て阻まれた。サンタン、バウンド、アッシュは全身に複数の矢を受けたものの、体力ゲージは大して減っていない。グランデに至っては、防御行動を一切取らなかったにもかかわらずノーダメージだ。

しかし、メイデンの必殺技の狙いは、ダメージではなかった。

矢の雨が生み出した和那の停滯の中で、メイデンを音もなく分離させたスカイ・レイカーが飛んだ。

ゲイルスラスターから、それまでの十倍もの勢いで噴射炎が迸る。夜空を、青い光のラインが一直線に切り裂く。

残された気力を振り絞って連打を続けながら、ハルユキは両眼を見開いた。しかし、いまだ超加速感覚の中にいるハルユキにさえ、レイカーの姿はかすかな残像としてしか捉えられなかった。

青い光に接触したサンタン・シエイファーが、悲鳴を上げることさえできずに吹き飛ばされ、ステージ下方の暗闇へと消える。

光は急激にターンし、並んでいるアツシュ・ローラーとアイアン・バウンドに真横から襲いかかる。アツシュは同じく吹き飛ばされただけだったが、残り体力の少なかったバウンドは鋼鉄の欠片となって爆散する。

瞬時に三人を排除したレイカーは、再びターンすると、ハルユキの後方へと舞い上がった。

——鴉さん!!

駆塞に楓子の声が響いた瞬間、ハルユキは眼前の大盾に最後の回し蹴りを叩き込み、反動を利用して後方に跳んだ。

本来なら、ここで連続攻撃終了と判定されて、ザ・ストライフに蓄積された物理ダメージが

倍返しされてきたはずだ。

しかし、絶妙のタイミングで、盾の中央に突き刺さったものがあつた。

ドカアアン!! と凄まじい轟音を響かせて大盾を直撃したのは、尖った爪先と細いヒールを持つ、スカイ・レイカーの右足。

全精神力を使い果たし、四肢を投げ出して漂いながらも、ハルユキはその姿を網膜と記憶に焼き付けようとした。

レイカーの背中に装着されたゲイルスラスターが、肩甲骨のジョイント部分で百八十度回転して、頭上に噴射炎を進らせている。長い銀髪が激しくたなびき、スマートな胴体と長い右腕は一本の槍と化して、絶対防御の神器を穿たんとする。

レイカーの足裏とグランデの大盾の接触面から、純白のスパークが激しく噴き出す。恐るべきパワーが一点に集中しているせいか、周囲の空間が波紋のように揺らめく。

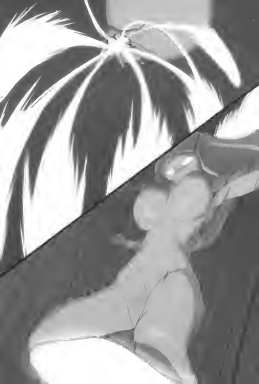
——師匠、レイカーさん。

赤熱したままの両拳を握り締めながら、ハルユキは心の中で呼びかけた。

——あなたは……あなたはこそは、この星空を飛ぶために生まれた、唯一の宇宙戦用デュエルアバター。ここでも、あなたは誰にも負けない。たとえ相手が王だろうと。

——だから……だから!!

「貫け、レイカー!!」



そう叫んだのは、ハルユキではなく、遠く離れた浮島でグラフィイト・エッジと戦っているはずの黒書姫だった。その声がエネルギーとなったかの如く、ゲイルスラスタから伸びる青白い噴射炎が、ひときわ勢いを増した。

突然。

体の芯まで響くほどの重低音を轟かせて、神器（サ・ストライフ）が、盾を構成する四つのパーツを上下左右に分離させた。新たな攻撃が、とハルユキは歯を食い縛った。

しかし、違った。

支柱で繋がる四つのパーツの側面から、大量の蒸気が噴き出す。あれは悉く、エネルギー蓄積の限界に達した盾が、溜め込んだダメージを排出しているのだ。

次の瞬間、均衡状態が崩れた。

先刻に数倍する凄まじい衝撃音が、ステージ全体を震わせた。レイカーの足裏から、インパクトの輝きが何重もの同心円となって広がった。

「……見事」

そのひと言だけを残して、緑の王グリーン・グランデは、分離した十字盾を左手に構えたまま底無しの星空へと超高速で吹き飛ばされた。あれだけの衝撃を受けても体力ゲージが減っていないのには脱帽するしかないが、しかし、これで緑の王も当分は主戦場に戻ってこれられないはずだ。

スカイ・レイカーは、くると宙返りしながらグイルスラスターを本来の向きに戻すと、その場に浮遊しながらハルユキのほうに向き直った。

「頑張ったわね、鴉さん」

穏やかな声でそう言われた途端、ハルユキの両眼に、自分でも理由の解らない涙が滲んだ。

「……いえ、師匠が来てくれなければ、情返しでやられてましたから……」

どうにかそう答えると、鴉子はそつとかぶりを振る。

「運うわ。鴉さんが諦めないで連撃を続けてくれたからわたしとメイデンが間に合ったんだし、鴉さんが蓄積してくれたダメージがあつたからグランデの盾を撃ち抜けたのよ。……さ、まだ戦いは終わってないわ」

差し出された手を取りながら、こくりと頷く。ここで気を續めてはいけない。

ダレート・ウォールは、ビリジアン・デクリオンとアイアン・バウンドがともに退場。しかしサンタン・シェイファー、リダナム・バイタ、アッシュ・ローラー、ドラファイト・エッジ、そしてダリーン・グランデはいまだ健在。

ネガ・ネビュラスは七人全員が生き残っているが、シアン・パイルが深傷を負い、ブラック・ロータスのダメージも大きい。ステージの後方へ吹き飛ばした敵が全員戻ってくれば、まだまだひっくり返される可能性はある。

「さて、まずは、残しておくところとめんどくさい（例が本体のヒト）をやっつけに行きますか」

微笑みながらそう言くと、楓子はハルエキの手を握ったまま、ゲイルスラスターを軽く噴射させた。

ロータス、レイカー、カレント、メイデンの四人に隙間なく囲まれたダラファイト・エッジが降参を宣言したのは、わずか三十秒後のことだった。

4

六時間目のLHRが終わり、担任が姿を消した途端、二年二組の教室は賑々しい空気に満たされた。

月曜日の憂鬱さも、夏休みまであと一週間という期待感には敵わないらしい。梅雨が明けたばかりの七月の空は午後三時半を回ってもまだまだ明るく、運動部の生徒たちが我先にと教室を飛び出していく。

奈胡志帆子は、喧嘩が落ち着くまで待ってから、スツールバッグ片手に立ち上がった。教室の後ろ側を横切って外に出ると、廊下のそこかしこで談笑する生徒たちの視線を避けるように歩く。混み合う中央階段は避け、校舎端の階段で四階まで駆け上る。特別教室が集まる人気のないフロアに迫り着くと、ふうつと細長く息を吐く。

いつ頃から、学校がこんなに息苦しい場所になってしまったのだろうか。

別にクラスでいじめられているとか、仲の悪い生徒がいるとかそういうわけではない。成績は真ん中より少しいくらい、運動も別に苦手ではないし、見た目もまあ平均的だろうと思う。つまりこの敷島大学付属桜見中学校第二学年に於いて、志帆子はボリュームゾーンのど真ん中に位置する生徒であるはずなのに——でも、なぜか、息苦しい。自分の居場所だという

気がしない。

もつとも、もしかしたら、どんな生徒も多かれ少なかれ似たようなことを感じているのかもしれない。みんな一生懸命空気を読んで、周りに合わせて、異物と見なされないよう努力しているのかもしれない。それが、中学生であるということなのかもしれない。

——もしそうなら、わたしはけっこう、幸せなほうかも。学校に、小さいけれど心から落ち着ける場所があるんだから。

そんなふうに自分に言い聞かせながら、志帆子は調理準備室のドアを開けた。すると、壁際のベンチチェアにはすでに二人の先客がいて、思わず苦笑してしまう。

「早いなあ、二人とも」

すると、手前に座るショートボブの女子が、くっきりした眉を少しばかり垂立てた。

「あつ、何その言い方」。会議するから早く来いっつったのシホじゃん」

続いて、奥のセミロング眼鏡女子も、唇を尖らせる。

「せっかくシホちゃんにブラウニー焼いてきてあげたのにねー」

「えっ、マジで？ よーし、お茶淹れよっと！」

「まあ、サトちゃんにじゃないよー」

「優しいユメが、あたしのぶんも作ってきてくれてないわけがないはずがない！」

「なんか日本語おかしいよー」

二人のやり取りに、再び口許を緩めながら、志帆子は準備室のドアをきっちり閉めた。

この四畳半相室の狭い部屋が、(サト) こと三登聖実、(ユメ) こと由留木結芽、そして奈胡志帆子の三人が膝を置いている手芸料理同好会の部室だ。結芽が去年立ち上げたばかりの同好会なので、部員はこれで全部。

隣の廊かこにバツグを置くと、志帆子は奥のミニキッチンに向かった。天吊り棚から紅茶の缶を取り出す聖実の隣で、電気ケトルに水を満たし、スイッチを入れる。後ろのテーブルでは、結芽が冷蔵庫から出したブラウニーを三等分している。

息の合った動きでてきばきとお茶の支度を調えらると、三人はテーブルを挟んで座った。部屋が細長いので、聖実と結芽の背中は収納棚に、志帆子の背中は壁にくっつきそうだ。同好会の活動中は隣の調理実習室を使ってもいいのだが、しかし広すぎるのも逆に落ち着かない。現状では壁見中最小のクラブである手芸料理同好会には、この準備室くらいがちょうどいい。

カップを持ち上げ、オレンジフレーバーの紅茶を一口飲むと、体と心の張り合いがゆるゆると溶けていく。

学校は息苦しいけれど、この(小さな箱)で二人と過ごす放課後のひとときがあるから、どうにか毎日登校できる。これで充分。他には何も望まない。

——ずっと、そう思っていたのだが。

大ぶりに切り取ったブラウニーを頬張り、幸せそうにもぐもぐしている聖実の横で、結芽が

眼鏡のブリッジをぐいっと持ち上げながら言った。

「……で、シホちゃん、向こうに行く日は決めたの？」

「んんー……」

唸り声で答えてから、とりあえず志帆子もブラウニーを一切れ食べてみる。しっとり濃厚なチョコレート風味が口に広がり、オレンジテイーと実によく合う。

「……さすが会長、腕を上げたね。本物のチョコみたい。本物八年くらい食べてないけど」

「でしよー。キヤロパウダーを溶かしバターでよく練るのがコツなのね……じゃなくて！」
律儀にノリツツコミを入れてから、結芽はテーブルに身を乗り出す。

「同好会の会長は私だけど、チームのリーダーはシホちゃんだからね！ いいかげん覚悟決めなさいよね！」

「う、うう……だって……」

フォークでブラウニーをつんつんしながら志帆子が口ごもっていると、あつという間に自分のぶんを食べ終えた聖実が口を挟んだ。

「もし、うじうじしてんなよシホ。あっちじゃですわですわ言っただけー偉そうなんだから、もっと自信持ちなつて！」

「ぐ、ぐぐ……だって……」

上目遣いになりながら、並んで座る結芽と聖実を交互に見やる。

志帆子の目から見ても二人はかわいい。ボーイッシュな聖実にインテリっぽい結芽とタイプは違うが、二年生でもかなりのハイランカーだろう。この二人を前にして、そうそう自信など持てるわけがない。

という後ろ向きな思考を見抜かれたか、結芽が背後の欄から卓上ミラーを引っ張り出して、テーブルにどんと立てた。

「ほら、シホちゃんはかーいいよ！ ナマで会えばあのカラス君だって一撃KOだね！」

「そ、そーゆーんじゃないし！」

従ててかぶりを振りつつも、視線は鏡の中の自分に吸い寄せられる。

まったくもって、平凡という言葉を変人化したような顔だ。髪型も、いかにも中学生っぽいセンター分け後ろ結び。身長も体重も学年の平均値。普通——尋常ではないレベルで普通。ぐたりとテーブルに突っ伏しながら、志帆子は呻いた。

「むり。むりー。あっちですわですわ言ってるアバターの中身がこんなのだってバレたら、痛い子って思われてレギオン除名されちゃうよお……」

「へー、痛い子って自覚あるん……」

何やら容赦ないことを言いかけた聖実の脇腹をどついて黙らせ、結芽はにっこり微笑む。

「大丈夫だよシホちゃん！ 痛さじや向こうの王様も負けてないからね！」

「おま、それ、絶対本人に言うなよな……。——まあ、その、なんだ。あたしも、シホはかわ

いいと思うよ」

「……じゃあ、どうかいいか言つて」

わずかに顔を持ち上げてそう要求すると、聖実はいさし間を置いてから答えた。

「……水之屋のあんみつに入ってる干しあんずのように可愛い」

「ぜんぜん伝わんないし！」

再びごつんとテーブルに顔を落ささせ、そのまま志帆子は眩いた。

「……それに、デュエルアバターが（シヨコラ・バベッター）な理由が、カカオアレルギーでチョコ食べられないからとか、直球すぎるよね……」

「んなこと言つたら、あたしなんて苗字が三登で、アバターネームが（ミント・ミトン）だぞ！ しかも別にミント味が好きでも嫌いでもないんだぞ！ そのうえ、ミトサトミって回文なんだぞ！」

膨れっ面で反論する聖実の肩をぼんと叩き、結芽が微笑む。

「きつと、サトちゃんに心の傷がないから、BBシステムが名前からアバターを作ってくれたんだね」

「そっかし。……つて、あるわー あたしだって、心の傷の十個や二十個、平気であるわ！」

「へー、たとえば？」

「えっと……それは……つていうか、お前だって小学校の時に（ウメ）ってあだ名付けられた

とかどーでもいい理由で（プラム・フリッパ）になつたくせに！」

「違いますうー！梅干しの種が喉に詰まって死にかけてたからですうー！」

「どっちにせよどーでもいいわ！」

聖実と結芽のハイテンボな掛け合いを拝聴しながら、志帆子はブラウニーの最後のひとかけを口に運び、ゆっくりと味わった。

このブラウニーは、板チョコやココアパウダーの代わりに（キャラブ）という地中海原産の豆のパウダーを使つてある。アレルギーでチョコレート類が一切食べられない志帆子のために、結芽たちが研究開発してくれたのだ。

チョコレートは色々なお菓子や飲み物に使われているので、小さい頃はそれなりに辛かった。気付かずに食べてしまい、呼吸困難になつて病院に運ばれたこともある。しかしその記憶が、デュエルバターの銚型になるくらい深い心の傷なのだとは、正直認めたくない。なんだか、ただの食いしん坊のようではないか。

「……でもまあ、直接会つたからって、すぐにアバター妻國の話になるわけじゃないだろうし……そんなの、プライバシー中のプライバシーだし……」

自分に言い聞かせるようにぶつぶつ呟いていると、言い合いを中断した聖実と結芽が同時に振り向き、うんうんと頷いた。

「そーだぜ、シホー んなどどるほどのことじゃないって！」

「そうそう、きつといい人たちだよ、たぶんー」

「それに、あのダレウオにガチ勝負で勝ったんだぜー マジすげーしー」

「しかも相手には六層装甲が五人もいたんだよねー」

「……そんなに、余うのが楽しみなわけ？」

志帆子が訊ねると、二人は顔を見合わせ、「うへへ」と照れくさそうに笑った。やれやれと苦笑を返しつつ、狭くも居心地のいい調理準備室をぐるりと見回す。

三人で結成したレギオン（小さな箱）の名前の由来となっているのは、もちろんこの部屋だ。ここでお菓子を作り、お喋りし、ここから無制限フィールドにダイブして友達のカルちゃんに会いに行った。対戦もろくにしない、領土戦なんかとんでもないという他のバーストリンカーから見れば不真面目なレギオンだったかもしれないが、三人にとってはとても大切な場所、大切な時間だった。

しかしブチ・バケは三日前——七月十二日金曜日の夕方に解散した。そして三人は、隣接する杉並エリアの支配レギオン（ネガ・ネビュラス）のメンバーとなった。

翌日の領土防衛戦にはさっそく参加し、緑のレギオンの攻撃チーム相手に、慣れないながらもそこそこの働きはできたと思う。しかしその後、志帆子たちは、新しいレギオンマスターである黒の王ブラック・ロータスから思わぬ誘いを受けたのだ。いちど現実世界で会って、話をしないか、という。

曜曜に「考えて差し上げてもいいですわー」と高飛車な返事をしてしまい、バーストアウトしてから呆れ顔の聖実と結芽の前で頭を抱えたものだが、実際それから九二日間考え続けても迷いは消えない。

単純にリアル割れの禁忌を犯すことを恐れているわけではない。聞けばネガ・ネビュラスの七人はかなり前からリアルで会っているらしいし、生身を晒すリスクは加速世界最大の反逆者である黒の王のほうが遥かに大きいだろう。むしろ、志帆子たちを信頼してくれていると思うべきだ。

本当は、迷っているのではなく、恐れているのだ。平凡・オブ・平凡な素顔志帆子の姿で、加速世界の伝説と言ってもいい《絶対切斷》ブラック・ロータスや《超空の流星》スカイ・レイカー、そしてシルバー・クロウの前に立つ勇氣がないのだ。

テーブルに置かれたままの卓上ミラーに手を伸ばし、ばたんと音を立てて倒すと、志帆子は何度目かのため息をついた。

志帆子がバーストリンカーになったのは二年前、小学校六年生の時だ。(親)は、同じクラスだった聖実。

さして仲がいいわけでもなかった、というよりほとんど喋ったこともなかったもので、最初に声を掛けられた時は驚いた。校庭の片隅で「ゲームって好き？」と聞かれて、もっと驚いた。バーストリンカーになってしばらく経った頃、どうしてわたしを(子)にしようと思ったの



かと誤いたのだが、聖実（せいじつ）は「ピンと来たから」と笑うだけだった。その時は膽（い）に落ちなかったものの、少し後に学校の図書室でお菓子のレシピ本を読んでいる結芽（むすぎ）を見かけた時に、志帆子（しほこ）自身もピンと来たのだからそんなものなのかもしれない。

物思いを中断し、お茶のお代わりでも淹（い）れようと椅子（いす）から立ち上がりかけたその時、聖実（せいじつ）がいつになく静かな声を出した。

「あたしね……」

志帆子（しほこ）が座り直すと同時に、結芽（むすぎ）も体を右に回して聖実（せいじつ）を見る。

「あたしね、いま、シホとユメと廊下（ろうか）でお喋り（しゃべ）りしたり、お菓子食（た）べたりできるのが、凄（すご）く嬉しいんだ。だって、いったんは、なくしちゃったはずのものだから」

すらりとした右手（みぎ）が持ち上がり、セーラー服（せいらいふく）のリボン越しに胸（むね）の真（ま）ん中（ちゆう）を押さえる。つられたように、結芽（むすぎ）も同じ仕草（しこう）をする。

「ISSキットに寄生（きようせい）されてた時のことは、正直（しんじつ）あんまり覚えてない。シホは忘れていいって言（い）ってくれたし、あたしもそうしたいけどさ……でも、全部（ぜんぶ）を忘れちゃうわけにはいかない。あたしとユメは、シホとタルちゃんに酷（こ）いことを……取り返（かえ）しのつかないことをしちゃうところだった。それを、偶然（ぐうぜん）通りかかっただけのシルバー・クロウとライム・ベルが助（たす）けてくれた。そのことは、絶対（ぜったい）絶対（ぜったい）、忘れちゃいけないんだ」

聖実（せいじつ）が口（くち）を閉（し）じると、結芽（むすぎ）と志帆子（しほこ）はゆっくりと頷（うなづ）いた。仄（ひそ）かな微笑（ほくそ）みを浮かべて頷（うなづ）き返す

と、聖実には再び喋り始める。

「……あたしの（親）は近所に住んでるお姉さんだったんだけど、あたしにブレイン・パーストをくれた二ヶ月後に全損しちゃったんだ。あの時はすごく寂しくて、心細くて……それからしばらくは対戦する気にもなれなくて、ずっとグロバル接続を切ってた。もうこんなゲームやめちやおうかなって思ったりもした。でも、やっぱり加速世界には未練もあって……あたし、なんだかんだ言っ、自分のアバターけっこう好きだから、さ」

その言葉に、二人はもういちど深々と頷く。デュエルアバターは単なるゲームキャラクターではない。自分の心から生まれてきてくれた、唯一無二の分身なのだ。

「……そんなふうに着替えてた頃、クラスでちょっとした事件があったんだ。給食の時間に、アホな男子がふざけて、カカオアレルギーの女の子のパンにチョコペースト垂らしてき。そしたら女の子が、「お前が食え！」って叫んで、そのパンをアホ男の顔にバーンってやって、アホは顔面コゲ茶色で土下座。あれはスカッとしたなあ」

そこまで聞いた途端、志帆子は顔がカーッと熱くなるのを感じた。確かに、小六の時にそんな出来事があったような気がしなくもない。やや上体を引きつつ、聖実に訊ねる。

「……………もしかして、アレで？」

「うん、アレでびーんと来た。それまでずっと、大人しくて自立たない子だと思ってたけど、こいつファイターだな、って。手感どおり、その子はBBのインストールに成功して、しかも

そのすぐ後に自分の（子）まで作ってきて。嬉しかったなあ、あの時は……」

噛み締めるような表情でそう呟く聖実には、思わず志帆子もじーんと来そうになった時、聖実がばちくりと瞬きした。

「そういや、シホとユメはなんでBBのインストール条件クリアしてたわけ？ 例の、生まれてすぐにニューロリンカーどうこうってやつ」

「いまごろ訊くんかい！」

椅子の上で軽くずっこけ、咳払いしてから答える。

「わたしはちよつと未熟児だったから、バイタルモニタリングのため。ユメは確か、早期教育のためだよわ？」

「そーだよー。あんま効果なかった感じだけどねえ」

眼鏡を光らせてふひひつと笑うが、この三人の中で、彼女がいちばん成績がいいのは間違いない。

「で、サトちゃんは何でなのー？」

結芽に問い返された聖実は、少々バツが悪そうに答えた。

「あ、あたしも、そのキョーイタのやつ」

「そっかあ……効果なかったねえ……」

「うん……ってユメ、お前が言うなや！ つうか、あたしがすげーいい話してる途中じゃんか！

黙って聞けよ！」

ベンチシートの上でじたばたしてから、聖実は一「えーとなんだっけ」と首を傾げた。ため息を呑み込み、志帆子は話題をレジニームした。

「わたしとユメがバーストリンカーになって、サトが感激のあまり号泣したってとこ」

「な、泣いてねーし！……えーと、つまり何が言いたいかというところ……システムの一時解散になっちゃったけど、あたしは（ブチ・バケ）が超超超大好きだ、ってこと。それが壊れちゃいそうになった時に助けてくれたカラス君とベルちゃんにも、超超超感謝してるってこと。だからあたしは、あいつらと一緒に戦いたい。そんで……もしリアルでも友達になれるなら、なりたいな」

その言葉を聞いた途端、志帆子ははっと顔を上げていた。

聖実は、志帆子がバーストリンカーになってくれて嬉しかった、と言った。しかし本当は、救われたのは志帆子のほうだ。息苦しいだけの世界に、心から落ち着ける場所を見つけることができたのだから。

そう——ブチ・バケとこの準備室は、志帆子にとってのシェルターだった。ここでなら何に怯えることもなく、胸の奥まで空気を吸い込むことができた。

でも、いつまでも小さな箱に閉じこもってはいられないのだ。加速世界でも、現実世界でも、永続するものなどない。いつかは箱の蓋を開け、外に出なければならぬ時が来る。どんなに

著しくても、頑張つて息をして、前に進まないといけない時が必ず来る。

本当は、その時はとつくに來ていたのかもしれない。無制限中立フィールドに突然舞い降りた白い霧が、志駒子に向けて手を差し出した、あの瞬間から。

再びの物思ひに沈みながら、自分の右手をぼんやり見詰めていると、結芽が笑いを含んだ声で言った。

「あー、シホちゃん、カラス君にべろべろされた時のこと思い出してるうー」

「なっ……ち、違うし！ リアルであいつに会ったら一発とついたらって思ってただけ！」

右手を拳に握り締め、勢いよく立ち上がると、志駒子は宣言した。

「決めた！ 明日の放課後、杉並に行くよー」

「……」

聖実と結芽は声を揃えて拍手すると、交互にまくし立てた。

「そんじや、お土産にお菓子作ってこー！ あたし、タルト系がいいな、タルト系！」

「どーせなら、私たちっぽいお菓子にしようよ。ミントチーズケーキとわー、プラムのタルトとおー、あとキャラブのガトーショコラかなー」

「よっしや、駅前のキッチンコットで買い出ししてから結芽んち行こー！」

「いこおー！」

勢いよく右手を突き出す二人に、

「それ、何時間かかるのよ……」

と突っ込みながら、志帆子はキツチンの奥の小窓を見上げた。ほんの少しオレンジ色に染まりつつある夏空を、さっと鳥の影が横切った。

「……梅雨が明けたからって、いきなりこんな本気出さなくてもさあ……」

じりじりと焼け付くような西日を背中で受け止めつつ、ハルユキはばやいた。ホウの世話をしながらの下校なので時刻は四時を回っているが、仮想デスタトップに表示されている気温は三十度ジャスト。一刻も早く自宅に帰り着き、冷房の効いたエントランスに飛び込みたいが、今日はその前に一件ミッションをクリアせねばならない。

七月十七日、水曜日。

気温の下の日付表示を睨みながら、右手の指を一本ずつ折り曲げる。何度数えても、三日後には運命の水曜日がやってくる。

土曜の午前中は、待ちに待った一学期の終業式だ。黒雪姫にスーパーハードモード勉強会を開いてもらったおかげか期末テストの結果が奇跡的に良かったので、今回は通知表に関してはさほど憂鬱ではない。夏休みになればいまだに黒雪姫の顔を見られなくなるが、ホウの世話で学校には行かず、その時に会える機会もあるだろう。それに八月に入れば、みんな登山影に旅行するという楽しみすぎる予定もある。

それだけなら水曜日を待ちわびる気持ちにもなれるのだが、問題は午後だ。四時から始まる

領土戦で、ついにネガ・ネビユラスは、グレート・ウォールから退避される渋谷第二エリアを橋頭堡として港区第三エリアに侵攻する。白のレギオン、オシラトリ・ユニヴァースの領土——そして加速研究会の本拠地に。

具体的な手順としては、まずネガ・ネビユラスが渋谷第一エリアに攻撃登録し、四時になる直前にグレート・ウォールが領土放棄。他に攻撃チームがいなければ——まず間違いないと予想されるが——渋谷第一は無戦状態で黒の領土となるので、すかさず隣接する渋谷第二に攻撃登録し、再び緑が放棄する。これで、午後四時から一分もかからずに、西エリアはネガ・ネビユラスに返還されるわけだ。

直後、ハルユキたち攻撃チームは現実世界で港区第三エリアに侵入し、同時に攻撃登録する。オシラトリ・ユニヴァースはもちろん防衛チームを登録しているはずなので、そこでついに本番の領土戦が開始される。勝利すれば、港区第三には黒の旗が立ち、白のレギオンの「マツチングリスト遮断特権」は失われる。リストを確認し、そこに加速研究会メンバーの名前が一つでも出現していれば、暗れて白のレギオンこそが加速研究会である、と主張できる——。

作戦の流れとしてはそんな感じなのだが、問題も二つばかりある。

一つは、第三者のマツチングリスト確認役、すなわち（監視者）を誰に頼むのかということだ。

最重要な証人となるので、地位と人望のあるバーストリンカーでなくてはならない。しかも

彼または彼女には、ネガ・ネビュラスがオシラトリの領土を攻める。オシラトリが黒幕だと睨んで、いることを事前に伝える必要があるため、情報を漏らさないと確信できる相手でなくてはいけない。更に、グレート・ウォールはネガ・ネビュラスに協力したと見なされるはずなので、緑のメンバーには頼めない。同じ理由でプロミネンスも不可能だろう。

そうすると、残る大レギオンは、青、紫、黄の三つだけ。どこも友好関係とは言いが、紫と黄色ははっきりと敵対的なので、消去法で青の一択となる。しかしまさか青の王ブルー・ナイト本人には頼めないのです。誰か上位のメンバーと秘密裏に交渉しなくてはならない。

二つ目の問題は、港区第三エリアの攻撃メンバーをどうするか、ということだ。

当然だが、ネガ・ネビュラスの総力をもって当たるのが理想ではある。港区は三つのエリアに分割されていて、オシラトリが均等に防衛戦力を配置していたとしても、幹部の（七連矮星）が少なくとも二人、加えて一般メンバーも十人はいるだろう。

領土戦の参加人数は、防衛側に攻撃側が合わせるのが原則だ。防衛側が少なければ攻撃側もそれに合わせて自動で調整されるのだが、防衛側が多い場合はそのまま開始される。つまり、オシラトリの防衛チームが十二人と予想されるなら、攻撃側もそれだけの人数を揃えないと、数的に対等な戦いはできない。

しかし現在、ネガ・ネビュラスの総数は、加入したばかりのプチ・パケ組を足しても十人。仮にフルメンバーで挑んでも、恐らく防衛側の方が多だろう。しかも、杉並エリアの防衛

に最低三人は残さないといけないので、港区に遠征できるのは七人ということになる。

昨日のミーティングで、黒雪姫は「私も出るー」と散々に駄々をこねたが、皆の必死の説得でなんとか押し留めた。万が一、オシラトリの防衛チームを白の王ホワイト・コスモス当人が率いていたなら、そこでいきなり王対王の最終決戦となってしまう。

黒雪姫は、領土戦ではバーストポイントが移動しないので、レベル9サドンデス・ルールも適用されないはずだと主張した。だが確定情報ではない以上、レギオンマスターを即死の危険に晒すわけにはいかない。日曜日の、グレート・ウォールとのバトルロイヤルでさえハルユキは物凄く不安だったのだ。明確に敵対している白の王が相手なのだから、土曜日は何が何でも自重して貰わねばならない。

最終的に黒雪姫を納得させたのは、意外にも、現実世界でのミーティングに初めて参加してくれたショコラ・バベッターこと奈胡志帆子だった。リアルでは語尾に「ですわ」がつかない、それどころかとても真面目で礼儀正しいイメージの彼女は、黒雪姫を泣かすように見詰めていると言った。

「心を繋いだ人との絆が断たれるのは、とても辛くて悲しいことです。たぶん、加速世界で、いちばん悲しい出来事かもしれない。わたしたちがネガ・ネビュラスに入れてもらったのは、もう誰にもそんな思いをして欲しくないからなんです。土曜日の戦いが、とても重要なことは解ります。でも、もっと大切なのは、この場のみんながこれからずっとバーストリンカーで

あり続けることだと思ひます」

ISSキットのせいでも、リアルでも親友だというミント・ミトンこと三登聖実と、プラム・フリッパ―こと由留木結芽との絆を失いかけた軽駄のある志帆子の言葉には、黒雪姫を鎮かせるだけの重みがあった。もしかしたら、彼女たちが差し入れに持ってきてくれた手作りケーキ三種がどれも驚くほど美味しかったせいもあるかもしれないが。

「……手芸料理同好会か……いいなあ、毎日学校であんなお菓子作って食べられるのかなあ……」

大変気に入った（キャラポ豆のガトー・ショコラ）の濃厚な味を反芻しつつ、そんなことを呟いてしまってからいかにいかに頭を振る。いつの間にか新青柳街道と環七の立体交差近くまで歩いてきていて、帰宅するならここを左折だが、今日は与えられたミツシオンを達成するために環七を渡ってバスに乗らねばならない。

「すう……はあ……」

信号が変わるのを待ちながら、ブレンジャーを少しでも軽減しようと深呼吸を繰り返している――。

【UIV ファイト、なのです！】

いきなり視界にそんなチャット文字列が出現し、ハルユキは思いきり仰け反った。

「うおえ!?」

しゅばつと振り向くと、眼下には十五分前に学校を出たところで別れたはずの（超委員長）こと四禁宮（よしきみや）の笑顔があった。

「し、四禁宮さん、なんで!? 帰ったんじゃないの?」

仰天（ぎやうてん）しながら両眼（りやうがん）を睜（ひら）かせるが、真っ白なワンピースタイプの制服に、茶色のランドセルを背負った謎はどう見ても本物だ。涼しげに切り揃えられた前髪の下顔には一滴の汗も浮いていないが、それはA.R.映像だからではなく精神修養の差だろう。

小さな両手の指が超高速で閃き、チャット窓がスクロールした。

【U1V 有田（あた）さんが緊張（きんじやう）されているようだったので、新高円寺（しんこうえんじ）駅のレンタルロッカーに荷物を預けて、追いかけてきたのです】

「え……じゃあ、ずっと後ろに?」

【U1V さっきの独り言もばっちり聞いてたのです。有田さん、飼育委員会をやめて料理部に入ろうとは思ってませんよね?】

可愛らしく唇（くちくち）を尖らせる謎に、慌（あわ）ててかぶりを振りつつ答える。

「お、思っていないよ、ぜんぜん、まったく! ていうか……ごめん、心配かけちゃって……。お家（うち）と遠方（とんぱう）なのに、わざわざ、こんなところまで見送りに……」

すると、今度はきょとんとした表情になってから、謎は再び指を動かした。

【U1V お見送りじゃないですよ? それだけなら荷物を預けたりしません。もちろん、私

も一緒に行くのです！」

「うおえ？」

と、再び叫ぶしかないハルユキだった。

環七を渡った先でE.Vバスに乗り、二人掛けのシートに並んで座ると、ハルユキはふうっと息を吐いた。車内は病気房だが、三十度超えの外気温に比べれば天国のようだ。ようやく汗が引いてきたところでふと気になり、隣の人に訊ねる。

「そう言えば、梅郷中の飼育小屋って空調設備とかついてないけど、ホウは暑いの大丈夫なの？」

「U.V 南方系のコノハズタなので、暑さにはけっこう強いのですが、冬は暖房が必要ですね……。いまの小屋にソーラーパネルを設置するか、それとも冬だけお引っ越しをするかは、サッチンとも相談しましょう」

「そっか……アフリカ原産だもんね。ソーラー暖房システムがどれくらいの値段で導入できるのか、僕も調べておくよ」

「U.V お願します、委員長さん」

にっこり微笑むと、道は両手を膝の上に戻した。

新青梅街道を東進するバスは、東高円寺駅を過ぎたあたりで中野第二エリアに入る。

レオニーズが杉並を攻撃するために、土曜日の領土戦タイムだけ一時占領することがあるが、

基本的には空白エリアなので平日夕方でも盛んに対戦が行われている。

ハルユキが、ウルフラム・サーベラスと初めて対戦したのも中二エリアだった。ずっと昔のことのようにも思えるが、まだほんの三週間前の出来事なのだ。しかしその三週間のあいだにあまりにも多くの出来事があり、いままさーベラスは加速世界から姿を消したままだ。

ニコから（インビンシブル）のスラストスターを奪ったのはサーベラスⅢ、トダスク・ティカー・コビーだが、システム上は、スラストスターはいままさーベラスⅠが所有しているはずだ。災禍の鐘マーク目はそのスラストスターに残留していると考えられ、ISSキット端末を遠かに超える膨大な負の心意エネルギーが、現実世界のサーベラスに影響を与えていないはずがない。

高円寺ルック商店街の雑踏ではほんの一瞬だけ邂逅したサーベラスは、ハルユキより少し年下らしい、小柄で優しいような少年だった。（人造メタルカラー計画）という非道な実験によってバーストリンカーとなったにもかかわらず、彼の澄んだ眼には強い光が宿っていた。ハルユキに微笑みかけ、両手を揃えて深く一礼して姿を消したサーベラスの姿は、いまま眼をつぶればありありと思い出せる。

今日の目的地は中野第二エリアの先にある新宿第三エリアだが、中野に入ったら一回だけ加速して、マツチングリストを確認してみよう。もしかしたら、そこにサーベラスの名前があるかも——。

ハルユキがそんなことを考えていると、再び鐘がホロキーボードを叩いた。

【U—V 有田さん、中野エリアに入る前に、タッダを組んでおきましょう】

「え……？」

【U—V たぶんソロだと、クーさんはいろんな人から盗入されまくっちゃうのです】

「そ、そうかな……最近あんまりフリー対戦してないし……」

【U—V だからですー！ クーさんがメタトロン攻略戦で大活躍だったと、かなり噂になって
いるようなので、話を聞きたい人はたくさんいると思うのです】

「ひええ……話せることはとんじないよ……」

皆が知りたいのは恐らくメタトロンの即死レーザーをどう防いだか、ということだろうが、
アビリティ（光・学・誘導）の性能や弱点をはいはい喋るわけにはいかないし、さりとて要
請されたとおり（理論鏡面）を習得した、と嘘をつくのも躊躇われる。更に、大天使メタ
トロン本体の存在と、彼女がいまやネガ・ネビュラスの一員である、という事実は絶対に外部
には漏らせない。

車窓を東高円寺駅の看板が通り過ぎていくのを見ながら、ハルユキは急いで言った。

「じゃ、じゃあ、タッダ登録よろしくお願いします」

【U—V らじやー、なのですー！】

二人で同時に仮想デスクトップのBBアイコンを押し、コンソールからタッダパートナーを
指定する。これでマッティングリストにはタッダとして出現するので、シルバー・クロウはとも

かくアーダー・メイデンの名前を見て乱入できる剛の者はなかなかいないだろう。

万が一リストにウルフラム・サーベラスを発見した時もハルユキから乱入はできなくなってしまうが、その場合は理由を話してタッグを一時解消すればいい。

「あの、四壁宮さん。エリア境界をまたいだら、一回だけリストを確認したいんだ」

コンソールを消しながらそう囁きかけると、証は全てを見透かしているかのような顔でハルユキを見つめ、こくりと頷いた。

三十秒後、左車線をのんびり走るE.V.パスが、杉並エリアから中野エリアに入った。

ハルユキは臉を閉じ、しばし奇跡を祈った。普通に考えれば、港区エリアがホームのはずのウルフラム・サーベラスが、理由もなく中野まで遠征してくるはずがない。むしろ、災禍の鐘を撞しているサーベラスが対戦に復帰したのなら、それは研究会の策謀が再び動き出したことを示しているわけで、決して喜んでいい事態ではない。

それでも、ハルユキは折らずにいられたなかった。もういちど会えれば、そして言葉を、拳を交えられれば、きっとサーベラスを無明の闇から引き戻せる。そう信じずにはいられたなかった。大きく息を吸い、バースト・リンク、と眩こうとした——その寸前。

バシイイッ！ という加速音が頭の芯を突き抜けた。視界に、挑戦者の出現を知らせる炎文字が赤々と燃え上がった。誰かが、ハルユキと証のタッグに乱入してきたのだ。

道路上に静止したE.V.パスが、大気に溶けるように消えていく。街道の左右に立ち並ぶビル

ディングも次々と消滅し、午後の夏空が急速に暮れていく。

銀色の装甲に包まれた両足で着地した地面は、膝上まである細い草に覆われていた。見渡せば、風にそよぐ草の海が、視界の果てまで続いている。

「草原ステージ……なのです」

隣に立つ巫女アバターが、少し懐かしそうに言った。そう言えば、初めてタッグを組み、ブッシュ・ウータン&オリーブ・クラブと戦ったのも草原ステージだった。

中野第二エリアは南で渋谷エリアとも隣接しているので、今回もウータンたちが対戦者だという可能性はある。あるいはレオニーズの名物コンビ、フロスト・ホーン&トルマリン・シェルかもしれない。さてさて、《焔火の巫女》アーダー・メイデンに挑戦する命知らずはこのどいつだ、と少々虎の威を借り気味なことを考えながら視界右上の体力ゲージを見上げたハルエキは、この目三度目の「うおえ？」を口走った。

二段に表示されているゲージの、上の段には《コバルト・ブレード》の名前が。そして下の段には、《マンガン・ブレード》の名前がくつきりと刻まれている。

「な……なんであの人たちが中二エリアに？」

と仰け反るハルエキの隣で、話がほんと両手を打ち合わせた。

「さすがターさん、いい引きです。これで、新宿エリアまで行く手間が省けたのです」

「や……そ、そうかもだけど、僕は、ギャラリー同士で話をするつもりで……」

「ギヤラリーの場合は対戦が終わればそこで中断されてしまいましたが、対戦者同士なら三十分たっぷり話せるのです。もっとも、あのお二人が、最初から会談に応じてくれる可能性は低いでしょう。乱入された以上、まずは戦うしかないと思うのです」

「だ……だよね……。でも、どう戦えば……」

年少のハイランカーに意見を求めたが、議はつぶらなアイレンズを瞬かせて答えた。

「私はターさんの付き添いなのです。なので、ターさんの作戦に従います」

「……は、ハイ……」

何となくそう言われるような予感がしていたので、ハルユキはこつくりと頷くとステージを見回した。

広大な草原の、かなり離れたところに三々五々アバターが立っているが、彼らはギヤラリーだろう。じっと眼を凝らすと、残念ながらサーベラスの姿は見当たらない。

視界下部中央に二つ重なって表示されている薄水色のガイドカーソルは、両方ともまっすぐ北を指したまま静止している。これは、対戦相手が出現位置から動いていないか——あるいは一直線に接近してきているからだ。コバマガの二人なら、恐らくは後者。

相手は、現状、王を除けば加速世界で最強クラスの近接型タッグだ。勝利にこだわるなら、対戦が遠距離から開始されたアドバンテージを活かして逃げに徹し、議の火矢で一方的に攻撃するのがベストな作戦だろう。

しかし、ハルユキは敢えて出現地点に踏み留まった。超のつく強敵相手に有利を一つ捨てることになるが、このステージ、この組み合わせに限って、後半に一発逆転の奥の手が存在しているはずだ。

「ええと、じゃあ、序盤はしばらく遠いで下さい。僕がマーガさんの相手をするので、メイさんはコバルさんをお願いします」

覚悟を決め、ハルユキはそう指示した。しかし悪女は軽く首を傾げ、

「……………どちらがマーガさんで、どちらがコバルさんでしたっけ」

「え、ええと……装甲が青っぽくて、頭の飾りがツインテールなのがコバルさんで、ちょっとだけ緑っぽくてポニーテールなのがマーガさんです」

「了解なのですー」

こくりと頷いた超が、ゆるりと長弓を持ち上げた。

同時に、ハルユキは冷たい風が北から吹き寄せてくるのを感じた。いや、違う。草のなびき方からして、ステージに吹いているのは南風だ。これは、極限まで研ぎ澄まされた闘気。あるいは、ハイランカーの情報だ。

北に眼を凝らしたハルユキが見たのは、夕陽を受けて金緑色に輝く草の海を、滑るように近づく二つのシルエットだった。

コバルト・ブレードと、マンガン・ブレード。青のレギオン頭首ブルー・ナイトの側近たる

双子剣士。侍を模した重装甲は威圧感に溢れ、左腰の長大な刀は、抜かれてもいないのに斬刀のような鋭利さを肌伝えてくる。

二人が十メートルほど離れた場所で足を止めると、自動転送機能によってギヤラリーの数が一気に増えた。もういちど確認するが、やはりサーベラスはいない。

いつもなら野次や声援が盛んに飛んでくるところだが、今日は剣士たちの迫力に吞まれてか、誰かが静かに開戦の時を待っているようだ。

こくりと喉を鳴らしてから、ハルユキは駄目元で用件を切り出そうとしたのだが、口を開くより先に一本飾り角のマンガン・ブレードが珍瑾たる声を発した。

「レベル6になったのだな、シルバー・クロウ」

予想外の台詞に、思わず軽く頭を下げてしまう。

「あ……は、はい、どうも……」

「勘違いするな、祝福しているわけではない」

すかさずコバルト・ブレードに一喝され、ひえつと首を縮める。二本飾り角の剣士は、まっすぐハルユキを指さすと、言い聞かせるように続ける。

「レベル4はまだまだ小童、レベル5でようやく新丁、しかしレベル6ともなればもう前髪級いはいはせぬぞ」

「……前髪、ってどういう意味だろ……」

ハルユキが呟くと、顔がすかさず解説する。

「元服前の、前髪を剃っていない若侍のことなのです」

「な、なるほど」

こくこく頷いた瞬間、今度はマンガンに怒られてしまう。

「ええい、ちゃんと聞け！」

双子剣士は、同時に刀の柄に右手を添えると、声を見事に同期させつつ叫んだ。

「レベル6と7のタッグならば、相手にとって不足なし！ いざ尋常に——勝負!!」

——こりや、対戦はまた今度にしてちよつと話を、なんて絶対に無理だな。

腹を括り、タッグパートナーに短く指示する。

「さっきの作戦どおり、ゲージが溜まるまで耐えてください！」

「はい！」

頷き、長弓の弦を半分ほど引くと――。

アーダー・メイデンは、並んで立つ剣士たちの右側、二本角のコバルト・ブレードに向けて

一直線に突進した。

「なあ？」

またしても驚愕の声を上げてしまうが、凍ってはいられない。メイデンを追ってダッシュし、左側のマンガン・ブレードに先制攻撃を仕掛ける。

剣士たちは、これまた完全に同期した動きで刀の柄を握り、ぐっと体を前傾させた。抜き打ちの一撃を予感し、ハルユキは体の芯が氷のように冷たくなるのを感じた。

マンガンと戦うのはこれが初めてだが、彼女以外の剣持ちデユエル・アバターとの対戦経験も実はそれほど多くない。飛行型として、どうしても銃持ちの相手をする場面が多くなるからだ。しかし、加速世界最強の剣使いを師に持ち、何度も手合わせしてきたという自信が、ハルユキを踏み留まらせた。マンガンの斬撃がどんなに鋭かろうとも、黒の王ブラック・ロータスの（終決の剣）を上回ることは有り得ない。要害を踏み越えて――前へ！

「疾ッ！！」

一ミリの秒のずれもなく、コバルトとマンガンが同時に刀を鞘走らせた。

ハルユキは、草原の滑りやすきを利用してスライディングすると、マンガンの横薙ぎ一閃をかくぐつた。刃が鏡面ゴーグルを掠め、眩い火花が視界を焼いた。

右側では、誤が予備動作なしでふわりとジャンプし、コバルトの斬撃を飛び越える。純粋な遠隔型でありながら、本気で（青中の青）である女武者に接近戦を挑むつもりらしい。

剣士たちは、右に振り抜いた刃を、有り得ないスピードで上段に引き戻し、さき今度は真下に斬り下ろした。

「割ッ！！」

スライディングを止めたらヘルメットを真つ二つにきれる。そう直感したハルユキは、先刻

のかすり傷ではんの数トット溜まった必殺技ゲージを消費し、背中の翼を一瞬だけ振動させた。発生した推進力がスライディングを加速し、振り下ろされる刃の真下へとアバターを突進させる。

再びキンッ！と小さくも鋭い金属音が響き、ヘルメットの頭頂部を刃が掠めたが、そこで上段斬りは止まった。切断された草が舞い上がる中、ハルユキは体を縮めてマンガンの股下をすり抜け、両手で左右の草を掴んで急ブレーキを掛けた。

——メイさんはどうなった？

跳ね起きながら、視線をちらりと左に振ったハルユキが見たのは。

コバルト・ブレードの上段斬りを、長弓（フレイム・コーラー）の振りの上部でがっちりと受け止めているアーダー・メイデンの姿だった。

ここで初めて、双子剣士のシンクロナイズド剣撃が乱れた。

「く……………」

と声を漏らしたコバルトが、弓相手の窮迫り合いを中断し、後ろに跳んだのだ。

仮に強化外装のプライオリティが互角でも、アバターの腕力ではコバルトがメイデンを確実に上回る。あのまま続けていれば、力任せに弓ごと刀を押し込み、メイデンの装甲を断ち割ることも可能だったはずだ。

コバルトがそうせず、自ら距離を取った理由は、誰かが左手で刀を受け止めながら右手で弦を

引くことで生成した真紅の炎だった。燃えさかる火矢に、ほんの数センチの間合いから顔を照準されれば、どうあれ避けるしかない。

飛びすぎるコバルトに向けて、謡は至近距離から火矢を射かけた。しかし敵もさるもので、横にした刀身で足事に矢尻を受け止めてみせた。飛び散る炎が、夕暮れの草原を赤々と照らし出す。

バートナーの攻勢を眼の端で捉えながら、ハルユキもマンガン目掛けて猛然とダッシュした。振り向きつつある武者が斬撃の体勢に入る前に間合いを詰め、零距离での超接近戦に持ち込む算段だ。双子の刀は刀長が八十センチはあろうかという太刀で、密着すればまともに使えないはず。

「ハッ……」

マンガンの足許に深く踏み込みながら、右のショートフックを放つ。小手でガードされるが、すかさず左拳でボディを狙う。刀を持つ右手での防御は間に合わず、装甲の薄い脇腹にヒットし、ようやくマンガンの体力ゲージもわずかに減少する。

「小瘤なッ」

喰った武者は、刀の柄頭でハルユキの顔面をから上げようとした。だがこの攻撃は、タタムとの対戦で経験している。右へのダッキングで回避し、その動きに連動した左の膝蹴りを再びボディに叩き込む。

今度もクリーンヒットしたが、当たりが良すぎてマンガンを突き放してしまった。生まれた間合いを利用して、武者はコンバクトな面打ちを放とうとする。しかしその寸前、ハルユキは先刻のスライディングを止めた時から右手に握り込んでいた草の束を、マンガンの顔めがけて投げつけた。即席の目つぶしでわずかに乱れた斬撃をかいくぐり、再び密着すると、ショートパンチの連打でゲージを削っていく。

かたやアーダー・メイデンも、コバルトと互角以上の接近戦を繰り広げている。

シルバー・クロウほどは密着していないメイデンが、武者の斬撃を回避し続けられる理由は、ひとえに長弓の圧倒的な連射力にあった。

フレイム・コーラーには、〈矢筒から矢を引き抜き、弦につがえる〉という動作が必要ない。左手で弦を一定以上引きさえすれば、火矢が瞬間的に生成されるのだ。ハルユキが見る限り、連射速度は秒間一発を上回っている。弦を引き切っていないために威力はさほどないようだが、コバルトの接近を阻むには充分以上の弾幕だ。

対戦開始から二百秒が経過した時、クロウとメイデンの体力ゲージは九割以上を保っているのに対して、コバルトとマンガンのゲージは七割近くにまで減少していた。

もちろんこのまま最後まで押し切れるとはハルユキも思っていない。しかし、局面が変わる——すなわち敵が必殺技を使い始める前にゲージの五割を奪えば、勝算はかなり高まる。

「いけっ……」

自分に向けて短く叫ぶと、ハルユキは地面を蹴った。背中の翼による瞬間的推力を利用した高速三次元ラッシュ、命名（エアリアル・コンボ）を繰り出そうとしたのだ。

しかし。

ハルユキは、そして恐らくは誰も気付いていなかった。個別に戦っているはずだったコバルト・ブレードとマンガン・ブレードが、いつしか背中合わせて近づきつつあったことに。

「殺アアアアッ!!」

大気を震わせるような気合いとともに、眼前のマンガンが右手で握った刀を横薙ぎに振り抜いた。

これまでと同様の水平斬りなら、距離を詰めて回避できるはずだった。しかし、その必要はなかった。マンガンは、前に立つハルユキではなく、自分の真後ろめがけて、そちらを見もせず、斬撃を飛ばしたのだ。

予想外の、まったく無意味としか思えないアクションに、ハルユキの思考が一瞬硬直した。それゆえに、視界外から飛んできたもう一本の刀への対応が遅れた。

「ぐあっ!」

右腕を焼け付くような衝撃が襲い、ハルユキは呻いた。刀は装甲を深々と切り裂き、深紅のダメージ・エフェクトを散らす。あと一歩踏み込んでいたら、腕を付け根から切り落とされていただろう。

まったく同時に、マンガンの後方から誰の小さな声か聞こえた。それでようやく、ハルユキは何か起きたのかを悟った。

背中合わせにびたりと重なったマンガンとコバルトが、同時に自分の後方を攻撃したのだ。完全に意識の外側から襲ってきたコバルトの刀はハルユキを捉え、マンガンの刀はメイデンを捉えた。恐るべきは、何の合図もせず、それぞれ互いを見もせず同時に背面攻撃を成功させた双子剣士のコンビネーションだ。コンマ一秒呼吸が狂えば、振り下ろされた刀はお互いを切り裂いていたはずだ。

追撃を避けるためにハルユキは大きく距離を取ったが、マンガンは詰め寄ってこなかった。同じく立ったままのコバルト越しにメイデンの様子を確認するが、彼女も右腕を斬られたらしい。火矢の連射を中断し、距離を取っている。

双子剣士は、背中合わせのままびたりと太刀を中段に構えると、まずマンガンから口を開いた。

「格闘タイプにこれほど殴られたのは久しぶりだぞ。実のないポイントを探いでいたわけではないようだな、シルバー・タロウ」

続けて、コバルトも誰に語りかける。

「よもや、弓使いに接近戦でこうも翻弄されるとはな。さすがは加速世界にその名を知られた

《緋色弾頭》アーダー・メイデン」

「だが、このままやられっ放しでは新宿に帰れんのだな」

「そろそろ、我々も奥の手を使わせて貰うぞ」

息の合った語りを終えると、双子の武者は構えていた刀を緩やかな動作で鞘に収めた。

しかしそれが停戦の合図ではないことは明白だった。じりっと腰を落とした剣士たちの足許から、鋼のような闘気が噴き出して周囲の草むらを激しく揺らしたのだ。光ってはいないのに、心意技の過剰光ではないが、そうと思いたくなるほどの戦慄に襲われて、ハルユキは息を詰めた。

次の攻撃を、まともに喰らうのはまずい。

そう直感したハルユキは、こちらも（一発逆転の奥の手）を出す時だと判断し、背中（ついで）の翼を広げた。必殺技グージは、ハルユキが六割、隣が七割ほどチャージされている。フルグージとはいかないが、これなら足りるはずだ。

「――望むところですよ」

剣士たちに向けてそう叫びざま、地面を蹴る。真っ直ぐ突っ込むと見せかけて、右に大きく迂回し、コバルトの正面へと回る。

「メイさん！」

呼びかけながら伸ばした右手を、隣が傷ついた右手で握んだ。直後、全力で垂直上昇。

マンガンたちはメイデンをビクアアップする瞬間を狙ってくと予想していたハルユキは、

まったく動こうとしない双子剣士に少々拍子抜けしながら、一気に高度五十メートルまで駆け上った。

メイデンを両手で抱えつつホバリングに移行し、ステージを見下ろす。夕陽に照らし出される広大な草原の中央に、ぼつんと豆粒のような剣士たちの姿が見て取れる。

かつて、シルバー・クロウの銀翼を奪った強敵ダスタ・タイカーはこう勝ち誇ったものだ。

『飛行アビリティと遠距離火力のコンボは素晴らしいですよ。はつきり言っちゃえば、無敵ですよボク』と。

無敵とまで言うつもりはないが、〈近接の青〉二人のタッグ相手にこの状況に持ち込めればもう勝ち九割がた動かない。敵の刃が絶対に届かない高空から、謎の火矢で一方的に攻撃し続けられるからだ。更に、ここは遮蔽物がまるで存在しない草原ステージ。物陰に隠れることさえできない。

——でも、こんな勝ち方で本当にいいのか……。

というハルユキの一時の躊躇いを感じたかのように、腕の中の譜が言った。

「どのような状況になろうとも相手への敬意を忘れず、己の全力を尽くす。それが対戦の本義なのです、クーさん」

下に向けられたフレーム・コーラーの弦を、傷ついた右手が引いていく。いままでのように半ばで止めず、限界まで引き絞られた弓が生み出した火矢は、恐ろしいほどのパワーを秘めて

激しく燃えさかっている。

紅蓮の炎に照準されても、地上の双子剣士は刀の柄を握ったまま微動だにしない。

悉く、メイデンの通常攻撃は通常攻撃で、必殺技は必殺技で連撃し続けるつもりだろう。

ハルユキのゲージが尽き、飛べなくなるまでそれを続けられれば彼女たちの勝利だ。

両腕の中で、両が「行きます」と囁いた。必殺技の発動に備え、ハルユキは姿勢を安定させるべく両の翼をいっぱい広げた。

その刹那――。

五十メートル下方のコバルトとマシンガンが、声を揃えて叫んだ。

「（レンジレス・シージオン）!!」

技名発声。しかし、語はまだ火矢を発射していない。先読み？ それとも、まさか。

ハルユキが瞬間的にそう考えた時にはもう、二人の武者は完璧に同調した動きで左腰の刀を振り抜いていた。青い閃光が十字に燃え、そしてハルユキは、氷よりも冷たい風が体の両側を吹き抜けていくのを感じた。

がくん、と高度が下がる。慌てて翼の推力を上げようとするが、緩やかな降下は止まらない。反射的に振り向いたハルユキが見たのは――半ばから切断された銀翼が、夕陽を反射しながら音もなく落下していく光景だった。遅れて、体力ゲージが一気に二割以上も減少する。

――斬られた？ 五十メートルも離れてるのに？

——いくら必殺技って言っても、剣持ち近接型の技に、こんな鋭なみの射程距離があるはずが……。

驚愕に彩られた思考を、火花のような理解が上書きする。

コバルト・ブレードとマンガン・ブレード。あの双子は、正確には〈近接の青〉ではない。シルバー・クロウと同じメタルカラーなのだ。カラー・サークルに縛られない、例外の色。

「くっ……」

僕はそれを知ってたはずなのに、と歯噛みしながら、ハルユキは半分になってしまった翼に残る金属フィンを全開で振動させて落下を止めようとした。どうにか再びホバリングに入るが、必殺技グージは恐ろしい勢いで減っていく。このままでは、もってあと十秒。

その時、謡が、落ち着いた声で技の名を唱えた。

「（フレイム・ボルテクス）」

こうっ！ と凄まじい音を立てて、火矢を包む炎が膨れ上がった。耳をつんざく轟音とともに発射されたのは、もはや矢とは到底呼べない、真紅の螺旋でできた大輪だった。

地上の武者たちが、さっと左右に分かれて回避行動を取る。直後、二人の中間地点に大槍が着弾。赤熱する渦流は瞬時に十メートル以上も膨れ上がり、コバルトとマンガンを呑み込む。視界左上の敵体力グージが、まったく同じ速度で減少していく。二人が炎から出てこないのは、あの渦巻きに吸引効果があるからだろう。周囲の草原も激しく波打ち、ちぎれて吸い込ま

れた葉が無数の火の粉となって舞い上がる。

〔轉色弾頭〕アーダー・メイデンは、かつては（ICBM）スカイ・レイカーとコンビを組み領土戦で輝々たる戦果をあげたというが、その伝説をまざまざと感じさせる凄まじい技だ。

しかも話は、双子の必殺技が長大な射撃を持つことを察知していたに違いない。彼女たちがメタルカラーだという認識が頭から抜け落ちていなければ、ハルユキもそうと気づいて斬撃を回避できたかもしれないのに。

——僕は、まだまだ（前髪）だ。

そう自分に言い聞かせると同時に、必殺技ゲージが尽きた。

「降ります—」

残された翼で不安定な滑空を始めるハルユキの耳に、誰の毅然とした声が届いた。

「ここからは気合いの勝負なのです。ターさんのど機性、期待してます—」

「り……了解—」

叫び、ようやく鎮火し始めた渦巻きの外へ着陸する。もうもうと立ちこめる白煙の奥から、装甲を黒く煤けさせた双子剣士が姿を現す。メタルカラーだけあって耐熱性能も高いらしく、メイデンの必殺技を丸々喰らったにもかかわらず、体力ゲージは四割を残している。

四つのアイレンズが、低い振動音を響かせながら青白く輝いた。無言で太刀を構えるコバルトとマンガンに対峙しながら、誰は弓を、ハルユキは両手を持ち上げた。

——頭も技もまだまだだけど……根性なら負けない!!
食い縛った歯の間でそう叫び、真っ黒に焼け焦げた地面を蹴る。

十五分後。

ハルユキが最後の力を込めて放った右ストレート・パンチを、マンガン・ブレードの上段斬りが一瞬早く捉えた。

右腕が肩口から斬り飛ばされると同時に、真っ赤に染まった体力ゲージが残り一割を下回る。バランスを崩し、草原に倒れ込んだハルユキの首筋目掛け、太刀の切っ先が猛然と突き下ろされてくる。

——ここまでか。

覚悟を決め、ハルユキは止めの一撃を持ったが、太刀が鋭い音とともに扶ったのはフェイスマスクからほんの二センチばかり離れた地面だった。

眼前の青白い金属を呆然と眺めていると、頭上から声が降ってくる。

「なかなかいい戦いだっぞ、シルバー・クロウ」

「……………へ？」

ハルユキが恐る恐る顔を持ち上げると、マンガンは地面から刀を引き抜きながらフント鼻を鳴らした。

「別に情けをかけたわけではない。単なる対戦なら、容赦なく首を刎ねていたところだが……お前、何か目的があつてこのエリアに来たんだろう？ 我らレオニーズに関係することか？」

「あ……そ、そうなんです」

慌てて跳ね起き、草の上に正座しながらちらりと右側に視線を送る。コバルトとメイデンの戦闘は、わずかながらメイデン優位に推移していたようだが、こちらも戦いは止まっている。再びマンガンを見上げ、ハルユキは小声で言った。

「えと……マーガさん、すみませんが、この後少し時間を頂けませんか？ 実は、大事な話が……」

「……研究会絡みか？」

「は、ハイ……」

すると、ポニーテールの女武者は、太刀を鞘に収めながらツインテールの姉妹を一瞥した。それだけで意思疎通が行われたらしく、軽く頷いてから続ける。

「やむを得んな。クロウ、貴様、いまどのあたりにいる？」

その問いが、現実世界のハルユキの位置を訊ねるものであると気付くのに少し時間がかかった。

「はえ!? えと……し、新青梅街道ですが……」

「ふむ。では……」

上体を屈め、座るハルユキに思い切りフェイスマスクを近づけると、極小ボリウムで囁く。

「戻ったら、中野五差路近くのファミレスに來い」

「ひえ!? そ、それって、つまり、リアルで……」

「声が大さい」

小声で叱ると体を戻し、マンガンは周囲を見回した。対戦の終了を察したギヤラリーたちは盛大に拍手したり歓声を上げたりしているが、女武者は彼らに鋭い視線を送りながら続ける。

「対戦ステージには、どこの間者が紛れていないとも限らん。ギヤラリーを強制退場させる手もあるが、それはそれで悪目立ちしてしまうしな」

「は、はあ……まあ、確かに……。——でも、リアルで会うなら何か目印とか決めておかないと……」

「ふん。バーストリンカー同士、一目見ればそうと知れよう」

そお……かなあ……。

と心の底から疑問に思ったものの、ハルユキとしては領うしかなかった。

タッグ対戦は合意のドロで終了となり、バーストアウトして現実世界のバスに戻った途端、ハルユキはずるずるとシートに沈み込んでしまった。

ニューロリンカーのボタンを長押ししてグローバル接続を切っていると、胸の臓が涼しい顔で微笑みながら戦いの感度をタイプする。

「UIV さすがはレオニーズの（二剣）、とっても強かったです」

「ほんとに……。あの（レンジレス・シージオン）って必殺技、射撃長すぎだよ……」

「UIV 恐らく、トリリードさんの剣と同系統の性能なのでしょう。必殺技発動前に、鞘に収めた状態で溜めれば溜めるほど射程が伸びるのだと推測します」

「あ……な、なるほど……」

頷きながら、ハルユキは帝城で出遭った不思議な若侍のことを思い出していた。

トリリード・テトラオキサイド、またはアズール・エアを名乗る彼は、七の神器の五番星である直刀（ジ・インフィニティ）を所持しており、その剣は（鞘に入れておけばおくほど抜いた直後の一撃の威力が高まる）という特性を有しているのだ。

ということば、もしまかり間違ってコバマガのどちらかがジ・インフィニティを入手したり

すれば、必殺技（レンジレス・シージオン）は輪で溜めれば溜めるほど射撃と威力が無制限、というぶっ壊れ性能になってしまう。恐ろしや恐ろしや……と身震いしていると、軽やかなチャイムの音が響いた。音がA R表示された（次で降ります）ボタンに触れたのだ。

「U I V これからが今日のミッションの本番なのです、有田さん」

「そ、そうだった。……ちやんと見つけられるかなあ……」

「U I V さっとお待ちさんっぽい人たちなのです。さあ、降りましょう！」

そうタイプすると、談はバスが停車するのを待たずに立ち上がり、降車口へと向かった。

四壁宮さんはちっちゃいのにもいつも元気だなあ、と感心しながら、ハルユキは茶車のランドセルを追いかけた。

新青梅街道と中野通りの交差点にあるバス停で降車し、中野通りを北上する。

七分ほど歩くと、右側にオレンジ色の看板が見えてきた。コバマが待ち合わせ場所に指定したファミリールレストランだ。単純に食事目的なら、事前に店のサイトにアクセスして空席を確認したり予約したりできるのだが、顔もメールアドレスも知らない相手と待ち合わせなので、まずは店に入ってみるしかない。

シルバー・クロウとは似ても似つかぬ生身の有田春雪を、リアルでは初対面のコバマが姉妹に晒すことに気後れを感じないと言えば嘘になる。しかし、いまはそんなことを気にしている

場合ではないと自分に言い聞かせ、レストランの外階段を上る。

ガラス扉を押し開けると、冷房の効いた空気と「いらっしやいませ」の声が二人を出迎えた。ウェイトレスに「待ち合わせです」と告げ、背伸びしながら店内を見渡す。

午後四時三十分という中途半端な時間なので、客数は少ない。しかし見えるのは買い物帰りの主婦や休憩中らしきサラリーマンばかりで、それっぽい二人組は見当たらない——と思つてみると、奥まったテーブルを隠している曇りガラスの仕切りの向こうから、一本の手が現れてくいくいとハルユキたちを招いた。

「……………」

顔と顔を見合わせてから、恐る恐る通路を進む。

仕切りの手前で立ち止まり、意を決してもう一歩前に出ると、体を九十度右に転回させる。

テーブルを挟む二人掛けソファの片方に、二人の先客が並んで座っていた。セータータイプの制服は少し明るめの藍色。細いリボンとカラー、袖口の折り返しは白。いかにも夏服らしい清涼感のある色合いだ。襟元に覗くニューロリンカーは、二人とも深みのあるサファイア・ブルー。

ハルユキが真っ先に相手の出で立ちをチェックしてしまった理由は、別に制服フェチだからではなく、顔が見えないからだだった。角度的に、ではない。座る二人の、恐らく女子中学生は、どちらも茶色の紙袋を頭につっぱりかぶっているのだ。

「……………」

ハルユキが絶句していると、隣に立つ話の人差し指がびくびく動き、チャット窓に、

【UIV ……………】

と三点リーダーが幾つも並んだ。

やがて、紙袋の片方が無言でテーブルの反対側を指さした。我に返り、とりあえずソファに腰を下ろす。隣に誰が座ると、ウニイトレスがハルユキたちのぶんのお冷やお手ふきを置き、「ご注文がお決まりになりましたらボタンでお呼び下さあい。またはホロメニューから直接のご注文も可能ですう。ごゆっくりどうぞおー」と言い残して立ち去る。最後まで笑顔を崩さなかったのは、なかなかの精神力だ。

しかしハルユキはとても笑顔を作ることなどできず、丸くしたままの両眼で向かいの紙袋をまじまじと凝視した。よくよく見ると小さな穴が二つ並んで開いていて、向こうからはこちらが見えていゝらしい。

——この紙袋が、じゃなくてこの人たちが、マーガさんとコバルさん……なんだよな？

——でも、いったいどういう意味が？ リアル割れを警戒するなら、制服とかも隠さないとあんま意味ないし……そもそもリアル対話を提案してきたのあっちだし……。

などと考えながらなおも視線を送り続けていると、ハルユキの正面の紙袋が、隣に座る紙袋に頭を寄せて囁いた。

「ねえ、やっぱこれ変すぎるよー」

「顔見られるのを心配したのはユキでしょう！」

「わあ、名前呼ばないでよー」

「し、しまった……あーもお、グダグダじゃないですか」

「あたしのせいじゃないよお。てか、これもう取ろうよー」

「仕方ないですね……まあ、あっちもナマ顔晒してることですし……」

という会話で二人は合意に達したらしく、同時に右手で紙袋のてっぺんを掴み、すばーんと抜き取る。

中から出てきたのは、幸い本物の人間の顔だった。

二人とも実によく似ている——というより見分けがつかないレベルでそっくりだ。くつきりした眉毛やすつきりした鼻筋が涼しげな、和のDNAを感じさせる顔立ち。顔もそちらの系統だが、目の前の二人は可愛らしいというより、美形という表現がしっくりくる。

どちらもアクセサリー等は身につけていないので、二人の外見的違いは、ハルユキの正面に座るほうが艶やかな黒髪をポニーテールに結び、顔の正面に座るほうがツインテールに結っていることだけだ。

その髪型を見て、ようやくこの二人が待ち合わせた当人だと確信したハルユキは、べこりと頭を下げながら名乗った。

「あの、はじめまして……僕がシル、じゃなくて（嬢）です。で、こちらが（軍女）です」
ハルユキに即席の仮名で紹介された嬢が、腫の上に両手を重ねてから深く一礼する。

（お嬢の家の子）の凍とした佇まいに反応してか、セーラー服の二人もびんと背筋を伸ばしてから同時に会釈した。

顔を上げると、まず向かって右のツインテールが口を開く。

「高野内琴です。中三」

続いて、正面のポニーテール。

「高野内雪だよ。同じく」

再び二秒ばかり硬直してから、ハルユキは慌てて訊ねた。

「え、あの、そのお名前、本物の……」

すると聲と名乗ったツインテールが、眉を逆立てる。

「顔を晒したらもう一緒です！ そっちも名乗りなさい」

「は、はひっ。あの……有田春雪です。中二です」

そこで二人に軽く事情を説明し、チャットアプリのアドホック接続を受け入れて貰う。すか

さず嬢がキーボードを叩く。

【UIV 四禁宮議と申します。小学四年生です】

四人がリアルネームで自己紹介したところで、誰からともなく再び会釈。

微妙な沈黙を破ったのは、琴が卓上のA&Bボタンを叩く音だった。展開したホロメニューを素早くスクロールし、デザートページのページを開く。

「あつ、琴ちゃんおやつ食べる気？」

「しんどい封戦でお腹が空きました」

「ずるいー、あたしも食べよつと」

二人のやり取りを聞いてみると、この二人がレオニーズの《二剣》ことコバルト・ブレードとマンガン・ブレードなのだという確信が揺らぎそうになるが、外見や名前からして双子なのは確定的だし、髪型も加速世界と同じだ。恐らくはツインテールの琴がコバルトで、ボニータールの雪がマンガン。そのつもりで見れば、二人ともどこか剣士を思わせるきりつとした雰囲気を感じさせている。

——とりあえず、僕も何か注文しないと。

軽く頭を振り、ハルユキもメニューを呼び出すとデザートページに飛んだ。誰にも見える位置まで動かし、小声で訊ねる。

「四壁宮さんは何にする？」

「UIV クリームあんみつにするのです」

「じゃあ、僕はダブルアイスにしよう」

ぼちぼちつとメニューをタッチして、ネガ・ネビュラス組のオーダーは五秒で完了したが、

レオニーズ組はまだ悩んでいるようだ。二人とも真剣な顔でメニューを凝視し続け、突然口を開く。

「母のプリムレバフエ」

そのハモリ具合は、対戦中とまったく一緒だ。さすがのコンビネーションと感心していると、双子はなぜか真顔で睨み合う。

「私のほうが先でした」

「あたしのが早かったもん。琴ちゃんが変えてよ」

「この前は私を変えたでしょう、今日は雪の番です」

「嫌ー。今日の対戦、あたしのが頑張ったもん」

「1レベル下のクロウ相手に大苦戦したくせに」

「そっちこそ、遠隔型のメイデン相手にやられ放題だったくせにー」

言い合いにアバターネームまで飛び出したので、ハルユキは慌てて割り込んだ。

「あ、あの、そのへんで。ていうか……なんで注文を変えなきゃいけないんです？ 二人とも

毒パフェ食べればいいじゃないですか」

すると琴ことコバルトが、じろりとハルユキを睨んだ。

「こういう時は、違うのを頼んで半分こするのが私と雪のルールなんです」

「ははあ……でも、どうせ半分こするなら、どっちが何を頼んでも同じでは？」

と訊ねると、今度は雪ことマンガンに反駁される。

「ぜんぜん違うー。毒バフェの場合は、最初に半分食べるほうが上に載ってる毒を食べられるんだよ。真ん中から下なんて、アイスとシャーベットとビスケットしかないよ」

「これがヨーグルトバフェなら、下はヨーグルトとシリアルだけです。そんなもん、おやつじゃなくてご飯です」

「な、なるほど、深く納得しました」

両手を持ち上げ、ハルユキがこくこく頷いていると――。

突然、隣（となり）の誰（たれ）がこく控えめではあるが、くすくすと笑い声を漏らした。失語症の彼女が声に出して笑うのはとても珍しいので、思わず息を呑んでしまう。

しばらく笑い続けてから、誰はテーブル上に指を置かせた。

「U・V すみません、お二人が、向こう側の様子と少々違うもので」

それを讀んだ琴と雪は、少々バツの悪そうな顔になった。

「そんなものでしょう、バーストリンカーなんて」

琴の眩（くら）きに、雪が微笑む。

「今日（けふ）くらいは、二人で同じもの頼んでもいいよね」

「余所（よそこ）の人と初めてリアルで会った記念ですしね」

双子は同時に母のプリュレバフェの写真にタッチし、メニューを消した。



グラスの冷水を口に含みながら、ハルユキは考えた。

琴と雪が所属するレオニーズも、三日前に戦ったグレート・ウォールも、本来的にはネガ・ネビュラスと敵対するレギオンだ。加速研究会という強大すぎる共通の敵が存在しなければ、こんなふうになりアルで会って話をするなど絶対に有り得なかっただろう。

トライアル #1 こと（アタセル・アサルト2038）は過剰な競争によって、そしてトライアル #3 こと（コスモス・コラプト2040）は過剰な融和によって滅んだ——と言ったのは白の王ホワイト・コスモスだ。最大の敵の言葉ではあるが、ゲーマーとして何となく納得もできる。

ハルユキたちのトライアル #2 こと（ブレイン・バースト2039）が、緑の王の活動があるとはいえ八年間も続いているのは、闘争と融和のバランスがまがりなりにも取れているからなのだろう。この突発的な会合は、もしかしたらその危ういバランスがもたらした一回だけの奇跡なのかもしれない。高野内琴と高野内雪の二人に現実世界で会う機会が、もう二度と訪れないのかもしれない。

しかしそれでも、こうして顔を合わせ、名前を名乗り、一緒におやつを食べたんだから、僕たちはもう（友達）なんだ。僕は、そう信じたい。

運ばれてきた大きな薄パフェにわあっと顔を輝かせる琴と雪を見ながら、ハルユキはそんな思考を囁み締めていた。

7

「……じゃあ、コバルさんとマーがさんは、土曜日のオブザーバー役を引き受けてくれたわけね？」

ボイスコール回報越しのチユリの声に、ハルユキは頷きながら答えた。

「ああ、なんとか。メタトロンの攻略戦のこととか訊かれまくって大変だったけど……。土曜日は港区第三の自然教育園で待機して、領土戦が終わったらすぐにマツチングリストをチェックしてくれるって」

「そう、よかった。任務達成おつかれさま、ハル。……あとはその時に、研究会のメンバーが誰か一人だけでもグローバル接続しててることを祈るだけね……」

「そうだな……」

再び頷き、ペランダの手すりに両腕を乗せると、高円寺方面の夜景を眺める。

夜になってもさほど気温は下がらないが、自宅は高層階にあるので吹き抜ける風が気持ちいい。眼下の環七通りを、白いヘッドライトと赤いテールライトがゆっくりと流れていく。その煌めきに見入りながら、頭の中で、既知の加速研究会メンバーを列挙する。

まずは会長こと白の王、ホワイト・コスモス。彼女の名は港区エリアのリストにあって当然

なので、もちろん証拠にはならない。

次に副会長であり、これまでに何度もハルユキたちを窮地に陥れた仇敵ブラッタ・バイス。だが、加速世界でいままでカラーネームの重複は確認されておらず、ブラッタ・バイスの名前は単なる自称だという可能性は残っている。その場合は、リストには出てこない。

更に、二人と並ぶ古株である、《四眼の分析者》アルゴン・アレイ。しかし彼女が研究会のメンバーだと知っているのはハルユキたちだけであり、しかも物証は何一つない。これまた証拠能力は薄い。

つまるところ、三人の幹部の中で可能性があるのはブラッタ・バイスだけで、あとは下位のメンバーに期待するしかないわけだ。

ただこちらも、ダスタ・テイカーはすでに全相退場、ウルフラム・サーベラスはアルゴン同様に証拠なしで、残るはヘルメス・コード縦走レースに乱入したラスト・ジグソー、黒雪姫が沖縄で遭遇したサルファ・ポットの二人だけ。ポットに関しては、以前紫のレギオンに所属していた古参バーストリンカーが証言してくれるそうだ。

「……結局、バイスとジグソー、ポットの三人しか、証拠にはならないんだよね……」
ため息混じりに呟くと、チユリも重苦しい吐息で答える。

「うん……。せめて、アルゴンが研究会メンバーだっていう裏付けが取ればねえ……」

「一回だけ、杉並エリアのバトルロイヤルに乱入してきたアルゴンを、アッシュくんが見てる

んだ。その時レーザーでパイタを爆発させられたから、アルゴンがただの分析屋じゃないってことはアッシュさんにも解ってるだろうけど……でも、それだけで、研究会の一味だっていう証拠にはならないよな……」

「しかも、アッシュさんは緑のメンバーだしねー」

「うん……」

もういちど、二人同時にため息。

そもそも、アルゴン・アレイが研究会の一員だという証拠を示す手段があるのなら、とつくに黒雪姫や楓子が思いついているはずだ。ハルユキとチユリが今更あれこれ考えて時があく話でもない。

回線の先で、チユリが気分を切り替えるように「んー」と叫ぶと、少し明るい声を出した。

「それはそうと、レベル6のボーナス、何取るか決めたの？」

「あー……いや、まだ……考えれば考えるほど解んなくなってる……」

「あはは、そんなことだと思った。でも、土曜の領土戦は、こないだのグレート・ウォール戦以上に厳しくなりそうだから、武器は少しでも多いほうがいいよ」

「……そうだよな」

チユリの親身なアドバイスに、ハルユキは深く頷いた。

何度も対戦を重ね、いまの自分に必要なものをじっくり見極めてレベルアップ・ボーナスを

運ぶのも大切なことだが、そのあいだは（得られるはずの力を得ていない）状態だとも言える。そのしわ寄せは、レギオンの仲間たちに行くのだ。オシラトリ・ユニヴァースとの戦いでは、そんな甘えは許されない。」

「領土戦までには、絶対決めるよ」

きっぱりと宣言すると、同じくらい真剣な声が返った。

「あたしも、レベル6はまだちょっと遠いけど、土曜は頑張るからね」

「おう、期待してる。……レベル6まで、あとどれくらい？」

「ちょっと前に5に上げたばかりだもん、まだまだだよ」

「そっか……じゃあ、いまからタタも誘ってエネミー狩りに行こうぜ。グッさん、じゃなくて緑の王がポイント食べさせたやつに当たるかも」

意気込んでそう提案したハルユキだったが、

「だあーめ！ ハルは今日、中二エリアで頑張ったんでしょ！ 今夜は早く寝なさい！」
と即座に却下され、ちよつと口を尖らせる。しかし、これだけで終わるチユリのお説教ではない。

「それとハル、土曜日までに、もうひとつ決めなきゃいけないことがあるんでしょ」

「へ？ な、なんだっけ……」

「ちよつと、忘れたんじゃないでしょうね！」

幼馴染の言が落ちる寸前で、加速世界とは無関係な重大案件を思い出し、ぶんぶんかぶりを振る。

「あつ、いやつ、忘れてない、忘れてないよー 生徒会選挙の件だろ」

「そ。で、どーすんの？」

聞かれたハルユキは、体を反転させ、ペランダの手すりに背中を預けた。

二年C組のクラス委員長である生沢真優から、二学期にある次期生徒会役員選挙に立候補しないかと誘われたのは先週のことだ。委員長には今週中に返事をする伝えてあるので、チュリの言うとおり、土曜までには決断しなくてはならない。

「……タタは何か言ってた？」

一緒に勧誘されたタタムの心積もりをチュリなら知っているかと思っただが、答えは今度も同じだった。

「だあーめ！ タツくんのことは、タツくんに関きなさい！」

「は、ハイ……」

「……あ、ママが早くお風呂入れて言ってるから、今日はこのへんで切るね。おやすみハル、また明日ね」

「ん、また明日な。おやすみチュ」

ボイスコールを切斷し、ふうっと息を吐きながら、ペランダの庇越に夏の夜空を見上げる。

都心のイルミネーションに照らされた空は灰色だが、それでも幾つかの星が静かに瞬いている。しばらくその輝きに見入ってから、大きくひとつ伸びをして室内に戻る。

時刻は九時三十分。母親はまだ帰ってこない。そろそろ、夏休みに友達と山形の祖父母の家に旅行する件を話しておかねばならないのだが、すれ違いの生活は相変わらずだ。少し前に、帰宅するまで起きていて期末テストの結果を見た時も、「次も頑張らなさい」のひと言だけだった。

——まあ、（次は）じゃなくて（次も）だったしな。

助詞ひとつに壁めを見出しつつ、ころりとベッドに横になる。

もし、生徒会役員選挙に出ることを決め、それを知らせたら母親は何と言うだろうか。応援してくれるのか、やめろと言うか——あるいは好きにしないかい、か。

山形の祖父母に聞いたところでは、母も学生時代は生徒会活動をしていたらしい。いったいどんな理由で立候補したのか、知りたい気持ちもあるがたぶん訊いても面倒くさそうにされるだけだろう。それに、仮にハルユキが役員を目指すとしても、その理由が「母親に情って欲しいから」でいいはずがない。

生沢真優は、生徒会役員に立候補する理由は、現副会長の黒雪姫に憧れているから、黒雪姫に少しでも近づきたいからだと言った。その気持ちはとてもよく理解できるが、しかしそれは生沢の動機であってハルユキのものではない。立候補するつもりなら、するだけの理由や目標

を自分の中に見つけなければならない。

……僕の目標って、なんだろう。

薄暗い天井を見上げたまま、漠然とそんなことを考える。

バーストランカーとしての目標ならば即答できる。黒雪姫とともに、ブレイン・バーストのエンディングに辿り着くことだ。そこに至る道が、黒雪姫がレベル10に到達することなのか、あるいは帝城で最後の神器（サ・フラクチュエーティング・ライト）の封印を解くことなのかは解らない。しかし、黒雪姫と一緒に戦い続けられれば、いつかはゲームの終わりが訪れ、全ての謎が解き明かされるとハルユキは信じている。

いっぽう、現実世界の有田春雪は、何を目標に日々を生活しているのだろうか。

不良生徒たちにいじめられていた頃は、毎日学校に通うことが自体が耐えがたい苦しみだった。しかし黒雪姫に救われ、いまでは友達と思える存在さえ何人かできた。もう、朝起きるのも、登校路を歩くのも苦痛ではない。

だが、なればこそ、いまの自分が何かを頑張っているのかと自問した時、即座にイエスとは答えられないのだ。タカムやチユリのように、部活動に燃えているわけでもない。勉強を頑張っているとは到底言えない。飼育委員会も、真面目に活動しているつもりではあるが、実際には議の補佐しかできない。

加速世界に關係するあれこれを切り離せば、いまのハルユキは、漠然と日々を過ごしている

だけなのかもしれない。将来のビジョンもなく、卒業後はおろか半年後、一ヶ月後の目標さえなく、過ぎ去る時間をただ眺めている。

——先輩と同じ高校に行きたいっていう、あれは嘘だったのか？

不意に、そんな声が頭の後ろ側で響いて、ハルユキは体を壁に向けると膝を抱え込んだ。

——嘘じゃないさ。でも……どんなに努力したって、叶わないことはあるんだ。

——結果の伴わない努力は無意味だ。そういうことか？

——そうだ。だって、そんなものを誰が評価してくれるんだ。どんなに勉強を頑張っても、受験に失敗すれば誰も褒めてくれない。選挙に立候補しても、落選すれば悔めきが残るだけだ。そこにどんな意味があるって言うんだ。

枯つく沼に沈んでいくような自問自答を続けるハルユキの脳裏に――。

突然、清涼な風が吹き抜けた。数日前に黒雪姫が発した言葉が、深いエコーを伴って再生される。

「結果なき努力に意味があるのか……キミはいま、そう考えているんだろう」

はっと眼を見開き、横に丸めていた体を伸ばしていく。ベッドの上で両手両足を広げ、深く息を吸って、吐く。

黒雪姫にそう問い質されたハルユキは、口には出せなかったが、確かに否と感じたはずだ。何かを頑張れば、必ず何かが自分の中に残ると、そう感じたはずだ。

人に褒めてもらいたいから。笑われて惨めな思いをしたくないから。そんな矮小な動機よりも、もっと大切なことがある。それは、加速世界も、現実世界も変わらない。

自分のために、誰かのために、頑張る。ただ頑張りたいから、頑張る。それができたという記憶が少しずつ積み重なって、きつといつか大きな力になる。

「——よし！」

ハルユキは、天井に向けて突き出した両手を、ぎゅっと強く握り締めた。

左手だけを降ろし、右手の人差し指で仮想デスクトップを操作する。連絡帳アプリの1番に登録してある相手に短いメールを送ると、すぐに返事が来た。ホームサーバーの設定を手早く切り替え、コマンドを叩く。

「ダイレクト・リンク」

桃色ブタアバターとなったハルユキが降り立ったのは、ヨーロッパ風のお城の尖塔から突き出したテラスだった。彼方には白く冠雪した山脈が連なり、手すりの真下は底が見えないほど高く切り立った断崖。

テラスには小さなテーブルと椅子が二脚、それにティーセットが用意されている。少し前に外国のネットからダウンロードした、フルダイブ空間用の環境データだ。

数秒後、テラスの端に、鈴のような音を響かせてはっそりした人影が出現した。黒いロング

ドレスに、黒髪羽織の鎧を背負った、妖精のように美しいアバター。

「お待ちせ、ハルユキ君。相変わらず高い場所が好きだな」

景色を眺めるやそんな感想を述べる黒雪姫に、ハルユキはひづめのついた手で頭を掻きながら挨拶した。

「こんばんは、先輩。急にお呼び立てしてすみませんでした」

「いや、ちょうど休憩しようとしていたところだ」

「お勉強中でしたか？」

「まあ、勉強と言えば勉強だな……。オシラトリのメンバーの情報を、解る範囲でファイルにまとめていたんだ。終わったら配布するから、頭に入れておいてくれ」

「あ、それはとっても助かります、ありがとうございます。どうぞ、座ってください」

白い木製の椅子を動かめると、黒雪姫は頷いてふわりと腰掛けた。ハルユキも向かいの椅子に座り、ティーポットから紅茶を注ごうとしたが、白い手にそっと制止される。

「……………」

「そのお茶の味は、環境データのデフォルトかな？」

「は、はい、そうですが」

「なら、最近私が調合したフレーバーを試してみていいか？ ちょっと自信作なんだ」

「もちろんです、お願いしますー」

白磁のティーポットを差し出すと、黒雪姫は指先で蓋をばんとタップし、コントロール窓を引き出して新しいフレイバーをロードした。続いて、高々と持ち上げたポットを傾け、湯口から細く流れるお茶を一滴もこぼさずに二つのカップに注ぎ分ける。

「さあ、どうぞ」

黒雪姫が前に置いてくれたカップを持ち上げ、いただきますを言ってから一口飲む。すると、まるでフルーツ入りのブランデーケーキのように濃厚で華やかな風味が口いっぱいに広がり、しかしそれは飲み下すと儼く消えて、後味には爽やかなミントの香りだけがかすかに残る。

「うわ……おいしいです。なんだかお菓子みたいだ」

ハルユキがそう感想を述べると、黒雪姫はにこりと微笑んだ。

「プチ・パケの三人が作ってきてくれたケーキがとても美味しかったのでね、ちょっと触発されたんだ。まあ、私には仮想のお茶のパラメータをいじるくらいしかできないが」

「それも立派なスキルですよ。シヨコたちも、このお茶を飲んだらすごく喜ぶと思います」

「では、機会があったら彼女たちにも味見してもらおう」

そんな言葉を交わしながらハルユキは大事にお茶を味わったが、すぐに飲み干してしまった。すると、カップの底から、小さな黒い蝶々がふわりと飛び立ち、目の前を横切っていく。

「あ……ああっ！」

しばし唖然としてしまったハルユキは慌てて捕まえようとしたが、ブタアバターの短い腕は

空を切り、蝶々はテラスの外へと飛び去ってしまった。

「あああ……まさか、お茶にもバタフライ・ポイントが仕込んであるなんて……」

「ふふ、油断禁物だ。おかわりは？」

「頂きます！」

「蝶が出る出ないはランダムだがな」

澄まし顔でそう言うとき、黒雪姫は再び見事なポットさばきでお茶を注ぐ。

ルビー色の液体が揺れるカップを両手で包み込み、黒い蝶々が飛び去っていった青空をもういちど見上げてから、ハルユキは口を開いた。

「あの、先輩」

「ン、なんだ？」

「えっと……僕、出てみようと思います……生徒会役員選挙……」

その言葉を聞いた途端、黒雪姫は大きく顔を綻ばせた。一度、二度と頷き、黒い瞳でじっとハルユキを見詰める。

「……そうか。キミの決断を嬉しく思うよ。私にできることがあったら言ってくれ、もちろん不正はできないが、まっとうな協力なら惜しまない」

「はい、頼りにしてますー……で、その、早速、相談がありまして……」

「どうぞ」

手振りで促され、ハルユキはブタの鼻をもごもごさせながら、ぎこちなく切り出した。

「ええと……その、ですね。立候補を表明しておいて、何を今更って感じなんですが……僕、梅郷中をこんなふうに変えたいとか、どこそこを良くしたいとか、そういうビジョンみたいなものぜんぜんないんです。たとえば先輩は、文化祭の時、校内のソーシヤルカメラを増やして監視の死角をなくしたって言っていましたよね。それって、ものすごく大変なこと……ですよね？」

「ん……まあ、それなりにな」

仄かに苦笑すると、黒宮姫はお茶で唇を濡らせてから続けた。

「学校の管理部と運営企業と区と都の教育委員会にレポートやら何やら出しまくったが、でも決して苦ではなかったよ。どうしても実現したいことだったからな」

「……その、どうしても実現したいことが、僕にはまだ見つからないんです。立候補するのに、こんな中途半端なことでもいいんでしょうか……」

「いいさ」

あつきりと即答すると、黒宮姫は椅子から立ち上がった。石張りの床にハイヒールをこつこつ鳴らしながらテラスの縁まで歩くと、彼方の山脈を見詰める。柔らかな陽光が黒板羽の翅に当たり、ローズレッドの模様をさらさらと輝かせる。

「なあ、ハルユキ君。我々はまだ、ようやく自分の足で歩き、自分の眼でものを見て、自分の頭で考え始めたばかりの子供のようなものなんだ。自分が何をしたいのか、何ができるのか、

何を目指して歩いていくのか……道はあらゆる方向に広がっている。同じ場所にうづくまり、眼と耳を塞いでいてはどこにも行けないが、歩き始めればそこに必ず道は開ける。大丈夫……キミにもきっと見つかるよ。生徒会の一員として実現したい目標が」

「……………」

ハルユキも、椅子からびよんと飛び降りると黒雪姫の隣まで移動した。しかしアバターの背が低すぎて、手すりの上まで顔が出ない。しまった、ここくらいは調整しておくんだった、と思っている――。

黒雪姫が身を屈め、ハルユキのブタアバターを両手で持ち上げた。

「あ、わっ……」

慌てるが、そのまますっぱりと胸に抱きかかえられてしまう。つろりと丸い頭に頬をすり寄せるようにしながら、黒雪姫はかすかな声で囁く。

「……私は、あと八ヶ月で、梅郷中を卒業する」

「……………」

その言葉を聞いた途端、精神の動揺を映してブタアバターが硬く強張った。そんなハルユキの背中を、黒雪姫の右手が優しく撫でる。

「実家には、杉並区内の高校へ進学したいと伝えてあるが……こればかりは、私の一存で決められるものでもない。中学卒業を機に、更に遠い場所に移されるということも有り得る」

「……………それは、東京の外……………という、ことですか」

震える声でどうにかそんな質問を口にしたが、答えはハルユキに更なる衝撃を与えた。

「あるいは日本の外、かな」

「……………そ、そんなことになったら、もう……………」

「うむ。ソーシャルカメラ・ネットワークに接続していないと加速できないから……………ペース
トリンカーでなくなるのと同じことだ」

そう告げる黒雪姫の声は、あくまでも冷静だった。恐らくは、昨日今日に出てきた話ではないの
だろう。ハルユキのアバターを擁しながら、黒雪姫は語り続ける。

「もちろん、まだ決まった話というわけではない。しかし、仮に留学させられるなら、申請の
締め切りが十月だから……………その頃には結論が出るだろう。私も希望を通せるように最大限の
努力をするが……………すまない、約束はできない」

ずっと落ち着いていた黒雪姫の声が、最後の一言だけ、かすかに震えた。

ハルユキは、豪奢なアバターに我知らず思い切りしがみつきのながら、千々に乱れる思考に縛
弄されていた。

——いやだ。そんなの嫌だ。僕はまだ、先輩と同じ高校に行くための努力さえ始めていない。
どうせ無理だからって言い訳して、まだまだ先のことだからって眼を逸らしてたんだ。でも、
ようやく、前に進めそうな気がしてたのに。それなのに……………。

「……先輩……もし……もしも……」

喉からそこまで押し出した掬れ声を、ハルユキは必死に吞み込んだ。

この先は言っではいけないことだ。もし、お姉さんに……白の王ホワイト・コスモスに恭順を誓って、目的の達成に協力すれば、留学しないで済むように両親を説得して買えるのでは、などということは。

強く両眼をつぶり、歯を食い縛っていると――。

柔らかな声が、耳のすぐそばで響いた。

「大丈夫、心配するな」

「……………え……………」

瞼を開けると、すぐ目の前に黒雪姫の微笑があった。

「何がどうなろうと、私とキミの絆は消えたりしないさ。仮に日本を離れることになっても、こうしてフルダイブすればいつでも会えるんだから……。我々はバーストリンカーであり、私はキミの《親》でキミは私の《子》だが、それだけが我々を繋ぐ絆ではない。物理的距離に隔てられても、あるいは二人ともバーストリンカーではなくなっても……」

そこで少し間を置いてから、黒雪姫はひと言ひと言を刻み込むように囁いた。

「約束するよ。私はキミの傍にいる。ずっと。未来永劫、な」

瞬間、ハルユキの全身を、強烈な電流にも似た感覚が貫いた。

その言葉を聞くのは初めてではない。三ヶ月間、ダスク・テイカーとの戦いが終わった時に、黒雪姫は一言一句同じことをハルユキに告げたのだ。

「……………せん、ばい」

掠れ声をわななかせながら、ハルユキはもういちど黒雪姫の胸元にアバターの顔を強く押し当てた。

もしも海外留学が不可避となり、来年の三月で黒雪姫のブレイン・バーストが事実上の終わりを迎えるのだとするならば。

それまでに、ハルユキにできることは何だろうか。

決まっている。黒雪姫を、加速世界の最果てへと送り届けるのだ。レベル10に達したバーストリンカーは、プログラム製作者と邂逅し、ブレイン・バーストが存在する本当の意味と、その目指す究極を知らされるだろう。——レベル9到達者にのみ告げられるシステム・メッセージの真実を確かめてもらうのだ。

しかし、レベル10に到達するには、黒雪姫はあと四人の王の首を獲らねばならない。それは血で血を洗う惨劇の道だ。仮に、三日後に幕を開けるオシラトリ・ユニヴァースとの決戦の果てに白の王を倒せたとしても、条件クリアにはまだまだ遠い。

それに——。

ハルユキの中には、少し前から、自分でも説明しがたい感情が生まれている。

ゲームであるのなら、クリアを目指すのは当然。かつて黒雪姫に告げたその言葉に嘘はない。しかし、ダレイト・ウォールの《六層装甲》やレオニーズの《二剣》との交流を経て、彼ら彼女らと、純粋な対戦ではなく血塗られた殺し合いをすることに躊躇いを感じてしまっているのだ。

緑の王や青の王の首を獲らねば、黒雪姫はレベル10にはなれない。しかしその窮道に踏み出せば、ほんの五時間前に高野内等、高野内雪との間に生まれたと思えたささやかな友誼は、跡形もなく砕け散る。そして、怒りと憎しみ、拳と刃がそれに取って代わるだろう。

それが、ブレイン・バーストというゲームの本来の姿なのだ。開発者が、そのように設計したのだ。

ゲームクリアを目指すなら、いつかは往かねばならない道なのだ。

——でも。

でも……。

黒雪姫のアバターから伝わる仄かな温度と柔らかさを感じながら、ハルユキは自分が二つに引き裂かれるような感覚を味わっていた。

その時だった。黒雪姫にメールを送る少し前の思考が、小さな火花となって燃った。

もしかしたら、道は、もうひとつあるのかもしれない。

システムメッセージで明言された《レベル10》と違って、なんの確証もない、単なる推測で

しかない。しかしそれは三年前に、第一期ネガ・ネビュラスのメンバーたちが、愛するレギオンマスターのために歩もうとした道でもある。

「……………先輩」

はんの少しではあるが力の増した声で、ハルユキはもういちど呼びかけた。

「僕……僕、がんばります。自分のために……………先輩のために、できることを全部やります。だから……………だから……………」

その先は言葉にならなかった。しかし黒雪姫は、アバターを握く両腕にいつそう力を込め、囁いた。

「うん。私がんばる。キミと一緒に、いつまでも歩き続けられるように、私の全力を尽くすよ」

「鶴さんと二人きりでお話しするのは、ずいぶん久しぶりね」

リビングに入るなりそう言うと、倉崎楓子はふわりと微笑んだ。

「しかも、お家にわたしだけ呼んでくれるなんて、どんなお話なのか楽しみだわ」

「え……ええと……ま、まずはそちらにお掛けください。飲み物もつてきますんで……」

どこちなくソファセットの上座を指し示してから、ハルユキは素早くキッチンに移動した。薄手のガラス茶碗二つに冷えた緑茶を注ぎ、お盆に載せて運ぶ。

二人掛けソファの恵側に腰掛けている楓子の前にお茶を置き、向かいの一人掛けソファに腰を下ろすと、すうはあと深呼吸する。

楓子と知り合ってからもう三ヶ月が経つが、相変わらず二人きりの時は少しばかり緊張してしまう。出遭った直後に旧東京タワーのてっぺんから突き落とされたという記憶のせいもあるだろうが、それ以上に、楓子という人間の存在感到うしても圧倒されてしまうのだ。

黒雪姫に優るとも劣らぬ美貌とか、破壊力を秘めたプロボーションとか、そういう外形的要因だけではない。加速世界に数多の伝説を残す、バーストリンカーとしての実力だけでもない。全てを引くるめたうえでの、器の大ききようなものが彼女にはある。

實際、現在のネガ・ネビュラスを、真ん中でしつかりと支えている柱は副長の楓子だろう。先日のグレート・ウォール戦終盤での大活躍を思い出すまでもなく、（鉄腕）レイカーが居てくれれば大丈夫、とレギオンの諜もが感じているに違いない。その頼もしさゆえに、二人きりになるとどうしても畏まってしまふハルユキではあるが、今日はそんな楓子にひとつ大それたお願いをしなくてはならないのだ。

「美味しいお茶ですね」

そんな言葉が聞こえ、はっと我に返ったハルユキは、恐縮しつつ答えた。

「ありがとうございます。母親がペットボトルのお茶嫌いなので、夏は冷茶を作り置きしてるんです」

「それは、鴉さんがやってるの？」

「ええ、まあ、一応……って言っても、お茶っ葉を袋に入れて、ガラス容器で水出しするだけです」

「でも、時間はかかるでしょう？ そのぶん甘みがあつて、とっても美味しいわ」

と言って楓子がくいつと冷茶を飲み干したので、ハルユキはお代わりを注いでこようと腰を上げたが、右手で制される。

「ありがとう、でも後でいいわ。まずは、お話を聞かせて下さいな」

「……はい」

顔き、ハルユキはソファに座り直した。

七月十八日、木曜日。明後日には一学期の終業式、そして白との決戦が迫りつつある今日、ハルユキは楓子に連絡を取り、放課後に家まで来て欲しい旨を伝えた。快諾してくれた楓子を環七のバス停で出迎え、自宅に案内したのだが、昨日から胸の奥で疼いているものをどう伝えればいいのか、まだうまく言葉が組み立てられない。

「えっと……その……」

背筋を伸ばし、膝のあたりをしつかりと握り締めると、最早正面突破の他に道なしと覚悟を決めて深く頭を下げる。

「師匠、お願いがあるんです！」

「何かしら？」

コソを聞いたら、さすがの師匠も驚くか怒るかするだろうなあ……と思いつつながら、ハルユキは顔を上げて叫んだ。

「もういちどだけ、僕に、ゲイルスラスタを貸してください！」

「いいですよ」

「……………へっ？」

驚くでも怒るでもなくにこにこしながら即答した楓子に、ハルユキのほうが驚いてしまう。

「あの……いい、いいんですか？」

「もちろんです。ただ、理由は聞かせて欲しいところですが」

「もちろんです！……ただ、怒られるかもしれませんが……」

冷茶をこくりと飲み、気持ち落ち着かせると、ハルユキは成層圏の空のように深く澄んだ楓子の瞳をまっすぐ見つめながら言った。

「……実は僕、もういちど、密城に行きたいんです」

すると今度は、楓子の両眼がぱちくりと丸くなった。

動機を詳しく説明するのに、十分はどうかかった。

黒雪姫が、梅郷中を卒業したら遠くに行ってしまうかもしれないこと。

できるなら、それまでにブレイン・バーストのエンディングへと進み着きたいこと。

そのために、クリア条件の一つと思われる神話（ザ・フラクチュエーティング・ライト）に
関して、詳しく調べてみたいこと――。

「……なるほど、そういうわけなのね……」

背中をソファに預けた楓子が、視線を窓の外へと向ける。

有田家のリビングは南向きなので、ほぼ真東にある帝城を直接見ることはできない。しかし楓子は、群青から金色へとグラデーションを描く夏空の下に、かの絶世不可侵の巨城を幻視しているかの如く眼を細めると静かな声で言った。

「ネガ・ネビユラスでは、帝城に侵入し、生還したバーストリンカーは鴉さんとメイデンだけ。一度できたのなら二度目もできる……鴉さんは、そう考えているのでしょうか。けれど、帝城と四神はそんなに甘い相手ではないわ。今度こそ無限E.Kに陥つてしまう可能性は、決して低くないはずよ」

「……………はい」

語調は柔らかいが重みのある言葉に、ハルユキは鎮くしかなかった。だが、最初から賛成して貰えるとは思っていない。今日一日かけて考えたことを、懸命に言葉にする。

「でも……前回、帝城に突入した時の経験からすると、四神と戦おうとしないで出現エリアを超高速で突っ切れば、門まで通り着くことは可能だと思っんです。僕の飛行スピードも、前回よりはかなり上がってるはずですし」

「なるほど。——けれど、確か、通り着いただけでは門は開かないのではなかった？ 扉は、内側から封印されてるのよね？」

「はい、そのとおりです」

楓子の記憶力に感心しながら、こくりと首肯する。

帝城の東西南北に存在する（四神の門）は、それぞれの守護獣を浮き彫りにしたプレートによって封印されている。守護獣を倒せば封印も壊れ、扉を開けられる仕組みだ。しかし前回、ハルユキと鴉が接近しただけで南のスザク門は開いた。その理由は、謎多き若武者トリリー

ド・テトラオキサイドが、内部からプレートを破壊していたからだ。

プレートは、門がいちど開閉するたびに再生する。リードが神器（シ・インフィニティ）と心意技（天・裏・雲）で破壊してくれた南門のプレートは、前回ハルユキが脱出した時点で復活してしまっただけだ。しかし。

「……密城から脱出する時、リードと僕は、必ずまた会うつて約束しました。だから、きっとリードは封印プレートをもういちど壊していると思うんです。四つの門、全部の」

「……………」

ハルユキの言葉を聞いた楓子は、考え込むように睫毛を伏せながら、薄いタイツに包まれた右腕を持ち上げて左腕に乗せた。生体親和性ナノポリマーの皮膚とバイオメタルファイバーの筋肉、そしてナタン合金の骨からなる脚は、それが人造物であるとはとても信じられないほど優美で複雑なラインを持っている。

楓子の細い指が、サーボモーターを内蔵した膝のあたりをそつと撫でる様子を無言で見詰めていると――。

「もし、門が開かなければ？」

不意にそう問われ、ハルユキはしばらく黙きしてから急いで答えた。

「は、はい。その場合は、門の手前で急上昇して百八十度ターンで離脱するつもりです」

「そう……………」

再び、楓子は沈黙する。脳内で高速回転する思考を喚びながら、右足のつま先が空中で小刻みにリズムを刻む。そのたびに、ささやかな駆動音がハルユキの鼓膜を撫でる。

たっぷり二分以上も考え続けてから、楓子はふわりと右脚を床に下ろした。両手で長いストリートヘアを整え、まっすぐハルユキを見て微笑む。

「最終的には、信じるか信じないか、というところに集約されるわけね」

「え……？」

「鴉さんは、トリリードさんを信じているんでしょう？ もういちど番城で出会う、それだけのために大変な困難を乗り越えて、全ての封印を破壊してくれると？」

「はい」

迷うことなく、即座に頷く。楓子もこくりと頷き返し、続ける。

「そして、トリリードさんも鴉さんを信じている。無敵EKの危険を冒しても、また会いにきてくれると。なら……わたしも、トリリードさんを信じる鴉さんを信じましょう」

「えっ……」

思わず身を乗り出しながら、ハルユキは訊ねた。

「じゃ、じゃあ、僕にゲイルスラスタを貸してくれるんですか？」

すると、楓子も体を前傾させ、伸ばした右手の人差し指でハルユキの額を「めっ」とばかりにつづいた。

「それは最初にイエスと答えたでしょう？ わたしが悩んでいたのは別件です」

「へ……う。そ、それは、どういう……？」

「決まっているでしょう」

ハルユキが「真空破レイカースマイル」と名付けた、熱愛に満ちた微笑みを浮かべた楓子は、ここからは変更の余地なしと言わんがばかりの口調で宣言した。

「わたしも行くわ。ゲイルスラストアーは、スカイ・レイカーごと貸してあげますね」

「え……ええ？」

「あのねえ楓さん、そんなふうに驚く権利は、誰にも相談せずになったひとりです帝城に行こうとしていた人にはないですよ」

「そ……それは、そうかもですが……」

ハルユキが両手の人差し指をこねこねしていると、楓子は口許の笑みを苦笑に変えつつ軽く肩をすくめた。

「まあ、あなたの気持ちは解らなくもないわ。サツちゃんには言えないことだし、ういういやあきら、チーコや薫さんに教えたなら、みんな一緒に行くって言い出すに決まっていますからね」
 「ハイ……間違いないです。でも、まかり間違えば、無限E.Kになっちゃう危険がありますからね……」

「それはあなたも例外ではないでしょう？」

笑みを消した楓子に、まっすぐな視線とともにそう問われたハルユキは、両手を膝に乗せて大きくかぶりを振った。

「……いえ、僕は必ず帝城に行つて、ちゃんと帰ってきます」

すると楓子は、再び微笑を浮かべ、深く頷いた。

水分を補給し、順番でトイレを済ませ、二人掛けソファに並んで座り、自動切断セーフティを設定するのに十分はどかつた。

「えと、回線切断は、とりあえず現実時間で七秒後にしておきます」

「そんなものでしょうね。内部時間だと一時間五十六分四十秒……もし無限E.Kになつても、死ぬのは最大二回で済むわね」

「いえ、ゼロ回にします！」

きつぱりと宣言し、ハルユキは自分と楓子のニューロリンカーから伸びるXSBケーブルをホームサーバーのネットワーク端子に接続した。グローバル接続アイコンが再点灯するのを確認し、ちらりと右隣の楓子を見る。

思いつきに巻き込んでしまったことを謝ろうと思つたのだが、それより早く、楓子の左手がハルユキの右手をきゅっと握った。

「楓さん、わたしは自分が行きたいから行くのよ。……さあ、カウントダウンをお願い」

「……………はい！」

頷き、左手でホロウインドウを操作する。十二秒後にグローバル接続を切断するよう設定したウインドウのOKボタンに指を近付け、すうっと息を吸い込む。

「ファイブカウントでダイブします」

ボタンを押すと同時に、カウント開始。

「5、4、3、2、1、」

「アンリミテッド・バーストー」

夜。

中天に静止する巨大な満月が、大地を青白い光で照らしている。

建物は全て白亜のゴシック建築に変貌し、白砂を敷き固めた道路に風々と影を落とす。

「……………危なかったわね……………」

夜空で控えめに光る星たちを見上げながら呟いたスカイ・レイカーに、ハルユキはこくこくと同意した。

「まったくです。一瞬、（宇宙）ステージだったらどうしようって思いましたよ……………」

空気の無い宇宙ではシルバー・タロウは飛べないので、自動切断するまで待つてから、もう10ポイント消費してダイブし直すしかない。しかし幸い、ここは（宇宙）ではなく（月光）ステージだ。見た目は綺麗だし、厄介な地形効果もない。特徴と言えば、音が遠くまで届くこととエネミーが少ないこと、影の中が非常に暗いので待ち伏せしやすいことくらいだ。

「……………でも、宇宙ステージのエネミーがどんな感じなのか、ちょっと見てみたかった気もするわね」

振り向いたレイカーがそんなことを言うので、ハルユキは慌てて顔をふるふるさせる。

「い、嫌ですよ、ぜったい気持ち悪い宇宙生物とかですよ」

「あら、かつこいい宇宙怪獣かもしれないわよ？ いっそ、モデルスーツとかかも」

「……………なるほど、それならまあ…………」

「と思っただけどやっぱりエイリアンばいほうが雰囲気あるわね。寄生したり、酸吐いたり」

「うええ、酸はカンペンです」

再びふるふるしながら、隣に立つレイカーの姿をちらりと見やる。

いつもの白い帽子と白ワンピース姿だが、車椅子は召喚していない。ハイヒール状の両足でマンション屋上の床面をしっかりと踏み締め、夜風に青銀色の髪をなびかせている。

「……………あのね、楓さん」

楓子が少しボリウムを落とした声で呟いたので、ハルユキは一步近づいた。静まり返ったアイボリー・ホワイトの街並みを見下ろしながら、楓子はゆっくりと語り始める。

「サツちゃんの事情は、わたしもそれとなく聞いていたの。……………もちろんわたしもサツちゃんと離れたくないわ。それどころか、わたしの高校を受験するように、何度も誘ったくらい。残念ながら、うんとは言わせられなかったけれど」

「え……………なんででしょう？」

「女子校だから、かな」

そう答えた楓子は、きょとんとするハルユキに「感激涙みかけてから、西色のアイレンズを

頭上の満月に向けた。

「遠く離ればなれになってしまいう可能性があると知った時……わたしはどうすれば現状を維持できるのか、それだけを考えて。ここだけの話ですが、白のレギオンと加速研究会にまつわる問題が長引けば、サツちゃんは東京に残ってくれるかもしれない……そんなことすら思ったりもしたのよ。でも……あなたは違ったのね、鳴さん。時間が限られているなら、そのあいだに行ける限り遠くまでサツちゃんを連れていこうと思ったのね。加速世界に流れる無限の時間が、終わるところまで……」

優しく豊かな胸懐の中に、一抹の切なさを潜ませた楓子の言葉を聞いて、ハルユキは何度もかぶりを振った。

「いえ……僕も、僕だって、黒雪姫先輩といつまでも一緒にいたいんです。遠いところになんか、行ってほしくないです。でも……先輩が初めて昔のことを話してくれた時、僕は言ったんです。ブレイン・バーストがゲームならば、クリアを目指すのは当然です、って。その言葉を嘘にはしたくない。だから……僕は……」

そこで言葉を詰まらせてしまうハルユキを。

楓子は両腕でふわりと抱き寄せ、囁いた。

「……大丈夫。求め、進み続ける限り、道は見つかるわ。あなたの頑張りには、決して無駄にはならない。わたしも、及ばずながら力を貸します。サツちゃんのため、レギオンのため……そ

して、鴉さん、あなたのために。さあ……行きましょう、帝城へ」

自宅マンションの壁や梁を破壊して必殺技ゲージを溜めたハルユキは、楓子を横抱きにする
と最上階から飛び立った。

滑空を織り交ぜた省エネ飛行で東を目指す。中野エリアを通り過ぎると、行く手に西新宿の
高層ビル群が現れる。月光を浴びて輝く尖塔の圓を抜け、山手線を越えて、広大な新宿御苑を
右に見ながら飛び続ける。

やがて、彼方に遠くもなく巨大な構造物が姿を現す。黒々とした底無しの峡谷に囲まれた、
純白の城。夢のように美しく、悪夢のように恐ろしい、加速世界の中心にして最果て。

真円を描く幅五百メートルの峡谷上空には、超重力の見えざる障壁が常時発生していて誰も
飛び越えることはできない。谷を渡って城に入る道は、東西南北の四箇所に架けられた大橋と
その奥にそびえる高さ三十メートルの大門のみ。

楓子は、四つの門に守られて眠る帝城をしばらく無言で眺めていたが、不意にハルユキを見
上げると言った。

「どこの門から突入するかは、もう決めているの？」

「あ……はい」

頷き、少し高度を上げながら続ける。

「最初は、北門にしようと思っただけです。四神のなかで、北門を守るデンプだけが飛行能力を持っていないと聞いたので」

「それは、確かにそのとおりね」

「でも、北門と東門、それに西門は、地形的にちょっと問題があるんです」

四つの門が全て視認できる高度でいったんホバリングすると、ハルユキは九一日かけて考えたことを楓子に説明した。

四神デンプが守る青城北門は現実世界の（乾門）に、セイリユウが守る東門は（坂下門）に、スザタが守る南門は（桜田門）に、そしてビヤッコが守る西門は（平蔵門）に、それぞれ対応している。

このうち乾門、坂下門、平蔵門は、門前から続く道路が大きく曲がっていたりすぐに建物に突き当たったりしていて見通しが利かない。

しかし桜田門だけは、橋のたもとから麻布台一丁目の交差点まで、約二・二キロにわたってほぼ一直線に桜田通りが伸びているのだ。前回の助走距離が約二百メートルだったのだから、実にその十一倍。

「……今回も、四神の湧出エリア……つまり門の前の大橋に突入するまでに、最大限の加速をするつもりです。でも、前回よりも僕の飛ぶ力が少しですけど上がってるので、助走距離も可能を限り長く取りたいんです」

「なるほど……つまり、南門が最適ということね」

「はい。御託はどう思いますか？」

ハルユキが訊ねると、楓子は少し考えてから答えた。

「……四神は、それぞれ特徴的な攻撃能力を備えています。ゲンブは重力攻撃、セイリユウはレベルドレイン、ビヤッコは高速機動、そしてスザクは飛行力と火炎攻撃。どれも恐ろしい力だけれど、壱さんの飛行アビリティと相性が悪いのは、やはりビヤッコとスザクだと思うわ。レポートじみたスピードで移動するビヤッコの爪をかくぐるのは至難だし、スザクの火炎プレスを正面から突破するのは不可能よ」

「……はい……」

びったり一ヶ月前、六月十八日のアーダー・メイデン救出作戦を思い出しながら、ハルユキは頷いた。

楓子のゲイルスラスタースターをブースターとして大橋に突入したハルユキが、四神スザクの火炎プレスに連撃されなかったのは、黒雪姫が心意技（奪命撃）でターゲットを引き受けてくれたからだ。しかし今回は、援護してくれる仲間はいない。楓子と二人だけで、何としても門まで送り着かねばならない。

「……前回、黒雪姫先輩が大橋に突入してから、スザクが湧出し終わるまでおよそ三秒でした。その三秒の間に、長さ五百メートルの大橋を突破できれば、スザクには攻撃されません」

「なるほど……。三秒で五百メートル、つまり時速六百キロメートルね」

さすがの暗算能力を発揮する楓子の相づちに、少し遅れて答える。

「そう……ですね。僕の飛行アビリティ単体での最高速度が時速五百キロメートル、心意技の（光速翼）を使えば時速十キロまでは行きます。それに師匠のゲイルスラスターを加えれば、音速……つまり時速十二百キロメートルを超えることは可能だと思います」

「でも、二人ぶんの重さと空気抵抗を計算に入れる必要があるわ。単純にスピードが半減すると想定すれば、時速六百キロでギリギリだわね……。でも、だからって一人では行かせませんよ？」

釘を刺すように言う楓子に、こくこくと頷きかける。

「は、はい、解ってます。実は……もう一段、スピードを上乗せできる可能性があるんです。ただ、ちよつと不確定要素が……」

「ふうん……？」

首を傾げる楓子に、

「えと、詳しい説明は、離陸ポイントに着いたらします！」

とだけ告げると、ハルユキは移動を再開した。

四谷のあたりで道路を南東に取り、市街を左に見ながら飛ぶ。重厚な神威群と化した水田町の官庁街を越え、豪奢な屋敷が並ぶ赤坂から六本木を抜けると、目撃地点である麻布台一丁目

が見えてくる。

広い交差点の中央に着陸したハルユキは、楓子（フキコ）をそつと地面に立たせた。

二人、無言で北に伸びる桜田通り（さくらだどおり）を見やる。道路の長さ二・二キロと大橋の五百メートルを加えた彼方（あつた）に、密城（ていしやう）のシルエツトがうつすらと視認できる。

「……それで、先ほどの《可能性》とは、いったい何ですか？」

視線を戻した楓子の問いに、ハルユキは咳払い（せきはい）して答えた。

「はい。……じゃあ、とりあえず、呼んでみます」

ゴーグルの下で眼を閉じ、精神を集中する。

無制限中立フィールド（ふじげんちゅうりつフィールド）にいる自分から、上位世界であるハイエスト・レベルへと続くか細いリンクを通じて、《彼女》に呼びかける。

——聞こえるかい。

——きみに、力を貸して欲しいんだ。

——この声が聞こえたら、姿を見せてくれないか……。

りいりいん、と鈴（すず）が震えるような音が近づいてくる。デュエルアバターの中核（ちゅうかく）がその音に共鳴し、同調し、やがて音はハルユキの中に溶けて聞こえなくなる。

胸の前に両手を持ち上げながら、ゆっくり眼を開ける。掌（てのひら）の上に白い輝き（かがや）が生まれ、それはたちまち円環（えんわん）と紡錘（ぼうすい）体、羽根（はね）からなる小さな立体アイコンを描き出す。

「……やあ、メタトロン。ありがとう、出てきてくれて」

ハルユキが、神獣級エネミー（大天使メタトロン）の端末であるアイコンに呼びかけると、傍らの楓子がアイコンズを動かした。

しかしアイコンは、羽根をゆつくりばたさせているだけで、答えようとしなない。

「……………あの……メタトロン？」

もう一回名前を呼びながら、ハルユキが右手の人差し指でアイコンの体をつつこうとする。――。

羽根でべしつとその指先を払いのけたアイコンが、少々とげとげしい声を響かせた。

「ずいぶんと久しぶりですね、我がしもべシルバー・クロウ」

「あ……こ、ごめん、いろいろ忙しくて……」

「謝る必要はありません。しかし、長い間顧みられしなかったおまえに、どうして私が協力しなければならぬのです？」

「ほ、ほんとにごめんよ……」

なんとか機嫌を直して貰おうと、ハルユキがべこべこ頭を下げていると、楓子が呆れたような声を出した。

「相変わらず面倒くさいペットですねえ、鸚鵡さん」

「誰がペットですが、この無礼者!! 確かスカイ・レイカーとやら、いますぐそこに正座しな



「さー！」

「……………ほらね、不確定要素てんこ盛りでしょ。」

と、心の中で呟かずにはいられないハルユキだった。

そこからどうにかメタatronを宥めるのに三分を要した。移動に二十分と少しかかったので、自動切斷セーフティが発動するまで、あと一時間三十分。帝城内で安全な場所を確保する時間を考えると、あまり準備に時間をかけてもいられない。

「……………で、いったい私に何をさせようというのですか、シルバー・クロウ？」

ようやく話を聞いてくれる気になったらしいメタatronに、急いで説明する。

「あのね、また、きみの翼を貸してほしいんだ」

「なんだ、そんなことですか。あの翼はおまえに貸し与えたままなのですから、装着するのにいちいち私の許可は要りませんよ」

「システム的にはそうなんだろうけど、やっぱり借りてるものだからさ。それに、もう一つ、きみに協力して欲しいことがあって……………」

とハルユキが言った途端、アイコンは不機嫌そうに頭上のリングを明滅させた。

「何度言えば解るのですか、いまの私は体を修復中なのです。あの加速研究会じもと戦うなら一捻りにしてやりたいところですが、残念ながらその力はまだ……………」

「ち、違うよ。今日の相手はあいつらじゃない」

メタトロンにも見えるように、北に向けたアイコンを持ち上げながら、今日の自発的ミッシェンの内容を打ち明ける。

「えっと……僕らはこれから、畜城に突入するんだ」

その言葉を聞いた途端、アイコンは羽根の動きをびたりと止めた。

いちどハルユキの掌に落下してから、再び羽はたいて浮き上がる。くるりと体を反転させ、リングを猛烈な勢いでフラッシュさせる。

「——それを早く言いたくない、馬鹿者！」

「わあ、ご、ごめん」

「エリア00……おまえたちの言う（畜城）に関する情報を私がどれほど強く求めているか、知らないおまえではないでしょう！ あそこに侵入するのなら、行かないわけがありません。むしろ私を呼ばなかったら、力が戻ったあとで十回連続蒸発させていましたよ」

「あ、あは、あはは……」

とどこちなく笑うしかないハルユキの斜め後ろで、楓子が再び呆れ声で囁いた。

「ほんつとうに、めんどくさいヒトですね」

ゲイルスラスターを装着した楓子と、メタトロン・ウイングを装着したハルユキは、麻布台一丁目交差点の真ん中で向かい合った。

前回は楓子の背中にハルユキが乗る形を取ったが、それは楓子が橋の入り口で離脱するカタルト役だったからだ。今回は二人とも突入するのだから、より確実にアバターを結合できるフォーメーションが求められる。

——という理屈は解るのだが、いざ楓子と正面から抱き合うとなるとやはり平常心を保つのが難しい。両腕を微妙な角度で固定させたままハルユキがどきまぎしていると、くすつと微笑んだ楓子が、一歩近づいてハルユキの背中に両手を回しながら言った。

「変わらないわね、感さんは」

「……す、すみません、成長してなくて……」

「変わらなくていいこともあるわよ」

などと言葉を交わしていると、ハルユキの右肩に乗った立体アイコンが苛立ったような声を発する。

「何をぐずぐずしているのですか、準備ができたのなら早く飛びなさい」

「わ、解ったよ」

ハルユキもスカイ・レイカーの背中とデイルスラスターの隙間に両腕を回し、引き寄せる。

「もっと強く固定しないと」

と指示しながら楓子が両腕に力を込めるので、ハルユキもそれに倣う。デュエルアバターの硬質装甲同士でありながら、どこか柔らかさを感じさせる圧力が思考のギアを上滑りさせるが、

頭を振って切り換える。ここからは一ミリの秒の連続も許されない。飛ぶことに全エネルギーを集中させねばならない。

「わたしが下でいいわ。進路の微修正は猶さんをお願いします」

楓子の指示に、いちど深呼吸してから答える。

「了解です。ゲイルスラスターの噴射タイミングもちちらから伝えます」

「お願いね。わたしは、必殺技、ゲージもスラスターのエネルギーゲージもフルチャージよ」

「僕もです」

二人で顔き合っていると、右肩のメタトロンも、普段より少し早口で言った。

「私はとうに準備できています」

「り、了解。……きみは、そこにいて飛行中に落っこちたりしないの？」

「おまえとの相対座標を固定しているので問題ありません。そんなことより、早く行動を開始しなさい」

待ちきれない、というように羽根を小刻みにバタバタさせるメタトロンを見て、ハルユキと楓子は仄かな苦笑を浮かべた。そのおかげで胸に居座っていた緊張感が解れ、すうっと気分が落ち着いていく。

「……じゃあ、飛びますー」

宣言し、ハルユキはまず自分本来の翼だけを広げるとゆっくりと離陸した。高度十メートルで

ホバリングし、体を地面と平行に倒す。抱き合う楓子は背面飛行状態になるが、慣れた様子で天地逆さのフィールドを見据えている。

二人の目の前には、青白く光る桜田通りが、滑走路のようにまっすぐ伸びている。消失点の彼方に、壮麗な帝城の尖塔群がおぼろげに見て取れる。

あの城の最深部、《八神の社》には、最後の神器《ザ・フラクチュエーティンダ・ライト》が眠っている。

かつて、ハイエスト・レベルで大天使メタトロンは言った。

——三界を統合するこの空間、おまえたち小戦士に倣って呼ぶならば加速世界の存在理由。それは世界の中心にして異界たる帝城と、その深奥に沈む八神の社を突破し、封印されたザ・フラクチュエーティンダ・ライトに至ること。私は、そのように確信します。

つまり、T.D.L.こそが対戦格闘ゲーム《ブレイン・バースト2039》の存在意義そのものであるとメタトロンは宣言したのだ。そしてハルユキも、その言葉を信じている。

——黒雪姫先輩。

内緒で危険なことをしてごめんなさい。でも、僕はT.D.L.の秘密を解き明かして、必ず先輩のところに戻ります。先輩と一緒に、加速世界の最果てに辿り着くために。

胸の奥で剣の主にそう呼びかけ、ハルユキは両眼を見開くと、直線道路の果てを覗んだ。

「……僕らが道路と大橋の境界線を越えた瞬間、スザクが出現し始めます。そこから三秒以内

に南門まで到達、突入します」

作戦を再確認すると、樞子が無言で鎮く。鎮き返し、ハルユキは大きく息を吸い込んだ。

「カウントします。5、4、3、2、1……ゼロ!!」

叫ぶと同時に、背中中の銀翼を思い切り振り振る。十枚の金属フィンが大気を叩き、発生した強烈な推力が二つのアバターを砲弾のように加速させる。

道路の左右に立ち並ぶ白亜の建物が、コマ送りの映像となって通り過ぎていく。ざいいん、という高周波が高まるにつれ、空気の壁も密度を増す。

体感速度が時速三百キロメートルに達し、飛行アビリティによる加速が鈍ってきたと感じた瞬間、ハルユキは短く叫んだ。

「おとおッ!!」

気合いとともに、新たな翼——強化外装（メタトロン・ウイング）を思い切り剥がたせる。側のように鋭い形状の翼から白光が迸り、セカンドギアの強烈な推進力がぐんぐんと二人を加速させる。

「私の翼を、なかなか使いこなせるようになりましたね」

右肩で静止するメタトロンの思念が、脳裏にちかちかと瞬いた。言葉で答える余裕はなかったが、感謝の念を伝えながら、ハルユキは全開で加速し続ける。

必殺技ゲージの急減少に反比例して、飛行スピードはみるみる上昇していく。左右の建物は

灰色の流線となって溶け始める。

しかし、時速四百キロメートルで再び加速力が鈍化する。二人分の重量もさることながら、倍増した空気抵抗が予想以上に厳しい。大気は高粘度の液体と化して、二人を押し戻そうとする。

歯を食い縛りながら見開いた両眼が、進路の右側に巨大な建築物——虎ノ門ヒルズタワーの影を捉えた。ここが滑走路の中間地点だ。楓子の体をしつかりとホルドしながら、半ば思念で叫ぶ。

「——師匠!!」

「——了解!!」

超高速の交感を合図に、スカイ・レイカーの背中に装着されたゲイルスラスタが、青白い噴射炎を進らせた。

サードギアの加速もまた凄まじかった。途轍もない加速Gに、ハルユキは全身の装甲が軋むのを感じた。シルバー・クロウの四枚の翼が放つ高周波に、ロケット・ブースターの駆動音が重なる。体感速度が時速六百キロメートルを超え、視界がどんどん狭窄していく。

放射状に溶け崩れる風景の中央に、ハルユキはついにそれを見た。

桜田通りからまっすぐ続いている橋と、その先に鎮座する巨大な城門。

理論的には、時速六百キロ出ているれば、長さ五百メートルの大橋を三秒で通過し、スザタの

湧出が完了する前に門に辿り着けるはずだ。しかし、現状ではタイミングがぎりぎりになってしまふ。あと一段階の加速が欲しい。

やっぱり……使うしかない！

覚悟を決め、ハルユキはイマジネーションを集中させた。

光。全てを貫く光のイメージ。

シルバー・クロウの全身が、淡い輝きに包まれる。心意の過剰光は、抱き合う楓子と、右肩のメタトロンをも包み込む。

—— っ……… けえええええ —— ツ!!

無音の雄叫びに続いて、ハルユキは叫んだ。

「（光速………異） —— ツヨ!!」

トッブギア。

ハルユキが習得している唯一の第二段階心意技が、最後の加速力を発生させる。圧縮された空気の壁が衝撃波を生み出し、左右の建物を粉砕する。

時速七百……七百五十……八百キロメートル。

滑走路が終わりに近づく。前方両側に、再び大きな建物が見えてくる。左側は警視庁、右側は法務省、その向こうで地面は消失し、底無しの大断崖絶壁にかかる橋だけがフィールドと帝都を繋いでいる。

橋に突入するまで、あと二秒……二秒……………。

その刹那。

全てがスローモーションに感じられる超加速感覚の中で、ハルユキは見た。

帝城南門の手前に存在する（スザクの祭壇）に、真紅の炎が生まれる。それはみるみる巨大化し、長大な翼と尾を持つ火の鳥の姿へと変化する。

超級エネミー、四神スザク。その出現エフェクト。

——でも、どうして！ 僕らはまだ橋に入っていないのに！

驚愕に彩られた絶叫が、ハルユキの意識に反響した。

スザクの湧出タイミングが、予定より二秒も早い。このままでは、湧出が終わる前に祭壇を突っ切り、門に突入するのは不可能。しかし、今更中止もできない。ここで減速しても、結局スザクのテリトリーの中で止まってしまうだけだ。

——突っ込みなさい、鴉さん！！

——行くのです、クロウ！！

楓子とメタトロンの思念が、同時に弾けた。

「う……おおおおおっつっ！！」

吼えながら、ハルユキはありったけのシステムの、精神的エネルギーを振り絞り、更に加速しながら大橋へと突入した。

橋の半ばまで到達した時、四神スザクがついに実体化を完了した。紅蓮の炎を全身にまとう翼長三十メートルの不死鳥は、ルビーのように輝く嘴をいっばいに開き、両翼を力強く羽ばたかせて、ハルユキたちの行く手に浮き上がった。

嘴の奥に、オレンジ色の閃光が生まれる。プレス攻撃。闘に合わない。火炎を浴びた瞬間にハルユキと機子の体力ゲージは消し飛び、脱出不能の無限E.K.状態へと陥る――。

突然、強烈な光が生まれた。

光源は、ハルユキの右肩。そこに静止する立体アイコンが、スザクの炎さえも色褪せさせるほどの白光を放ちながら、大天使の名に恥じぬ威厳に満ちた思念を響かせた。

「――頑冥なる獣、破壊の権化よ。四聖たる私と我がしもべの飛翔を阻むことは許しません。」

その声は、あたかも物理的なエネルギーを伴っているかの如くフィールドに拡散し、スザクの動きをほんの一瞬だが停止させた。

直後、かつても聞いた超級エネミーの声が、爆炎の如く轟き渡った。

「――たかが穴蔵の王如きが、四神たる我に手向かうか。愚かなる反逆者よ、小虫ともども灰となるがよい。」

実際には、それらのやり取りは言語ではなく思念によって交換されたため、かかった時間は一秒にも満たなかった。



しかしその一秒は、これまでハルユキが無制限中立フィールドで体感した全ての時間の中で、最大級に貴重な一秒だった。

スザクが、プレス発射モーションを再開する。残り距離、百メートル。

菱形に開かれた嘴の奥から、火炎の奔流が解き放たれる。恐るべき超高温を示して、オレンジ色の炎の先端部は強烈な青紫色に輝いている。

上空から地獄の業火が迫る。世界が炎の色に染め上げられる。ハルユキは、限界の超高速で飛翔しつつも、翼の角度を調整して高度を下げる。楓子の背中に橋に接触した瞬間にバランスを崩し、弾き返されて炎に吞まれるのは確実だが、限界ぎりぎりまで橋に近づかねばプレスは回避できない。

あと一センチ。もう一センチ。ここからあと……五ミリ。

背面飛行状態の楓子が噴射し続けるゲイルススターの安定翼が、チツと音を立てて橋の敷石を掠めた。

ハルユキの背中に火炎プレスの飛沫がたった一粒弾け、それだけで体力ゲージを一割も削り取った。

「おおおおッ!!」

無意識の雄叫びを漏らしながら、ハルユキは最後のイマジネーションを振り絞り、上空から噴射される炎から逃げ続けた。高度十五メートルに達するスザクは、飛翔するハルユキたち

を狙ってブレスの角度を変えている。しかし真トを越えては撃てないはずだ。

降り注ぐ炎の雫がまたしても装甲を穿ち、ゲージを穿った。ゲイルスラスターも二度、三度と機に接触し、火花を散らした。

スザタの真下の死角まで、あと五十……四十……三十メートル。このスピードなら瞬き以下の時間で駆け抜けられるはずの距離が、絶望的に遠い。

いや、絶望だけは絶対にしない。ひたすらに信じて、飛ぶのだ。親子のゲイルスラスターを、メタトロンの翼を、そして自分自身の意志を。

飛べ。飛べ。飛べ——

きらり。

青い閃光が、見開いたハルユキの両眼を射貫いた。

火炎、ブレスの貪欲な青紫色ではない。どこまでも純粋で、何よりも深い、瑠璃の青。空の色。かつて、一度だけ見た色。

光の発生源は、前方に立ちほかかる番城南門だった。

分厚い石の門扉が、いつの間にか、ほんの少し——人ひとりぶんだけ開いている。その隙間の暗闇に、静かに立つ人影。垂直に降る月光が装甲に反射し、高貴でさえあるロイヤルブルーに輝かせている。

人影は、右手を左腰のあたりに据えていた。その姿が、昨日戦ったコバルト、マンガン姉妹

の必殺技モーシオンに重なった。

あれは、居合い斬りの――。

ハルユキがそう感じた瞬間、人影が全身から青いオーラ――心意の過剰光を迸らせながら、右手を廻るようなスピードで動かし、明らかな攻撃動作だったが、ハルユキは飛翔する方向もスピードも一切変えなかった。

直後、若武者を思わせる涼々しい声が朗々と響いた。

「（天・義・雲）！！」

超高速で水平、更に垂直に切り払われた刃が、十字の剣光を描いた。

同時に、ハルユキたちの目の前に迫りつつあった四神スザクの背中に、巨大な青の十字が刻み込まれた。

超級エネミーが、怒りの波動を迸らせながら、わずかに体勢を崩す。ハルユキの背中を捉えつつあったプレススの軌道が狂い、火炎は橋の外の断崖へと吸い込まれていく。

――ラストチャンス！！

残された全エネミーを消費しながら、ハルユキは最後の加速を試みた。

ついに、スザク直下の空間に突入する。頭上から、怒りに満ちたオーラが押し寄せて二人を押し込めようとする。だがこのプレッシャーは幻だ。戦闘力では四神スザクの足許にも及ばずとも、意思力で負けるわけにはいかない。

圧力に抗い、ハルユキは針路を上向けた。門までの距離はわずか三十メートル。あの隙間に飛び込めれば、もうスザクは追ってこない。

その思考は、決して消滅でも強硬でもなかった。

しかし、意識が真上の強敵から前方の門へと向いた瞬間を、超級エネミーは見逃してくれなかった。

――上です、クロウ!!

メタトロンの声が脳内に響く。同時に、ムチのようにしなる帯状の炎が真上から襲ってくる。スザクの尾だ。あれに叩かれたら橋に激突し、確実に即死する。

「やられ……るかああああ——ッ!!」

絶叫しながら、ハルユキは楓子の背中から左腕だけを離し、振りかぶった。

ハルユキは、すでに第二段階心意技（光速翼）を発動させている。いままで、同時に二つの心意技を発動させたことはもちろん、試してみたことすらない。だが、やるしかない。

翼に集めた光のイメージはそのままに、左手にも銀色の過剰光を宿す。

猛然と迫り来る不死鳥の尾に向けて、剣のように伸ばした五指をまっすぐに突き込む。

「――（光線剣）!!」

ハルユキの左手から、澄んだ金属音とともに二メートル以上も伸びた光剣が、火炎でできたスザクの尾羽をたった一枚だが断ち切ったのと同時に。

腕の中の楓子が、同じく左手を突き出しながら敢然と叫んだ。

「——（庇護風陣）!!」

左手から迸ったダリーンの過剰光が、渦巻く風へと変わりながらハルユキたちを包み込む。心意のバリアが、押し寄せてくる炎に抗って大量の火の粉を散らす。しかし、さしもの楓子もスザクの火炎を完全に防ぐことはできず、バリアの内部に侵入してくる火の粉が二人の装甲を次々と穿っていく。

視界左上の体力ゲージが急減するのを感じながら、ハルユキは針路に最後の微修正を加えた。狙ったのは、スザクの尾羽に（光線剣）が作ったわずかな隙間。

体を傾け、翼を鋭角に畳み、両眼を見開いて——。

「うおおおおッ!!」

これも最後の雄叫びを上げながら、針穴のような活路に突入。

尾羽と交差した瞬間、視界が真っ赤に染まった。体力ゲージが更に減り、五割を下回った。

次の瞬間、ハルユキたちは、彗星のように火の粉の尾を引きながら夜空へと飛び出し——。

後方で、スザクが轟かせる怒りに満ちた咆哮を聞きながら、最後の三十メートルを飛翔して、わずかに開いたままの大門の隙間へと飛び込んだ。

自分がどうやって着地したのか、ハルユキは覚えていなかった。

はっと気付いた時には、真っ白い地面の上で楓子に抱きかかえられていた。

「……………御匠……………ここは……………」

スカイ・レイカーのアイレンズをぼんやりと見詰めながら、小声で呟く。

しかし、その問いに答えたのは楓子ではなく、ハルユキの頭上に浮遊する立体アイコンだった。

「何を言っているのですか、しもべ！　ここは……………この空間こそが、エリア00です！　まだ外縁部ですが、しかし我々はついにあの隔絶空間に侵入したのですよ!!」

元気いっばいの声を聞いているうちに意識もはっきりしてきたので、ハルユキはよいしよと上体を起こした。

「大丈夫ですが、鴉さん?」

今度こそ楓子が訳ねてくるので、こくこく頷く。

「も、もちろんです。あの……………僕、どれくらい気絶してました?」

「はんの数秒ですよ。減速、着地も見事なものだったわ」

「そ、そうですか……たぶんそれ、自動操縦です……」

ヘルメットをかきかき答えると、改めて状況を確認する。

頭上には、巨大な満月を控く漆黒の夜空。体の下は複雑な形のタイルが組み合わさった地面。
 《月光》ステーションは離陸中のようだ。

視線を下ろしてくると、二十メートルほど先に屹立する垂直の岩板があった。純白の大理石でできたそれは、巨大な門扉だ。いまは隙間なく閉じられ、しかも中央部分に銀色の金属板がボルト留めされている。四神スザタのレリーフが施され、月光を浴びて冷ややかに輝くそれは、かつても見た《門の封印》だ。

ハルユキたちが突入し、門が閉まった時点で再生したのだろう。しかし、突入前に聞いたということは、やはり《彼》が――。

そこに思考が及んだ瞬間、ようやく完全に覚醒したハルユキは、地面に座ったまま百八十度体を回転させた。

そして、見た。

少し離れた場所に、ひっそりと、しかし圧倒的な存在感を内包しつつ立つ、紺碧のデュエルアバター。

貴人の雰囲気と漂わせるデザインの装甲と、左腰に装備された直刀。空色のアイレンズは、静かな輝きを湛えてじっとハルユキを見詰めている。

大きく息を吸い、しばし溜めてから、ハルユキはそつと呼びかけた。

「……リード……」

その途端――。

涼しげなフェイスマスクの口許に、淡い微笑みが滲み。

切れ長のアイレンズに、温かな色の光の粒が宿った。光は音もなく零れ、宙に漂い、消えた。紺碧の若武者アバター、トリリード・テトラオキサイドは、地面に座り込んだままのハルユキに合せて端然たる仕草で正座すると、軽やかな美声を響かせた。

「お久しぶりです、クロウさん。……本当に、来て下さったんですね」

「……………遅くなって、ごめん」

熱いものがとめどなく込み上げてくる胸の奥から、どうにか言葉を絞り出す。

「……………でも、来たよ。リードと約束したから……………もういちど、君に会うって」

するとトリリードは、深々と頷き返し、言った。

「ええ。信じていました……………きつと、この時が来ると」

重力を感じさせない動作で立ち上がり、滑るように近づくと、おもむろに右手を差し出す。その手を取り、立ち上がったハルユキは、万感の思いを噛み締めながら改めてトリリードと握手を交わした。

強く願ひ続けていた再会だ。嬉しくないわけではない。しかしハルユキは、切ない痛みが胸を

通り過ぎていくのを感じていた。

この場に、同じく再会を願いながら果たせていないウルフラム・サーベラスもいてくれたら。きっと彼も、トリリードと最高の友達になれるだろうに。

刹那の感傷を呑み下し、ハルユキはもういちどリードの右手を強く握った。手を離し、一歩下がると、周囲を見回す。

帝城・南門の内側に設けられた広場だ。最初に訪れた時は〈平安〉ステージ、脱出時は〈煉獄〉ステージだったので〈月光〉ステージでの見た目はまったく異なるが、地形はほとんど同一。正方形の広場からは、幅広い通路が北にまっすぐ伸び、厳めしくも美しい帝城本殿へと続く。通路の左右にはゴシック様式の円柱が等間隔に立ち並び、柱の壁面にはオレンジ色の篝火が灯されている。

だが、前回とは決定的に雰囲気が違う。いったい何が……と肩を寄せた時、右肩で沈黙していたメタトロンが声を出した。

「以前に参照したシルバー・クロウの記憶では、このポイントには敵対的な高位ビーイングが複数配置されていたはず。排除したのはおまえですが、リードとやら？」

そう、それだ。

侵入時も脱出時も、ハルユキとメイデンはこの場所を徘徊する衛兵エネミーから隠れるのに大変な苦勞をしたのだ。しかしいまは、少なくとも視界内にはエネミーの姿は一つもない。

全長十センチにも満たないアイコンに名前を呼ばれたトリリードは、さすがに驚いたらしく何度か瞬きしてから、礼儀正しく答えた。

「いえ、違います。私だけでは、とてもこの広場を守るエネミーは倒せませんから」

「リードだけ……って、でも、帝城の中には……」

ハルユキが、戸惑いながらもそこまで言いかけた、その時。

傍らに立つ楓子が、素早く顔を上向けた。その視線をなぞり、ハルユキも夜空を見上げた。

広場と通路の境目に立つ、ひとさわ高い円柱。そのてっぺんに、何者かの姿があった。

装甲の色は、夜空に溶け込む黒系。しかし青白い月光が、シャープなデザインの輪郭を浮き

上がらせている。

「……………わたし、とっても嫌な予感がしてきたわ」

楓子が呟いた、その直後。

何者かは、高さ二十メートルはありそうな円柱から無造作に飛び降り、空中で連続宙返りを披露してから見事な着地を決めた。

すたすたと歩み寄る漆黒のデュエルアバターを、ハルユキは知っていた。

ほんの四日前、渋谷エリアで戦ったばかりのその姿を、見間違えるはずがない。しかし彼が、ここに存在するはずもない。存在できない理由があるのだ。

「……………どうして……………」

掠れ声で囁くハルユキの隣から、楓子が一步、二歩と進み出た。

黒いアバターは、楓子からはほんの二メートル離れた場所で立ち止まると、飄々とした声と態度で挨拶した。

「よ、レッカ、クロウ、久しぶり……でもないか、四日ぶり。クロウの肩に乗ってるヒトとは初対面かな? いや……ずっと昔に戦ったような気もするな」

ひらりと右手を振るアバターの両肩からは、背中に交差装備された剣の柄が突き出ている。

グレート・ウォール（六層装甲）第一層。

《矛盾存在》グラファイト・エッジ。

間違いない。だが、なぜ無制限中立フィールドの帝城内部に出現できるのか。帝城北門の外側、四神ダンブの祭壇で無限に石化されているはずではなかったのか。

呆然と立ち尽くすハルユキに、更なる衝撃を与えたのは、グラファの隣に進み出たトリリッドだった。

若武者アバターは、ハルユキと楓子を順に見ながら、思いもよらぬ言葉を発した。

「お二人はもうご存じのようですが、念のため紹介させて頂きます。こちらはグラファイト・エッジ。私に剣の使い方とバーストリンカーとしての心得を教えてくれた師であり、また私にブレイン・バースト・プロダラムそのものを与えてくれた《親》でもあります」



accell World 18

紅炎の軌跡

「……」
「……」
「……」

1

クリームの上に敷き詰められた毒に、睫毛でつや出し液を塗っていく。ストロベリージャムを混ぜてあるので、色は薄いピンク。

赤い液体はそれが何であれ——飲食物以外の、たとえばアロマオイルや洗剤の類であつても苦手だが、このくらい濃さであれば気にはならない。美早く、しかし丁寧に手を動かし、たくさんの毒たちに艶やかな光沢をまとうせる。

作業を終えると、大理石の回転台をぐるりと回し、出来映えを確認。6号、つまり直径十八センチのホールケーキは純白のクリームで覆われ、上面にはたくさんの毒が放射状に並ぶ。その下にクリームが細かい縞状に絞つてあるのが、このケーキの名前の由来だ。フランス語で（ル・レビランス・ド・ラ・フレーズ）。日本語では（毒の迷宮）。ピースに切り分けても、毒が三つも載るのがウリだ。

自己チェックを済ませた書店美早は、顔を上げると、右隣でチーズケーキの生地を混ぜている四十代の女性に声を掛けた。

「お願いします」

女性——美早の伯母である水見麗が、ボウルを作業台に置いて近づく。美早が仕上げたケー

キをくるつと一回転させ、微笑。

「いいんじゃない、ミヤア。残りの（ラビリンス）も任せるわ」

「……さ」

安堵のあまり、危うくT目Xと口走りかけ、言い直す。

「ありがとう」

伯母が頷き、持ち場に戻ってから、美早も少しだけ口許を綻ばせた。普段あまり笑うということをしていないのだが、今だけは仕方ない。美早が仕上げたケーキをそのまま店に出していいと言われたのは、これが初めてなのだ。

完成したばかりの苺ケーキを冷蔵庫に移動させ、次のスポンジを回転台に載せる。生クリームの入ったボウルを握え、パレットナイフで塗っていく。動きは大胆に、そして繊細に。大切なのはリズム。ケーキ作りでも、エレクトリック・バイタの操縦でも——そしてあの世界での戦いでも。

ついついあちら方向に傾きそうになる意識を、目の前のケーキに集中させる。今日は土曜日、彼女がこの店を訪れる日だ。オーダーは、いつだって苺のラビリンス。だから、いま美早が作っているケーキが彼女の口に入ることになる。出来映えいかんでは、夕方の領土戦に影響してしまうかもしれない。もちろん彼女は（純色の王）であるがゆえに直接戦場には立たないが、この練馬戦域と、隣接する中野戦域を防衛すべきチームの編成と作戦立案は彼女の重要な仕事

だ。

……つと、結局、あっち側のことを考えてしまっている。この店のシェフ・パティシエールである伯母は、コックコートを着ている時はとても厳しい人で、上の空で作業していると即座に叱責が飛んでくる。見習いとして厨房に入ってからもう二年以上も経つが、いまだに褒められることより叱られることのほうがずっと多い。

でも、それは問題ない。伯母がそういう人だから、美早は安心して彼女に厨房を任せておける。父親から相続したこの店舗を洋菓子店に改装して以来、経営上の不安を覚えたことは一度もない。

そう——、今年高校一年生の美早は、(パティスリー・ラ・ブラージュ)の見習い菓子職人兼ウェイトレスにして、オーナー経営者でもあるのだ。

練馬区桜台でカフェを経営していた父が、特発性拡張型心筋症という心臓の難病で急逝したのは四年前。美早が十二歳の秋だった。

葬儀に出席した親類縁者の数に、美早は不謹慎ながら驚いた。コーヒーとオートバイが大好きだった遺棄者の父は、堅い職業の多い番屋一族では異端扱いで、親戚付き合いはほとんどなかったからだ。

どうにか喪主を務め終え、ほとんど虚脱状態に陥った美早だったが、自宅でひとり悲しみを

嘯み締める時間は与えられなかった。おじやおばたちは、精選落としての席で、早くも美早の今後を相談し始めたのだ。

病床の父親は、自分が死んだ後のことを、嫌がる美早と何度も話し合ったうえで公式の遺書を作っていた。母親もずっと昔に他界していたため、父親名義の土地と店舗、それなりの額の貯金の全てを美早に相続させたうえで、国家後見制度を適用し、美早は中学卒業まで練馬の全寮制学校に入る。遺書にはそのように書かれていたはずだった。

美早がそれを告げると、おじ、おばは口を揃えて「とんでもない！」と叫び、子供には家庭が必要だ、我々の誰かが引き取ってしっかり育てると主張した。そして美早が「この家から離れたくない」と言うのと、理路整然と説得にかかった。

不動産の相続には大変な税金がかかるし、この際、家も土地も（もちろん真っ赤なイタリア製エレカトリック・バイクも）処分したほうがいい。お金は、美早ちゃんが大人になるまで、ちゃんと管理してあげるから――。

彼らは善意で申し出てくれたのだ、とは五年が経つ今でも思っている。どんな家庭だって、もうすぐ中学生になる子供を引き取るのは負担が大きいだろう。だからむしろ、複数の親戚が「うちに来なさい」と言ってくれたことに美早は驚いた。驚き、有り難くも思ったが、しかし父親の生き方を理解しなかった人たちの子供になるつもりはなかった。

美早は、親戚たちへの返事をその場では保留し、言った。お父さんがいなくなつてとても悲

しいし、今日は疲れているので、少し考える時間をください、と。顔を見合わせ、決々ながら納得したおじ、おばたちは、明日の夕方また来ると言い残して池袋のホテルに戻った。

翌日の早朝から、美早は動いた。四人いる父のきょうだいの中でただ一人、葬儀が終わると静かに姿を消した伯母——水見薫に会いに行ったのだ。

赤坂にある大型ホテル内の洋菓子店でパティシエールをしていた伯母に面会した美早は、父に言われていたとおりに、自分を引き取ってくれと頼んだ——わけではなかった。その代わりに、彼女をヘッドハンティングしたのだ。父から相続したカフェを洋菓子店に改装するので、その新しい店のシェフ・パティシエールになって欲しい、と。

名店の厨房で責任あるポジションに就いている伯母が、簡単にイエスと言ってくれるとは思っていなかった。三回頼んで三回ノーと言われたら諦めよう、そう覚悟していた美早に、伯母はひとつだけ質問した。

「カフェを洋菓子店に改装するのは、私を呼ぶため？」

美早は即座に否定した。

「いいえ、違います。あの場所にケーキ屋さんを開くのが父と母の夢だったからです。私が赤ん坊の頃、母が病気で亡くなるまでは」

伯母はきっちり一分間考え、やがてひと言「いいわ」と答えた。

少し後になって美早は、なんであんなに重大な……まだ三十代だった伯母の人生を左右する

はどのお願いを、あんなにすぐ受け入れてくれたのかと訊ねた。すると伯母は、微笑みながら教えてくれた。

伯母のすぐ下の弟である美早の父からは、「もしもの時は美早を頼む」としか言われていなかった。でも、父と結婚したばかりの母とは、「お互いが洋菓子店を開く時は協力する」と約束していたのだという。美早が生まれるずっと前……伯母も美早の母も、同じ調理師学校で学んでいた頃の話らしい。

美早の母を父に紹介したのが伯母の薦だったことを、美早はその時初めて知った。

他のおじ、おばたちは、美早と薫伯母の選択には決していい顔をしなかったが、しかしもう彼らに異を唱えられる段階ではなかった。その日の夜には全員が大阪や仙台に帰り、入れ替わりに薫伯母と、一人娘である二つ年下の従妹が板台の住居兼店舗を訪れた。その従妹が、伯母と同じくらい重大な転機をもたらそうとは、まったく予想していなかった。

伯母は美早に、両親の夢だった洋菓子店経営への道を示し。

従妹は、美早がずっと押し殺してきた悲しみを昇華するための世界を与えたのだ。

彼女の名前は水見あきら。当時は小学四年生だったが、ベリーショートの髪と、パーカーに纏身のツイルパンツという格好、そしてシンプルな形状の眼鏡も相まってどこか中性的な雰囲気だった。

父親の葬儀に参列したのは大人たちだけだったので、あきらと顔を合わせるのは実に二年ぶ

りのことだった。小学生にとって二年間はもの凄く長い時間だし、美早もあきらもお喋りとはほど遠い性格ということもあって、何かのタイミングで二人きりになった時、美早は少し気話まじりに感じたものだ。

しかしあきらは不思議なほど落ち着いていて、水底を思わせる静かな瞳でしばし美早を見詰めてから、とあるモノを差し出した。物体ではなく、ひとつのプログラム。魂を解き放ち、
 (加速) させるための鍵。

自宅裏のガレージで、大型バイクのシートにあきらと横並びに腰掛けて訪れた不思議な世界で、美早はようやく泣いた。泣いて泣いて、一生分の涙を出し尽くした。

以来四年、美早はたった一粒の涙も流していない。現実世界でも、そして加速世界でも。そう、泣いているヒマなんかないのだ。時間は猛烈な速さで流れ去っていく。たとえ意識を一千倍に加速しても、その流れは止まってはくれない。見定めた場所に向かって、自分に出せる限界のスピードで走り続けねばならない。草原をしなやかに駆ける豹のように。

平日はもちろん学校があるので夜の仕込みしか手伝えないが、土曜の午前はまるまる厨房に入り、午後は厨房服をウエイトレスの制服に着替えて店頭に立つ。

ケーキ作りを重点的に学びたい気持ちもあるが、パティシエールを志すなら接客も経験するべきというのが伯母の考えだ。なかなか愛想良く笑うのは難しいが、やってみればカウンター業務も楽しい。とくに、ショーケースに並ぶ色とりどりのケーキの前で瞳を輝かせる子供たちを見ると、胸が不思議な温かさで満たされる。

問題は、伯母の提案した制服がいまどきメイドルックだったことだが、亡き母親が学生時代にスケッチしたデザインだと言われれば受け入れざるを得ない。美早の他に二人いる接客担当の女の子には案外好評だし、三年も着ればどうあれ慣れるというものだ。

午前中に美早が仕上げた——残念ながらスポンジ生地は伯母が焼いたのだが——苺のラビリスは、午後三時の時点ではほとんど売れてしまい、残りはたった二つ。少しハタハタしつつ仮想デスクトップの時計に繰り返し目をやっていると、美早のシフトが終了する三時三十分直前に、ドアベルを横した合成チャイム音が響いた。

自動ドアが開き切るより早く、するりと店内に入ってきたのは、白いブラウスと紺のプリー

ツスカートの制服を着た小柄な少女だった。かつて美早も通っていた全賢制学校の初等部のものだ。

「いらっしやいませ」

という美早の声に、内心の安堵と期待は出なかったはずだが、少女は眼を合わせると悪戯っぽく笑った。頭の両側で結わえた赤毛を揺らして足早にショートケースへ近づき、少しそばかすの浮いた鼻をくつつけんばかりに覗き込む。

真つ赤なランドセルが傾き、中のタブレット端末その他の教材が動く音を微笑ましく聞きながら、美早はオーダーを待った。とは言え、もう注文は解っている。客の少女は、トレイに二つだけ残っている莓ケーキを見た途端、ぱっと顔を輝かせた。

「ラッキー、まだ残ってたー ラビリンスひとつ下さい！」

「(莓のラビリンス) お一つですね。かしこまりました、少々お待ち下さい」

さすがに制服を着ている時は「イエス」のひと言で済ませるわけにはいかない。真面目に応答しつつも、イートインのフテイクアウトの質問は省略。ボックスではなく皿を用意すると冷蔵ショートケースのドローワーを引き出す。

「(ラビリンス)」を一つ、ケーキサーバーで慎重に皿へ移動させたとこで、再び自動ドアの来客チャイムが聞こえた。続いて、勢いよく近づくと複数の足音と、元気いっばいの叫び声。

「あたし、いちこのらりびんすー！」

「サナもいちこのー いちこいっばいのー」

新たな客は、五歳と四歳くらいの幼い女の子たちだった。後ろから母親であろう女性が入店してくる。美早は「いらっしやいませ」と声を掛けてから、接客をもう一人いるウェイトレスに任せてレジカウンターに移動しようとした。だがそこで、問題の発生を予感する。

どうやら姉妹らしい女児二人は、ショークース内の《いちこの》がラスト一個であることに、同時に気付いたようだった。顔を見合わせ、一瞬、間合いを計るように沈黙してから、揃って声を張り上げた。

「サナがいちこー」

「だめ、あたしが先に言っただもん！」

「やーだあー！ いちこのー」

妹の眼にたちまち涙が浮かび、追いついた母親が困ったように眉を寄せ、恐らく「お姉ちゃんなんだから我慢しなさい」的な言葉を発しようとした、そのタイミングで――。

先に《ラビリンス》を注文した赤いランドセルの少女が、軽く微笑みながら美早に向けて言った。

「ごめん、注文変更。チェリータルトひとつ」

すぐに組み込み、涙目の幼子の頭を優しく撫でる。

「ほら、見ててみな。いちこの、二つになるから」

美早はそつとショークースまで戻ると、もう一度引き開け、皿の（ラビリンス）を戻した。ドローワーが収納されると、妹の眼が丸くなる。

「ふたつになつたー！ ママ、いちごの、ふたつあつたよー！」

嬉しそうなその声に、少女も笑顔で立ち上がると、申し訳なさそうに頭を下げる母親に軽く会釈を送した。

別のドローワーからさくらんぼのタルトを皿に載せ、再びレジカウンターに移動しながら、美早は切ない痛みのような感覚をおぼえていた。

先に莓クーキを注文していた赤毛の少女は小学六年生だ。幼稚園児であろう姉妹と比べればずっと年上ではあるが、世間一般的にはまだまだ子供と見なされる歳。一週間ずっと楽しみにしていたクーキを譲らなくても、誰に責められるいわれもない。

しかし彼女は、あの状況で幼児の涙を無視しない——あるいはできない。そういう子供らしさは、ずっと昔に彼女の中から失われてしまった。なぜなら、恐らく（精神の通じた時間）の長さだけを比べれば、十一歳の彼女のそれは、十六歳の美早をも上回るだろうから。

カウンターの右端にあるレジ端末機に歩み寄ると、視界に会計ウインドウが浮き上がった。タルトひとつで四百三十円なり、の表示を客の少女も一瞥し、少し考えてから付け加える。

「アイスマルクティーつけてください」

「かしこまりました」

傾き、メニユー窓からセツトドリンクを追加。計六百円になったウインドウの確認ボタンに少女がタッチすると、ちやりん、と古いキヤッシュレジスターの動作音を模したサウンドが響いた。

カウンター上のレジ端末は、いちおう現金……つまりリアルマネーの出納も可能なのだが、その機能を使用することは月に一度あるかどうかだ。いまの時代、ほとんどの人間にとって、お金とはニューロリンカーが境界に表示する数字でしかなくなっている。電子マネーアカウトを銀行口座に連動させていれば、残高のチャージすら自動で行われるのだ。

しかし美早は知っている。赤毛の少女がタルトとアイスティーに支払った六百円は、学校から支給される少額の生活費を切り詰め、貯めたお金なのだということを。そしてこの土曜午後のティータムが、彼女が自分に許す、ほとんど唯一の贅沢なのだということを。

会計ウインドウが消えると、美早は胸中のさざ波を押し殺しながら言った。

「お時間少々頂きますので、テーブルでお待ちください」

「はい」

赤毛の少女はにこっと笑うと、店の一角に設けてあるイートイン・コーナーに歩いていった。小さな背中をす秒見送ってから、美早はレジカウンターの反対側にあるミニキッチンで紅茶の準備を始めた。(ラビリス)を食べられなかった代わりに、せめて美味しいお茶を飲んでもらいたかった。

三時三十分を少し回ったところで、運番のウェイトレスと交替してシフトを上がった。

店の奥にある、「スタッフオンリー」の札が下がったドアへと歩きながら、ちらりとイートイン・コーナーを見る。窓際のテーブルでは、とうにタルトを食べ終わった赤毛の少女が假想デスクトップに指を走らせていたが、視線を感じたのか顔を上げた。美早に気付くと軽く頷き、隣の椅子のランドセルを持って立ち上がる。

少女が、美早と一緒にバックヤードへのドアを通過しても、カウンターのウェイトレスたちは気にする素振りを見せなかった。店では、少女は美早の後輩で（これは事実だが）、毎週土曜の夕方に勉強を見てあげているということになっている。

バックヤードには事務室や洗面所と並んでスタッフ用の更衣室があるが、美早は素通りして突き当たりまで歩いた。四時まであと二十五分、のんびり着替えている暇はない。いちばん奥のドアの電子ロックを解錠し、先に少女を通してから自分も中に入る。

六畳ほどの洋間の中央に、ローテーブルとソファが置かれているだけの部屋だ。カフェ時代はちよつとした貸切スペースとして使用されていたのだが、ケーキ屋には必要ないため現在はデッドスペースになってしまっているのをいいことに、美早が私的に利用中というわけだ。

ドアが再施錠された途端、赤毛の少女が、これまでの優等生的雰囲気をかなぐり捨てて顔からソファに倒れ込んだ。白いソックスを穿いた両足をじたばたさせながら、「うううう」と

妙な唸り声を上げている。

美早は綻びかけた口許を引き締め直し、言った。

「……そんなに悔しがるくらいなら、食べればよかったのに」

すると、即座に子供っぽい喚き声が返る。

「悔しがつてねえー 毒への未練を運動エネルギーに変えてんのー」

最後に両足を勢いよく伸ばすと、ぐるんと仰向けになり、頭の後ろで両手を組む。

「……だいたい、悔しがつたらアレだ、チェリータルトを作った菓シェフに悪いだろ。タルトもすげーうまかったし」

「……そう」

と頷いただけの反応から、少女は敏感に察したようだった。頭を少し持ち上げ、光の加減で緑色にも見える大きな瞳でじっと美早を見る。

「もしかして、今日の（ラビリンス）、パドが作ったのか？」

ずばり訊かれれば、ごまかすわけにもいかない。表情を動かさないよう気をつけながら短く答える。

「飾り付けだけ。ジェノワーズはシェフが焼いた」

「……そっか。……悪かったな、譲っちまって」

上体を起こした少女が頭を下げようとするので、美早は急いで言った。

「凄らなくていい。むしろ、こっちがお礼を言わないと。レインがあそこで讀^よつてくれなければ、あの子たち、きっと泣いてた」

「子供は泣いて強くなるものです。——とか、薫^{カオル}シェフなら言いそうだけどな」

少女の受け答えに今度こそ少しだけ微笑^{ほくそ}みながら、美早^{ミハコ}はきっぱり宣言した。

「これからは、土曜の（ヘラピリンス）は全部私が仕上げる」

「お、じゃあ来週のお楽しみだな」

にやつと笑い、少女は結わえた赤毛を一振りすると表情を改めた。

「そんじや、そろそろ領土戦の作戦会議始めつか。今日は（ヘリックス）が攻めてくるっぽいからな、氣い抜くと食われるぜ」

「K」

短く答え、美早は一度の深呼吸で意識を切り替えた。ケーキシヨップのウェイトレスから、レギオン（プロミネンス）のサプリーダー、ブラッド・レバードへ。

ソファに座り、テーブルの裏側に据え付けられているホームルーターからXSIBケーブルを引き出す。この作戦室は電波シールドディングされているため、有線でないとタローバルネットに接続できない。

ブラダをニューロリンカーに接続すると、向かい側で同じようにした少女——プロミネンス頭首、赤の王スカーレット・レインこと上月由仁子^{トキノ}が、右手の指を二本立てて見せた。Vサイ

ンではなく、カウント開始の合図だ。

「2、1」

短めのカウントダウンに合わせて、美早は四年前に教わった魔法の呪文を唱えた。
「バースト・リント」

3

フルダイブ型対戦格闘ネットワーク・ゲーム、『フレイン・バースト2039』。

従妹のあきらが美早に与えてくれた、もう一つの世界。

子供の頃は、さしてフルダイブ型のゲームが好きというわけではなかった。父親と、たまにバイタレースのゲームで遊んでいた程度だ。だから、最初あきらにBBプログラムの概要を説明して貰った時も、正直あまりびんと来なかった。思考を加速してまで暴力的な格闘ゲームに興じることに何の意味があるのか、とさえ思った。

でも、そんな氣持は、最初に（加速世界）を訪れたその瞬間に吹き飛んだ。対戦相手は、もちろん（親）のあきら——バーストリンカーとしての名前は（アクア・カレント）——で、ステージの属性は（原始林）だった。

地形は住み慣れた練馬区板台のままなのに、コンクリートやアスファルトは綺麗に消え去り、代わりに飾くれた巨大な樹や奇岩、緑の草原、そして真つ青な空が視界の果てまで続いていた。

草一本、石ころ一つに至る全存在の圧倒的な精細さは、それまで美早が知っていたVR空間とはまったく違った。微風には森の匂いが含まれ、陽光は空気中の微粒子に反射してきらきら

と輝いていた。五感の全てを鮮やかに刺激する膨大な情報量は、現実世界以上とさえ言ってもよかった。

激変したのは外界だけではなく、美早自身も、あきらと同じように人ならぬ姿に変わっていた。プラスチックでもガラスでもない質感の、深紅の半透過装甲に全身を包まれ、手足には出し入れ可能な長い爪が生えて、そして頭は鋭い牙を持つ豹のそれだった。

己が姿を認識した時、美早は途惑いよりも先に強い衝動を感じた。解放したい——父親の病名を知った時から、ずっと心の中に押し込めてきたものを解き放ちたい、という。

美早は走った。原始林ステージの大地を、豹の両足で思い切り蹴り飛ばして走った。エリアの端から端まで、風さえ追い越すスピードで走った。走りながら泣いた。大きく、頼もしく、優しい父を思っ泣いて泣いた。

三十分の対戦時間が残り十分となる頃に、ようやく涙が溢れた。開始地点まで戻った美早は、じっと待っていてくれたあきらと無言で向き合った。

従妹もまた、現実世界とは似ても似つかぬ姿となっていた。驚くほど華奢な肉体を、上から下へと流れ続ける水の膜が包み込んでいるあきららのアバターは、美早の豹人アバターよりもいっそう特異でありながらどこか現実世界の彼女自身を思わせた。

美早は、流水の奥で揺らめくあきららの青白い両眼をじっと見ながら、ひとつだけ質問した。

——もっと速く走れるようになる？

答えはとてもシンプルだった。

——強くなれば。

四年前のあの日と同じ原始林ステージを眼下に望みながら、美早は戦いの始まる時を待っていた。

外見こそ一踏だが、通常対戦ではなく毎週土曜日の夕方に開催される〈領土戦争〉なので、個の戦闘力よりもチームの連携が重視される。普段のように、FIGHTの炎文字を突き破る勢いで速攻ダッシュするわけにはいかない。

と言っても、領土戦に於ける美早の作戦は基本的にシンプルだ。即ち、敵の急所を見極め、思い切り噛み付く。

深紅の豹人アバターに変じた美早は、ステージの西側で最も高い木の天辺に陣取っている。広く枝葉を伸ばす巨樹や、時折発生する濃霧のせいで見通しが悪いが、豹の鋭敏な視覚は木立の下のかすかな反射光も見逃さない。それに、ステージ中央を斜めに横切る草原地帯——現実世界では環八通り——には、姿を隠せるような大型オブジェクトはほぼ存在しない。

高さ二百五十メートルの梢から下界にじっと眼を走らせていると、少し低い枝で、焦れたような声が聞こえた。

「バドおし、もおこつちから打って出ようよう！」

発言したのは、ほっそりしたフォルムを持つ女性型アバターだ。名前は（マスタード・サルティンド）。

色名のマスタードは、全身のカラシ色装甲と関連づけてすぐに憶えられるが、固有名のはうは初対面のバーストリンカーはば全員が二、三度聞き返し、しかも次に会った時にもう一度聞く。美早も知らない英単語だったのだが、Salty（Salticid）とは（ハエトリグモ）のことなのだそうだ。その名のとおり、頭には丸く大きな単眼が八個、横一列に並んでいる。当然フェイスマスクの面積には収まらず、いちばん端の眼は後頭部にまで達する。

ゆえに視界が異常に広く――（前を向いていても後ろが見える感覚）に慣れるのにかなり手間取ったそうだが――、素敵能力はレギオンでも三本の指に入る。しかし惜しいかな集中力のほうはもうひと息で、まだ領土戦が始まってから五分も経っていないのに早くもサーチャングに飽きてきたようだ。

「まだ、敵の別動隊を見つけてから」

簡潔に答へつつも、視線を彼方の森に走らせ続ける。

領土戦は、最少人数三対三からのチームバトルだ。赤のレギオン、プロミネンスの所属メンバーは現在三十三人なので、練馬区四戦域の同時防衛でも一チームに八人を割り振れる。

しかしそれはあくまで理論値で、バーストリンカーが原則的に小、中、高校生である以上、土曜の夕方を必ず空けられるとは限らない。プロミネンスは頭首スカーレット・レインの方針

で、現実で用事があればそちらを優先していいことになっているので、毎週の参加メンバーは平均三十人弱。しかも今日——二〇四七年六月二十九日の領土戦では、予定外の実発的不参加者が三人も出たので、事前の会議に集まったのは二十五人に留まった。四チームに分ければ、六、六、六、七人だ。

もちろん、最も激しい戦いになるであろうエリアを事前に予測し、そこに十人以上を投入するという作戦も不可能ではないが、どんな予測も絶対ではない。とくに、ここ一ヶ月ほど毎週練馬を攻めてくる板橋の中規模レギオン（ヘリックス）のリーダーはなかなか頭が切れるので、攻撃エリアにヤマを張るのが難しい。

そこで、練馬第一と第四エリアに均等に防衛人員を配置し、第一エリア防衛チームのリーダーは赤の王白らが務め、第二エリアのリーダーは幹部集団（三獣士）筆頭のブラッド・レバード、第三エリアと第四エリアも同じく三獣士のカシス・ムースとシスル・ポーキエバインが指揮するという全方位防衛態勢を敷いた。そして、見事に美早のチームがヘリックスを引き当てた、というわけだ。

攻撃側の人数は防衛側に揃えられるので、敵味方ともに六人ずつ。この規模だと、チームを分けても二つかせいぜい三つだ。美早は戦闘力の高い四人を先行させて中央拠点の占領に向かわせ、眼のいい自分とマスタード・サルティンドで敵の動きを掴む作戦に出た。

ヘリックスもどうやら六人を二分割したらしく、主力であろう四人はすでに発見済み。こち

らの主力と同じく中央拠点——別名（要塞拠点）に直行しているの、隠れるつもりもないのだろう。問題は、別働隊の二人だ。これを見つけておかないと、味方主力が攻撃されて全滅も有り得る。

のだが、再び下からのんびりした声が聞こえた。

「でもおし、こっちが先に敵主力を挟み撃ちでツブしちゃえばあ、あとは要塞に引きこもってれば勝てるんじゃないのぉー？」

「それを言うなら（立てこもる）」

一応突っ込んでおいたものの、サルティンドの意見にも一理ある。プロミネンスは赤のレギオンと言われるだけあって赤系、つまり遠距離攻撃力に秀でたバーストリンカーが多く所属しているの、必殺技ダメージの複数人同時チャージが可能な要塞拠点に立てこもっての火力勝負は必勝パターンのひとつだ。

しかし当然リスクもある。要塞拠点は、ステージ属性にかかわらずオーブンスペースに刺さ出して設置されているため、敵から丸見えになってしまうのだ。拠点そのものに防衛能力はないので、立てこもり作戦を使う時は防衛系の能力を持つ盾役アバターが最低二人は欲しい。美早が先行させた主力四人の内訳は、赤系二人、青系一人、緑系一人とバランスは取れているが、拠点の全周防衛にはやや心許ない。

それに、敵チームにはヘリックスのレギオンリーダーがいる。浮いた作戦指揮で中小レギオ

ン群から頭一つ抜けてきた彼が、プロミの十八番である火約陣地戦術への対抗策を用意していないはずがない……。

そこまで考えた時、ステージ東側の森の中を走り続けていた敵主力の四人が移動を停止した。美早とサルティシドがいる高い木は、現実世界の練馬区光が丘清掃工場の大煙突だ。中央拠点のある環八通りと都道441号線の交差点までは、直線距離で二キロ以上もある。

これだけ離れていると、いかに豹の眼でも敵の数を判別するのがやっとだ。美早は敵別働隊の搜索を続けながら、下の枝に向かって問いかけた。

「シド、拠点の奥にいる敵四人、識別できる？」

「んー、ちよいまち」

答え、サルティシドは少しでも近づこうとするかのように首を伸ばした。数秒後、これまでとは打って変わってきびきびした答えが戻る。

「先頭が緑の大型、こいつは確か（バーダント・コロツサス）。後ろに茶色の大型、（シナモン・ラターン）だね。それと紫の中型、（アザレア・バトン）……かな。あと、最後尾に黄色の小型。初見だけど、たぶん（ルナル・チュック）」

「……………」

美早が小さく息を吸ったのと同時に、サルティシドも気づき、声を上げた。

「あれれっ！　ってことはあ、リーダーのベリ、やん、がないじゃないやん！　あの四人が主力じゃな

かったのか?」

もちろん、チームリーダーが常に主力部隊を率いる決まりなどない。プロミチームのリーダーたる美早自身、後方に残って敵をサーチしているのだから。

しかし、ヘリックスチーム六人の中では、リーダーの（ペリリウム・コイル）が突出した直接攻撃力を持っている。被抜き、しかもどちらかと言えばディフェンシブな色の部隊で中央拠点を制圧できると考えたのだとしたら、六レギオンの一角たるプロミネンスを紙めすぎというものだ。

……いや、切れ者のペリリウムがそんな大雑把な作戦を立てるとは思えない。となるとやはり、彼ともう一人——消去法でいけば（チリ・パウダー）という赤系アバター——の別働隊がプロミチームの主力を後方から奇襲し、一気に殲滅するつもりか。

しかし、だとすれば、その別働隊はすでに環八通りの草原を渡っていなくてはならない。プロミの主力四人は現在も前進中で、あと二分以内には中央拠点到達するだろう。これから草原を渡っても後方に回り込む時間はないし、といって広い道路の左右から接近すればプロミチームにも丸見えで、接触前に遠距離攻撃で体力ゲージを削られる。それではチームを分割した意味がない。

「……横断を見逃した……?」

美早が眩くと、耳聴く聞きつけたサルティシドが即座に反論した。

「まっさかあー！ あたしとバドの眼え盗んで環八渡るなんてムリムリー」

確かに、と頷く。隠れ身系の能力を使って草原地帯を突破した可能性はあるが、リーダーにも、同行していると思われるチリ・パウダーにもそんな技はない——はずだ。

断言できない理由は、デュエルアバターは成長するからだ。つまり、レベルアップ・ボーナスによるアビリティや必殺技、強化外装の取得。四年前は走ることしかできなかった美早も、レベル6となった今では多くの力を身につけている。

とは言えそこにも制限はある。アバターの色属性から大きく外れる能力は、原則として獲得できないのだ。リーダーのベリリウムは近接型のメタルカラーだし、チリは遠隔型。どちらも、美早とサルティシドの視力をこまかせるほどの隠れ身能力に目覚めるタイプではない。

そう考えながら、美早は脳裏に、何度が直接戦ったことのあるベリリウムの姿を思い描いた。装甲は青みがかった銀灰色で、バネの名のとおりに、腕に強力なコイルスプリングが内蔵されている。そのバネの力で瞬時に伸びる大型飛び出しナイフが、ベリリウム最大の武器だ。

メタルカラーだけあって拳も頑丈で、打撃属性のナックル攻撃と、斬撃属性のナイフ攻撃を自在に切り替える戦闘スタイルには美早も手こずった。パンチと思つて鋭そうすると瞬時にナイフが飛び出し、間合いが錯乱くも広がるのが実に厄介なのだ。しかも、昔は右腕にしかナイフを装備していなかったのに、レベルアップ・ボーナスで増やしたのだろう、いまは左腕にもナイフが——。

そこで思考を一時停止して、美早は視界右上に並ぶ敵チーム六名のミニ体力ゲージを再確認した。一番上にはリーダーのベリリウム・コイル。レベルは5。でも、前に戦った時は4だったはず。

「——シド、飛ぶ！」

脳内で幾つもの情報に化学反応を起こし、一つのインスピレーションを導いた瞬間、美早は叫んでいた。

普段はのんびりしているサルティシドも、いざとなれば頼れるベテランだ。驚いたり訳さ返したりすることなく、「らじやっ！」と美早の隣まで飛び上がる。

ハエトリグサの名を持つアバター、細い腰を右腕でしっかり抱くと、美早は体を屈めた。女性型としては相当にボリュームのある大脚部がいつそう膨張し、力を溜め込む。風向きを読み、ベストのタイミングで斜め上空に飛び出す。

いかにブラッド・レバードが野生の跳躍力を持っていると言っても、二キロをひとつ飛びにジャンプはできない。それ以前に、高さ二百五十メートルの樹から跳べば着地の衝撃に耐えられずに高所墜落ダメージで即死してしまう。

だが、美早に躊躇いはなかった。巨樹の梢から猛烈な勢いで飛び出したレバードとサルティシドは、一つの砲弾となって虚空を突き進む。東の中央拠点——ではなく、何もないステーション側に向かって。

美早は、ジャンプする前に百八十度反転していたのだ。もし観戦者がいれば、逃亡したのかと思つたところだろう。

無論、逃げるはずがない。跳躍はやがて放物線の頂点に達し、落下軌道へと入る。このままなら数秒後に撞つて墜落死だが、二人は途中で元の巨樹の方向に戻り始める。サルティンドが右手で掴んでゐる細く透明なケーブルに引つ張られてゐるのだ。ケーブルの先端は、元の大枝に固定されている。そこを支点に、あたかも振り子のように空中をスイングしているというわけだ。

ケーブルは、もちろんサルティンドの能力である。アビリティ（ドラッグライン）——すなわち蜘蛛の糸。本物のハエトリグモも、巣こそ作らないが移動中は（しおり糸）をあらかじめ固定し、墜落を防ぐという性質がある。

「いえ……いえ……」

陽気な声を発しながら、サルティンドは糸を少しずつ伸ばしていく。自由落下とはほとんど変わらない猛スピードで、二人は空中を滑走する。あつという間に振り子運動の下死点を通り過ぎ、上昇に転じる。理想的な角度を得られるタイミングで、糸を切断。

二人は再び斜め上方へと飛翔する。今度こそ、進行方向に草原となつた環八通りと中央拠点が見える。前基する味方四人は、あと数秒で森を抜けるだろう。彼らには、環八に到達したらそのまま拠点占領に移るよう指示してある。ベリリウムはきつと、四人が草原に姿を現した

瞬間に仕掛けてくる。尋らく横からでも、後ろからでもなく……………

「あつ…………バド、あれ！」

風音に負けないポリウムで、サルティンドが叫んだ。

指差す先、環八通りを挟んだステージ東部の奥地に、きらりと小さな反射光が見えた。森の底ではなく、上だ。美早たちと同様に、空中を高速移動している。

美早の視力では、光源の正体までは認識できなかったが、それがベリリウム・コイルとチリ・パウダーであることは疑いようもなかった。空中移動の原動力は、《飛行》ではなく——それが可能なアバターは加速世界になった一人しか存在しない——金属の弾性エネルギーだろう。つまり、バネの反作用を利用したロングジャンプ。

「…………変身して走る。掴まッて」

美早が言うと、サルティンドは「はいな」と応じた。美早たちの振り子ジャンプはすでに頂点を過ぎ、降下軌道に入っている。一度の跳躍で実に七百メートル近い距離を移動したが、中央の草原地帯まではまだ一キロ以上が残る。ベリリウムたちが四人の仲間を上空から攻撃する前に、何としても到着しなくてはならない。

眼下に迫る密林を凝視しながら、美早は小さく技名発声を行った。

「シェイプ・チェンジ」

途端、ブラッド・レバードを赤い光が包む。体の内側が燃え上がるような熱感。まず四肢が

猛烈のそれに變形し、選しさを増すと同時に鉤爪も伸びる。胴体は細く、長くなり、首と頸部の接合角度が変化する。

瞬時の《変身》が終了すると、美早はもう下型アバターではなく、一匹の豹となっていた。サルティンドが背中にもたがると同時に、木立の隙間に突入。みるみる地面が迫る。垂直の落下ではないとは言え、これほどの速度で着地すれば、普通は大ダメージを免れ得ない。しかし美早はいっぱいに伸ばした両手——ではなく前脚が地面に触れるや、そのままノーダメージで全力疾走に移行する。ビーストモードの時だけ発動できるアビリティ《落下保護》の力だ。「よっしゃあ、行っ……」

背中のサルティンドが、喚き声を途中で止めた。風圧で押されたのだろうか、後ろに傾いた体を立て直し、慌てたように両手を首に巻き付けてくる。

だから咽まわって言ったのに、という台詞は脳内だけに留めて、美早はいっそうスピードを上げた。呑むした巨木が左右をびゅんびゅんすっ飛んでいき、地面は緑と茶色が混ざった流線に変わる。だがまだ足りない。跳躍中に見た感じでは、バネジャンプで移動するベリリウム・コイルが中央に達するまであと二十秒。つまり美早は、千メートルをそれ以下の時間で走破せねば間に合わない計算だ。換算すれば、時速百八十キロメートル。

亡き父親は、イタリヤ製の真っ赤なエレクトリック・バイクに乗っていた。四年前からずっと馴染みのバイクショップに預けっぱなしだったそれを、美早が初めて自分で走らせたのはは

んの二ヶ月前だ。十数年前の道交法改正で、満十六歳になる年度の四月から免許証を取得できるようになったので、中学卒業と同時に教習所に通い詰めたのだ。

出力六十キロワットのインホイール・モーターを二基搭載するバイクは、スペック上の最高時速が二百四十キロメートルに達する。いまのところ美早は、幹線道路の法定速度である八十キロまでしか経験していないが、それでも最初は緊張で口の中が渴いた。

いかにVR空間の対戦ステージとは言え、障害物に衝突すれば苦痛とともに大ダメージを負う高速地上走行は、興奮と恐怖を同時にもたらす。スイングジャンプ中は威勢が良かったサルティンドも、今は美早の背中にびったり身を伏せている。

だが、美早は歯、いや牙を食い縛り、ありったけの力を振り絞って地を蹴った。体感スピードは瞬時に時速百キロに迫り、左胸の奥で仮想の心臓がとんでもない勢いで脈打つ。前時代の単気筒ガソリンエンジンのような連続的鼓動音が全身に響く。

それを意識した途端、美早の心中にもそろりと冷気が忍び込んだ。

美早のデュエルアバター、ブラッド・レバードを生み出した（心の傷）は、父親を奪った病氣への恐れと憎しみだ。それはすなわち、心臓というエンジンと、血液というフェューエルへの畏怖。自分の心臓も、ある日（鼓動の回数）を使い果たし、止まるのではないかという仄かな予感――。

――振り切れ!!

美早は強く念じた。

恐怖の渦で流むくらいなら、激しい流れに身を投じろ。先へ。一步でも、先へ。

走行スピードが時速百キロを超えた瞬間、右胸の奥に、もうひとつの鼓動音が生まれた。

二つのパルスが共鳴し、電動バイクを思わせる滑らかな咆哮へと変わる。全身を炎のように熱い血流が駆け巡り、四肢に猛々しいまでのパワーを滾らせる。

こっ！ と円錐状の衝撃波を広げ、美早は再加速した。深紅の砲弾と化して森の底を突き進む。スピードは一気に時速二百キロに達し、前方に現れた巨木が瞬時に後方へと飛んでいく。

視界左上では、必殺技ゲージが減り始める。限界を超えた高速走行を実現するアビリティ、「ファースト・ブラッド」が発動したのだ。強化外装を用いない自力走行で、これ以上のスピードを出せるデュエルアバターを美早は知らない。

ステージ中央を斜めに横切る環八通りまでの一キロメートルを十九秒で走破し、森から草原地帯へと飛び出すと、すぐ目の前に味方主力部隊四人の背中があった。要塞拠点を占領するべく、ひとかたまりになって前方の大型金属リングへと走っている。

「散開!!」

味方チームに向けて鋭く叫ぶや、美早は斜め上方へとジャンプした。味方を飛び越え、空を脱む。

見えた。数十メートルもの高みを飛翔するブルーシルバーのメタルカラー、ベリリウム・コ



イルと、その両腕に抱えられたオレンジレッドのアバター、チリ・パウダー。チリのほうも、伸ばした両手に大きな球体の一つずつ保持している。

次の瞬間、チリが両手を開いた。アバターと同色の球体が二つ、音もなく落下してくる。その軌道は、やつと散り始めたばかりのプロミネンスの主力チームを正確に捉えている。

「シドー」

美早が叫ぶと、背中のサルティシドーが「あいさ！」と右手を伸ばした。掌から発射された糸が、落下してくる球体の一つに見事命中。即座に糸を引っ張りつつ球体を振り回し、前方の森へと放り捨てる。

だが、もう一つの球体はどうにもできない。サルティシドーの糸は連射できないし、美早の爪も牙も届かない。味方が回避してくれることを祈りつつ、空中ですれ違ふ。

要害拠点のすぐ近くに着地し、振り向くのと同時に、赤い球体が地面に落下した。

爆発——は起きなかった。代わりに、毒々しいまでに赤い煙が瞬時に広がり、草原の一角を覆い尽くす。チリ・パウダーの必殺技、（レッドホット・グレネード）だ。死ぬほど辛い粉の詰まった手榴弾を投げ、その煙に巻き込まれたアバターの視覚と会話を阻害すると同時にダメージを与える。

阻害効果がくつついているぶん単純な爆発攻撃よりも恐ろしい技だが、いかんせん手榴弾なので、射程距離が短い。そのわりに効果範囲が広いので、投げたら本人も全力で逃避しないと

巻き込まれてしまう。しかもチリ・パウダー当人の防御力は低めなので、護衛つきで敵に接近し、手榴弾を投げたら護衛ともども一目散に逃げねばならない。

しかし、上空から不意打ちで投下、いや爆撃すればその制限は回避できるわけだ。敵ながら見事な作戦——ではあるが、しかし、この戦い方は……。

……いや、いまは集中！

眼前の戦場から逸れそうになった思考をすぐに立て直し、美早は指示した。

「シド、後ろから来る敵主力を牽制」

「らじやっ！」

背中からサルティシドが飛び降りるやいなや、美早は再びダッシュした。目指すは、ベリリウム・コイルの着地点。行く手の左側では、ようやく風に吹き散らされた赤い煙の中から四人の味方が飛び出してくる。全員、体力ゲージを一割弱減らしているが、グレネードの着弾直前に散開していたせいでどうにか直撃は免れたようだ。

「ロブとシモンは拠点の占領！ モス、アコンはシドと合流して敵主力と交戦！」

走りながら矢継ぎ早に指示すると、薄れてはいるがまだ消えない煙に躊躇わず突入。直前に眼を閉じ、視覚バファを防ぐ。全身に付着する微粒子によって体力ゲージが減少するが、ひりひりする熱感ごと無視する。すぐに煙を抜け、眼を見開くと同時に森に再突入。梢の向こうに、銀色の反射光を捕捉——。

あれほどの高さからのランディングには、いかにバネの緩衝効果があろうとも神経を使うはずだ。その隙を狙う。森のハンターたる豹の本領を発揮し、美早は静かに、しなやかに走る。

がきっ——と上空で枝が鳴った。

背を向けて降下してくるのは、間違ひなくレギオン（ヘリックス）の頭首、ベリリウム・コイルだ。視界を確保するためだろう、先刻は体の前にぶら下げていたチリ・パウダーを右脇に抱えている。

美早は大きく一歩、二歩と駆け、三歩目で跳んだ。

思い切りあざとを聞いた瞬間、何かを感じたのか、青灰色の装甲に覆われた背中が緊張した。しかし振り向く余裕はない。美早は空中でベリリウム——ではなくチリ・パウダーの右足に咬み付き、そのまま腕から奪い取ると、前方に抜けた。

「アウチッー ナニになにに？」

甲高い声で喚くチリの右足を、空中で一度解放し、改めて首筋に深々と牙を埋める。喚き声が悲鳴に変わるが、もちろん聞く耳は持たない。鋭い牙がオレンジレッドの装甲を突き破り、アバター素体まで到達すると、先の煙で減った美早の体力ゲージが回復し始める。アビリティ（撃活咬）の効果だ。

真っ赤なダメージ・エフェクトを鮮血のように進らせながら着地し、すぐさま振り向く。十メートルほど離れた場所、ちやうどベリリウムもランディングを決めたところだった。

予想通り、以前戦った時とは少し姿が異なっている。追加されたのは、両足のすね部分に内蔵された大きなバネだ。それをいっばいに縮めて着地の衝撃を吸収、反動で少しだけ飛び上がつてから再び地面に降り立つ。車やバイクのサスペンションと同様に、バネの戻りを制御するショックアブソーバー機構も内蔵されているようだ。

「ヘルプー！ リーダー、へるう……ふり」

首筋をがっちり咥えられたチリ・パウダーが手足を振り回しながら叫ぶと、ベリリウムは一瞬反応しかけたが、すぐに動きを止めた。美早があえて咬む力を緩め、とどめを刺さずにいることを見抜いたのだろう。《拳法技》の効果を維持したままベリリウムと戦えば、こちらだけ体力ゲージが回復し続けるという、牙が使えない制限を補って余りあるアドバンテージを得られるはずだったが、どうやら頭脳派の看板に偽りはないらしい。

「チリ、わりい。カタキは取ってやつから許せ」

両手の拳を構えながらベリリウムが言うと、チリ・パウダーは悲鳴を呑み込み、腹をくくったように答えた。

「……ゼツタイだかんな！ 後は任せたぜ、リーダー！」

こんなやり取りを聞かせられれば、いつまでも猫の子のように口にはぶら下げておくわけにもいかない。美早はひと思いにチリの首筋を咬み砕き、体力ゲージをゼロにした。アバターの消滅エフェクトに包まれながら、ベリリウム・コイルをひたと凝視する。

少し離れた要塞拠点付近では、仲間たちがヘリックス・チームの主力部隊と交戦しているはずだ。五対四の状況とはいえ、必ずしも戦力計算どおりの結果にはならないのがブレイン・バーストというゲームである。一刻も早くベリリウムを倒し、中央に駆けねばならないが、美早には戦う前にどうしても確認しておきたいことがあった。

「……さっきの作戦、あなたのオリジナル？」

低い声でそう問いかけると、ベリリウムはひょいっと肩をすくめた。次いで、逆三角形のゴードルが左右に振られる。

「悪いが違う。昔ああいいう作戦で大暴れしたヤツがいたっつう話聞いてさ。上空からの遠距離襲撃団攻撃、考えてみりゃ最強コンボだよな。ハマれば一発で勝利確定だと思ったけど……」

そこで一度口を閉じ、何かに気付いたように頷いてから続ける。

「そっか。さっきアンタが味方に回避指示できたのは、あの作戦を考えたヤツを知ってるからだよ」

問い返され、美早はそつと頷いた。

「知ってる。何度も戦ったから」

普通、〈親〉バーストリンカーがレギオンに所属している場合、〈子〉もそのメンバーになる場合がほとんどだ。

しかし、美早の場合はそれが難しかった。バーストリンカーとなった四年前の時点では、親の水見あきら——アクア・カレントは、黒の王ブラック・ロータス率いる（ネガ・ネビュラス）に所属していたのだが、当時の本拠地は現在の杉並ではなく渋谷エリアだったのだ。美早の暮らす練馬からはかなり遠いし、レギオンに参加する最大のメリットである（領土内での流入拒否権）も得られない。

そう教えられて遠惑う美早に、あきらはあっさりと言った。

「練馬を領土にしてる赤のレギオンに入ればいいの」

でもそうすると、将来的にはあきらと美早が戦わなければならなくなることもあり得るのでは、と聞くと、赤いフレームの眼鏡をかけた従妹はそれがどうしたのかと言わんがばかりに頷いた。

「その時は、お互い思いきり戦うだけ。きっと、それも楽しいの」

一つ年下のあきらの助言に従い、美早は赤の王レッド・ライダーのレギオン（プロミネンス）に加わった。正確には、無所属のまま戦い方を学んでいる段階で、向こうからスカウトされたのだが。

四年前にはまだ大レギオン間の相互不可侵条約は存在しなかったので、あきらの所属するネガ・ネビュラスと、美早の所属するプロミネンスは、渋谷と練馬の間にある杉並エリアの支配権を巡って盛んに領土戦争を繰り広げていた。

順調に経路を積み、レベル4に到達した美早は、ある日ついに領土戦への参加を指示された。八人チームの一員として杉並第二エリアを攻撃したのだが、敵チームにアタア・カレントの名はなかった。

残念なような、ほっとするような気持ちを経験していたのも束の間――。後方の拠点防衛を命じられた美早は、ふと見上げたフィールドの空にそれを見た。煉獄ステージの黒雲を切り裂いて飛翔する、空色のデュエルアバターを。

凄まじいスピードだった。当時の美早の最高走行速度、時速百キロメートルの三倍……いや四倍は出ていただろう。空の果てからあつという間に拠点の真上まで到達したそのアバターは、両手に小さな薄紅色のアバターを抱きかかえていた。そのアバターが両手で大きな弓を引き、一本の火矢が放たれた――と思った直後、その矢は無数に分裂し、プロミチーム四人の頭上に降り注いだ。

まさしく炎の雨というべき猛攻撃を懸命にかいくぐった美早は、超高速で北に飛び去る空色のアバターを追いかけた。もう一度同じ攻撃をさせてはならないという考えも少しはあったが、無我夢中で追ってしまったというほうが正しいだろう。

幸い、そのアバターは広い環七道路に沿って飛んでいたのも、ビーストモードの全力走行でどうにか追いつけた。背中に装着された大型ブースターの噴射炎が弱まり、ネガ・ネビュラスの二人は道路に面したビルの上に着地した。美早は歩道橋に駆け上ると近くの建物に飛び移

り、ジャンプを繰り返して二人のいる高さまで迫り着いた。

美早の接近にいち早く気付いた薄紅色の遠隔型アバターが、さっと仲間の後ろに隠れた。

ふわりと振り向いた空色のアバターをひと目見て、美早は胸を衝かれるような感覚を味わった。流体金属のように熔めきながら揺れるロングヘアと、たおやかなラインの女性型ボディという、ブラッド・レバードとは対照的な優美極まる外見にもかかわらず、そのアバターが自分とよく似た渴望を表象していることを強く感じたのだ。

一瞬の放心から立ち直り、豹の体を低く伏せて戦闘態勢を取る美早に向かって、空色のアバターはにこりと微笑みかけた。

「素晴らしいスピードね。フォームも、とても綺麗。名前は何？」

「……ブラッド・レバード」

美早が短く答えると、彼女はひとつ頷き、自分も名乗った。

「覚えておくわ。私はスカイ・レイカー。そしてこの子はアーダー・メイデン」

それが、当時すでに「ICBM」と呼ばれて恐れられていたネガ・ネビュラスのサブリーダー、スカイ・レイカーと、まだほとんど新人だったにもかかわらずレイカーとコンビを組んで大きな戦果を上げていた「緋色弾頭」アーダー・メイデンとの出会いだった。

美早はレイカーと戦い、舞うように美しい掌打の三連撃を浴びて手も足も出ず散った。

あれから、もう四年近くが経つ。美早が永遠の目標にしてライバルと定めたスカイ・レイカ

ーは、二年半前にいちど加速世界から姿を消し、二ヶ月前に新生ネガ・ネビュラスのメンバーとして復帰した。

いまでは、ネガ・ネビュラスだけでなく、プロミネンスも代替わりしている。岡レギオンは無期限停戦条約を結んでいるので、まだスカイ・レイカーと直接対戦する機会は得られていない。しかし、もうすぐその時がくることを美早は予感している。加速世界を覆う暗雲が払われ、レイカーと同様に半引退状態にあるアクア・カレントも帰還したその時こそ、《義》と《好敵手》にいまの自分の全てを見てもらうのだ。研ぎ上げた牙の鋭さと、磨き抜いたスピードの切れ味を。

——だが、よもやレイカーと戦う前に、他のバーストリンカーによるコピー戦法を見ることがなるとは思っていなかった。

ペリリウム・コイルの研究熱心さを褒めるべきか、先達の模倣を躊躇わない厚顔さに怒るべきかと半秒ほど迷ってから、美早は無表情に言った。

「残念だけど、オリジナルのほうが三倍痛くて五倍速い」

「ま、そうだな」

細身のメタルカラーも平然と頷くと、ゆるりと両腕を構えた。

「でも、あんたとのレベル差はたった一つだ。今日こそタイマンで勝たせて貰うぜ。……お互

い仲間を待たせてる身だし、そろそろ始めつか」

「K」

短く答へ、美早もすつと上体を沈める。

原始林ステージ最大の特徴は、無制限中立フィールドの（エネミー）なみに強力な大型生物が棲息（せいそく）していて、刺激（しき）すると攻撃（こうげき）してくることだが、中央拠点（ちゅうおうきょてん）の周囲一キロ以内に連中の姿がないことは偵察中に確認している。それ以外は特に面倒（めんどう）な阻害効果（そくがいこうか）はないので、ここからは純粋（じゆんすい）に互いの技術（ぎゆ）だけで決まる勝負だ。

戦闘（せんとう）前に、無為（むゐ）な観（かん）み合いを続けるのは好きではない。一思（ひと）いに飛びかかろうとした、その瞬間（しゆんくは）に気付く。ベリリウム・コイルの身長が、最初（はじめ）に対峙（たいし）した時よりも少し縮んでいるように思える。理由は――両脚（りやうきゃく）に内蔵（ないざう）されたスプリングが、きりきりとかなかな音を立てて今も縮んでいるからだ。

前に飛び出しつつある体を無理やり右に捻（ひね）り、美早はジャンプの軌道（きだう）を変えた。まったく同時に、ベリリウムの両脚（りやうきゃく）がびんっ！と鳴り、青灰色（せいこくし）のアバターはほぼノーモーションで突進してきた。踏み込み、地面（じめん）を蹴（け）る代わりに、バネの反発力（はんぱつりき）を利用したのだ。

「リャアッ！」

左腕（ひだりうで）が、これもコンバトな情（なさけ）えから突き出される。メタルカラーの拳（こぶし）による打撃（うちげき）をカウンターで喰（く）らえば、赤糸（せきいと）にしては高い防御力（ぼうえりき）を持つ美早とてかなりのダメージを受ける。

だが、ビーストモード時は体高が一メートル以下しかないブラッド・レバードにパンチを出てるのは至難の業だ。ベリリウムは腕をアッパー気味に振って軌道を下げてきているが、美早は更にその下に体を滑り込ませ、回避――

ビインッ！ と再び空気が震えた。銀色の光が美早の視界に閃く。ベリリウムの腕に内蔵されていた大型ナイフが、バネの力で瞬時に飛び出したのだ。アビリティィ（ジャックナイフ）。

この技の存在を失念していたわけではもちろんない。しかし、ナイフが収納状態から百八十度回転する動きをも攻撃に組み込んでくるとは予想していなかった。回転の途中で、長さ四センチのブレードは、ほんの一瞬だが腕から垂直に立ち上がる形となる。ベリリウムは、その一瞬を、美早の回避モーションに見事合わせてきたのだ。

――お見事。

脳内で吹き、美早は更に頭を右に捻った。

もし人型だったら、ナイフブレードを回避または防衛する手段はなく、顔面に大ダメージを負っていただろう。即死はしなくとも、アイレンズの片方を失って視界を半減させられていたかもしれない。

だが獣型に変身している今、美早には四肢の爪を上回る強力な武器がある。しかも、ナイフが狙っている頭部に。四本の、硬く鋭い牙。

もちろん、タイミングがほんの一ミリ秒遅くても早くても、迎撃に失敗して大きなダメージ

を受けるだろう。だが美早は、走ることだけが速きではないことをすでに知っている。利那の世界にだけ存在する（スピードの戦い）もある。

二ヶ月間、高校生になったばかりのある日、美早は思いがけないバーストリンカーとタッグを組んで戦うことになった。場所は、秋葉原エリアに存在する対戦者の聖地（アキハバラ・バトル・グラウンド）。敵は、マツチングリストを遮断するというルール無視の力を持つ（ラスト・ジグソー）。そしてバートナーは、新生ネガ・ネビュラスのメンバーにして加速世界唯一の完全飛行型アバター、（シルバー・クロウ）。

最初は少々頼りない印象を受けたが、いざ実戦となると、クロウはバーストリンカーになって半年とは思えない対戦勘を発揮した。

敵のラスト・ジグソーは、高速回転する糸鋸のリングを投射するという厄介な遠隔攻撃技を持っていて、美早にもそれを防御する手段はなかった。ジグソーに飛びかかる寸前、不可避のタイミングで回転鋸を投げつけられ、美早はその対処を背中に乗せたクロウに指示した。

本当は、腕を一本犠牲にして防いでくれれば上出来、と思っていたのだ。

しかしクロウは、リングの内側には鋸歯が存在しないことを見抜き、超高速で飛来する回転鋸を輪投げの要領で指に引っ掛けて、無傷で受け止めてみせた。タイミングが一瞬でも狂えば、指が首のどちらか、または両方が飛んでいたはずだ。

あの時美早は、アバターの動作だけでなく（感覚のスピード）を競う戦いもあるのだと、三年以上も後輩のシルバー・クロウに教えられた。

以来、対戦する時は常に、感覚の加速……つまり見切りの力を磨く練習をしてきた。不思議なもので、利那の感覚が鋭くなるほどに、現実世界でケーキをデコレーションする時の迷いや躊躇いも消えるようだった。（母のラビリンス）の仕上げを伯母に褒めて貰えたのも、きっとそのお陰だろう。

いまこそ、二つ年下の、頑張り屋の少年に教わったことを加速世界の戦いに活かす時だ。

最小限開いた口に、視覚でも聴覚でもない感覚でナイフの接近を感じた瞬間、美早は思い切り牙を噛み合わせた。

バキイイイン！ と強烈な金属音が響き、ブレードの破片が顔の左右にきらきらと散った。鋭く鋭い牙が、狙い違わずナイフの側面を鋭え、噛み砕いたのだ。

「んがっ……」

ベリリウム・コイルの口から驚愕の声が漏れる。左アッパーが空振りし、わずかに体勢が崩れた瞬間、美早は長い尻尾を鋭く振った。先端がベリリウムの左膝を引っ掛け、更にバランスを狂わせる。

すれ違い、着地するや否や、美早は大きく前方に跳んだ。正面の木の幹を足場にして、後方

に宙返りジャンプ。

逆さまになった視界に、倒れ込むベリリウムが見えた。両脚のバネは再び圧縮されつつあり、もう一度（スプリング・ダッシュ）で距離を取るつもりだろうが、そうはさせない。

ぐるうつ！ と喉から野獣の咆哮を送らせ、美早は両前脚でベリリウムの背中を押し倒すと、無防備な首筋に深々と噛み付いた。牙が火花をまき散らしつつ金属装甲を穿ち、アバター素体をも貫く。

「いっつ……ん、このっ……」

ベリリウムは右手の飛び出しナイフを展開すると、それで背後の美早を攻撃しようとした。しかしその寸前、美早は呟えたデュエルアバターを思い切り振り回す。いっそう深く牙が埋まると同時に、ナイフの軌道も逸れる。

中型以下の近接型アバターであれば、ブラッド・レバードに接ろから首に噛み付かれた場合、その状況から逃れる手段は無いに等しい。あたかも、野生の豹に仕留められた獲物のように。

美早は、ベリリウム・コイルをぶら下げたまま、東へと走り始めた。

「ちっくしょ、ネコの子じやねーぞー」

（ヘリックス）のリーダーは喚きながら手足をバタつかせるが、かすり傷以上のダメージは与えられない。懸命に削った美早の体力ゲージも、即座に（奪活咬）の効果で回復してしまう。いっぽう、急所を四本の牙で穿たれたベリリウムの体力ゲージはみるみる減少していき――

森から草原地帯に飛び出した直後、ゼロになった。

「見てろよ、次は……」

という台詞を最後まで言えずに、無数の破片となって消滅したベリリウム・コイルに向けて、美草は眩いた。

「次はもうひと工夫してきて、GG」

言ってから、その挨拶は少し早かったと思ひ直す。視線の先、要塞拠点の周辺ではプロミネンスの五人とヘリックスの四人が、いまだ激戦を繰り広げている。チリ・パウダーに続いてリーダーのベリリウムも退場し、ゲージ残量でも押されているが、敵はまだまだ勝負を投げるつもりはないようだ。

ならば、こちらも全力で相手をするまで。

仲間たちを鼓舞するためにひと声吼えてから、美草はフルスピードで緑の草原を駆けた。

六月第五週の領土戦争が全て終了し、(パティスリー・ラ・ブラージュ)一階奥の専用室に帰還した美早は、胸に溜まっていた空気をゆっくりと吐き出した。

加速対戦中も、生身の体はもちろん呼吸している。領土戦をフルに戦えば現実時間では一・八秒が経過するので、(バーストリンク)コマンドの発声とともに排気した肺が、次に空気を吸い終えたあたりで覚醒することになる。

新米の頃は、現実世界に戻った直後に、息を吐く前に思い切り吸おうとして咳き込んでしまうことも多々あった。(親)のあさらは、対戦の間じゅう走りっぱなしだからだと呆れ顔で言ったが、それももう昔のこと。

あさらとは、もう三年近くにわたって対戦も共闘もしていない。かつての、渋谷を本拠としていたネガ・ネビュラスの崩壊……いやその前夜の、黒の王ブラッタ・ロータスによる赤の王レッド・タイダーの全捕事件を境に、たくさんのもが 바뀌ってしまった。

《純色の七王》の一人として絶対的信頼を寄せられていたレギオンマスターが突如加速世界から退場するという異常事態に、プロミネンスは大混乱に陥った。システム的なマスター権限は当時のサブマスターに自動委譲されたものの、メンバーの約半数が、彼がそのまま二代目の頭

首となることを受け入れようとしなかったのだ。

まともを欠くまま次の領土戦を連え、プロミネンスは惨敗を喫した。他の王のレギオンはどこも攻めてこなかったのに、人数でも平均レベルでもゆうに優る中小レギオン相手に次々と星を落としたのだ。一夜にして領土は半減し、脱退宣言するメンバーも少なからず出た。激昂した暫定マスターが、とうとう脱退者の一人に対して（断罪の一撃）を行使するに至り、プロミネンスの分裂は決定的となった。

一年と少しのあいだ所属したレギオンの崩壊劇を、美早は少し外側から空しい気分で見守った。

赤の王レッド・ライダーのことは、ほとんど喋ったこともなかったにせよ、強く公正なマスターとして信頼していたし、彼の下で戦うことにまったく不満はなかったが、しかし古参メンバーのように心酔するまでには至らなかった。

だから彼の退場に関しても、戦いに敗れた結果なのだと冷静に受け止めていた。それに、たとえバーストリンカーとして死んでも、当然ながら現実世界の命までは奪われない。美早の父親のように、二度とバイタにも乗れないし好きなコーヒーも飲めないというわけではないのだ。そんなふうに考えてしまう自分は、たぶん情が薄いのだろうと美早は思った。プロミネンスには所属したままだったが、新しいマスターはあまり好きになれなかったし、このままならいずれ自分も脱退するかもしれないとさえ予感していた。

それが変わったのは、戦国時代の様相を呈してきた練馬エリアで、必死に自分と数人の仲間を守ろうとしている新米リンカーを見た時だった。

まだまだレベルも低く、戦い方は粗削りのひと言だった。が、気迫だけはステージ全体を焼き焦がす炎のように熱かった。この混乱を生き延びれば、きっとあの子は強くなる。そう感じた美早は、自分でも不思議だったが、自ら彼女のチームへの合流を申し出た。

直感では正しかったが、よもやその小柄な少女型アバターが、〈強くなる〉どころか、わずか一年でレベル8の壁を突破して二代目赤の王の座に就こうとは、当時は思いもしなかった……。

「……ヒトの顔見て、なに笑ってんだよバド」

正面に座る赤毛の少女、赤の王スカーレット・レインこと上月由仁子がきゅっと唇を尖らせるので、美早は素早くかぶりを振った。

「ニコを見て笑ったわけじゃない」

「へえ？ なら〈ヘリックス〉に勝って会心のスマイルか？」

「……そういうわけでもない」

「なら何なんだよ。……べつに、言いたくなきゃ言わないでいいけど」

子供のように——実際まだ小学六年生なのだが——すねた顔でソファに背中を預けるニコに、美早は少し考えてから答えた。

「対戦の間に、色々思い出したせい。ずっと昔のこと」

「ふうん……………」

ニコは軽く首を捻ったが、すぐに頷き、自分も微笑みながら言った。

「そっか。思い出して笑顔になれる思い出って、いいよな」

「……………」

今度は美早が、思わず問いかけるような視線を向けてしまう。するとニコは美早の内心を読んだかのように、微笑を苦笑に変えた。

「んな顔すんなよ、あたしにもそういう思い出くらいあるんだよ。バドがいちばん最初に声かけてきた時のセリフとかな」

「それは忘れていい」

「やーだねっ、永久保存済み！」

あははっと笑い、ニコは表情をレギオンマスターらしく改めると、口調も少し変えて言った。
「ともあれ、今週も防衛お疲れ様。ヘリックス戦はどんな感じだったんだ？」

「リーダーもメンバーも着実に強くなってる。それに、研究熱心」

「そうか……。——こっちは例のISSキット騒ぎでゴタついてるからなあ、来週はちっと引き締めていかないと危ないかもな。今日は参加人数もなんか少なめだったし」

「その話だけど」

美早も真剣な表情を作ると、じっとニコを見ながら言った。

「今日の土曜場不参加メンバーについて、少し問題が」

「ん？ なんだ？」

「全員じゃないけど、たぶん三人、指示を無視して他のレギオンに攻め込んだ」
途端、ニコの両眼がすっと細められる。

「……誰だ？ それと、どこにだ？」

「フレイズ・ハート」と、他「名」侵攻先は……杉並の、ネガ・ネビュラス」

「な……ンだとお？」

勢いよく立ち上がり、テーブルの端にすねをぶつけて、あたっ！と悲鳴を漏らしつつ再びソファに倒れ込む。目尻に涙を浮かべながらも厳しい表情は崩さず、ニコは言った。

「そりや休戦協定破りじゃねーか！ なんでまた——……って、ああ、そうか……昨日の、あの一件か……」

美早は頷いて同意を示した。

「多分、黒の王に直接確認に行っただと思う。フレイズは、先代プロミネンスからの継続メンバーだから」

「…………ううーん、そりや気持ち解らなくもねーけどさあ、昨日無制限フィールドでデコッカイ出してきたアイツは多分、いや八割がたロータスのパチモンだぜ。だから情報集める

まで待てつつつたのに……」

「攻めてしまったものは仕方がない。多分、いえ八割がた撃退されたらもうけど」

「九割がた、だな。つうかもし黒い、ののいるチームに勝ったんならむしろ褒めてやりてーくらのモンだけだな」

頭首の呑気な台詞について苦笑してしまってから、美早は咳払いして話題を戻した。

「勝っても負けても、協定破りについて筋を通しておく必要がある。私がこれから杉並まで行って、黒の王に直接謝罪を……」

「ん、ん、ちよい待った」

びしっと右手を上げて美早の言葉を遮ったニコは、一秒ほど視線を天井に向けてから、口許をにんまりさせた。(いいこと思いついちゃった)の顔だ。

「……ソレ、あたしが行ってくるよ」

「……………」

「はら、こういうのはリーダーが自ら出向いたほうが重みが増すってモンだろ」

「……………」

「それに、どうせ明日はあいっらんとこのガッゴの文化祭に乗り込む予定だったじゃん？ ついでついでー」

「……………明日のついでを今日済ませるつもり？」

美早がほんの少し上目遣いになって誤ねると、赤の王は悲びれずにニシシシと笑った。

「今夜はあいつん家に泊まっから、明日の朝迎えにきてくれ。バドのぶんの文化祭チケットもばっちりダットしとくぜー」

「……………よろしく」

目頃のニコはどちらかと言えば慎重激なのだが、ことネガ・ネビュラス絡みだとやけに行動的になるのは今に始まったことではない。美早が色々呑み込んで鎮くと、ニコは勢いよくソファから飛び降り、さっそく移並に向かうつもりか床からランドセルを持ち上げた。

「荷物は預かっておくから、明日の帰りに回収すればいい」

「お、悪いな。じゃあお言葉に甘えて」

ランドセルをソファに置き、小走りにドアに向かう。ノブに手をかけたが、すぐには聞かずに振り向くと――幼き王は、無邪気さと大人っぽさが等しく存在する笑みを浮かべ、言った。

「バド、来週の（ラビリンス）、楽しみにしてっからな」

「K」

美早の返事に笑顔のまま頷き、ひらりと手を振ると、ニコはドアを開けて出ていった。

足音が消えるまで待ってから、美早も立ち上がった。

パーストリンカーになってから四年。真に仕えるべき主を見出してから、三年。

数え切れないほどの対戦を繰り返し、レベルを上げ、昔とは比べものにならないほど速く走

れるようになったが、美早はまだ自分のスピードに満足していない。

恐れから逃げ続けるために走る段階は、そろそろ突き抜けねばならない。次のステージに行くために。今よりも速くなるために。そして、大切な人、大切なものを守るために。

右手を持ち上げ、軽く握る。指先に、血液の動きを感じる。とくん、とくん、と一秒に一度のバルス。父親の直接の死因は、心筋症を原因とする突発的な心室細動だ。脈拍が毎分二百回を超え、燃え尽きるように止まり、二度と動くことはなかった。

特発性拡張型心筋症の発症原因には、わずかながら遺伝的要素も存在する。だから、いつか美早も同じ病気に冒され、心臓に異常をきたす可能性はある。でも、そればかり怖れていてはどこにも行けないことを、化身たるブラッド・レバードが教えてくれた。

血を燃やせ。怒濤の如く全身に巡らせろ。

前だけを見て走り続けるのだ。草原をしなやかに駆ける豹のように。

美早は、右手でニコのランドセルを持ち上げると、しっかりと抱えながら作戦室を出た。

(終わり)

あとがき

アタセル・ワールド18巻『黒の双剣士』をお読み下さりありがとうございます。

まずは、まだしても前巻から八ヶ月お待ちさせていただきましたことをお詫びいたします。次巻は以前のペースでお届けできるようがんばりますのでお許し下さい！

さて、この18巻で、ようやく最後の〈四元素〉ことドラファイト・エッジが登場し、第一期ネガ・ネビュラスの幹部がそろい踏みしました。もともと黒雪姫や楓子たちは再会にきたる感慨もないようですが……（笑）。物騒とか立ち位置とか必殺技の名前とか、色々と胡散臭いドラフさんですが、貴重な男性キャラクターですので応援よろしく願います！

話は変わりますが、これまでアタセル・ワールドは原則的に主人公ハルユキの三人称単視点で書かれてきました。しかし単視点ということは、（ハルユキが見たり聞いたりしたことしか書けない）ということでもありまして、キャラクターの増加に伴って複数のシーンが同時進行する場面も増えてきますとハルユキ視点だけではどうしてもお話が回らず、15巻あたりからは視点キャラクターが追加されています。これまでは黒雪姫、バドさん、マゼンタ・シザーこと小田切黒の主観シーンがあったのですが、この巻では更に四葉高嶺と、シヨコラ・バベッターこと奈胡志帆子の主観シーンも追加されました。

書けることが増える、ということとは書かなければならないことも増えるわけで、物語を先に進めるためにはあまり視点キャラを増やしたくはないのですが、いっぽうで新しい視点は書いていてなかなか楽しくもあります。とくに志帆子たちブチ・バケ三人組のシーンは、いままでやったことのない日常系コメディ・ラノベっぽいノリが自分でも新鮮でした（笑）。機会を見つけてまた彼女たちのパートを、もう少し長めにやってみたいと思っています。

物語のほうは、いよいよ（と言うかようやくと言うか……）《帝城》《加速研究会》という物語の二本柱の決着に向けて進んでいきます。いままで無軌道にバラ撒きまくってしまった伏線の数々をがんばって回収していくつもりですので、皆様もどうぞお付き合いのほどよろしくお願いいたします！

また、前巻と同様にこの巻にも、テレビアニメ版アタセル・ワールドのBD&DVDの特典として書き下ろした短編、「紅炎の軌跡」が収録されています。許可して下さった関係者様、またアニメ版を応援して下さい下さった皆様にも、改めてお礼を申し上げます。

今回初登場のリアル版ブチ・バケ三人娘とコバマが姉妹をとつてもかわいく描いて下さったイラストのHIMAさん、あれやこれやの調整や交通整理に腐心して下さい下さった担当の三木さんもありがとうございました！ それではまた19巻でお会いしましょう！

二〇一五年四月某日

川原 礫

「これは、ゲームであっても

天才プログラマー・夢場品彦

「暗黒神より全軍に告ぐ。
あの騎士を、《光の巫女》を無傷で捕らえるのだ。
捕らえた軍には、《人界》全土の支配権を与える」

電撃文庫

ソードアート

最新第16巻は、
電撃文庫にて2015年8月8日発売!!!

特報!!! 「アクセル・ワールド19」は
2015年冬頃発売予定!!!

● 川原 礫 著作リスト

「アクセル・ワールド―黒雪姫の奇譚―」 (電撃文庫)

「アクセル・ワールド2―紅の暴風雨―」 (同)

- 「アタセル・ワールド3」――夕陽の略奪者―― (同)
- 「アタセル・ワールド4」――蒼空への飛躍―― (同)
- 「アタセル・ワールド5」――星影の浮き輪―― (同)
- 「アタセル・ワールド6」――浄火の神子―― (同)
- 「アタセル・ワールド7」――交響の鐘―― (同)
- 「アタセル・ワールド8」――運命の流星―― (同)
- 「アタセル・ワールド9」――七千年の誓り―― (同)
- 「アタセル・ワールド10」――幻の楽園―― (同)
- 「アタセル・ワールド11」――超魂の集―― (同)
- 「アタセル・ワールド12」――氷の統軍―― (同)
- 「アタセル・ワールド13」――太陽の号火―― (同)
- 「アタセル・ワールド14」――激光の天天使―― (同)
- 「アタセル・ワールド15」――終わりと始まり―― (同)
- 「アタセル・ワールド16」――白雪姫の魔陣―― (同)
- 「アタセル・ワールド17」――星の揺りかご―― (同)
- 「アタセル・ワールド18」――星の文明士―― (同)
- 「ソードアート・オンライン1」――アインタラッド―― (同)
- 「ソードアート・オンライン2」――アインタラッド―― (同)

「ソードアート・オンライン3 ファムアリイダンス」 (同)

「ソードアート・オンライン4 ファムアリイダンス」 (同)

「ソードアート・オンライン5 ファントム・パレアド」 (同)

「ソードアート・オンライン6 ファントム・パレアド」 (同)

「ソードアート・オンライン7 マギーズ・ロザリオ」 (同)

「ソードアート・オンライン8 アーリー・アサルト・レイト」 (同)

「ソードアート・オンライン9 アリスゼーション・ビギニング」 (同)

「ソードアート・オンライン10 アリスゼーション・ラビリンス」 (同)

「ソードアート・オンライン11 アリスゼーション・カーニバル」 (同)

「ソードアート・オンライン12 アリスゼーション・ライジング」 (同)

「ソードアート・オンライン13 アリスゼーション・グレイバイディング」 (同)

「ソードアート・オンライン14 アリスゼーション・ユナイティンク」 (同)

「ソードアート・オンライン15 アリスゼーション・インベーターディング」 (同)

「ソードアート・オンライン プログレッシブ1」 (同)

「ソードアート・オンライン プログレッシブ2」 (同)

「ソードアート・オンライン プログレッシブ3」 (同)

「絶対ナル孤独者1 ― 孤獨者「The Diver」 ―」 (同)

「絶対ナル孤独者2 ― 絶大者「The Master」 ―」 (同)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
<http://dengekibunko.dengeki.com/>

※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先

〒 102-8584 東京都千代田区有士見 1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「川原 礫先生」係

「HIMA先生」係

『風の双剣士』——書き下し

『紅炎の軌跡』——アニメ『アクセルワールド』Blu-ray&DVD第8巻初回限定版

特典(2013年2月)

この物語はフィクションです。実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

アクセル・ワールド18

—星の双剣士—

かれはら れき
川原 礫

発行 2015年4月10日 初版発行

発行所 塚田正晃
株式会社KADOKAWA
〒102-8377 東京都千代田区富士見 2-13-3

プロデュース アスキー・メディアワークス
〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19
03-5204-6399 (編集)
03-3228-1854 (営業)

装丁者 装幀協司 (METTA + MANIERA)

印刷・製本 旭印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配付は、著作権法上での刑罰を除去されています。また、本書を代行販売などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

無断で一部または全部を転載いたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークス 18番へお寄せ窓口までにお送りください。

盗刷小冊子等にはお取り替えいたします。

併し、古書店で本書を購入されていへる場合はお取り替えできません。

複製権はカバーに表示してあります。

©2015 REKI KAWAHARA

ISBN978-4-04-865189-9 C0193 Printed in Japan

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで「小さな巨人」としての地位を築いてきた。古今東西の名書を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times.Changing Publishing)時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

アクセル・ワールド1

―黒雪姫の帰還―

川原 礫

イラスト／H-M-A

《黒雪姫》と呼ばれる少女との出会いが、デブでいじめられっ子の未来を変える。ウェブ上でカリスマ的人気を誇る作家が、ついに筆をふる（文責） 星 貴一

か-16-1 1716

アクセル・ワールド2

―紅の暴風姫―

川原 礫

イラスト／H-M-A

デブでいじめられっ子の少年・ハルユキの人生は、黒雪姫との出会いによって一変した。そんな彼のもとに、「お兄ちゃん」と呼ぶ見ず知らずの少女が現れては

か-16-3 1775

アクセル・ワールド3

―夕顔の暗闘者―

川原 礫

イラスト／H-M-A

「ゲームオーバーです、有田先輩……」ハルユキのバークロウ。黒雪姫不在の中、スクールカーストの頂点に立った転入生、圧倒的な力の前に、ハルユキは倒れ……

か-16-5 1834

アクセル・ワールド4

―蒼空への飛翔―

川原 礫

イラスト／H-M-A

「ここから、もう一度這い登ってみせる。僕はもう、下だけ向いて歩くのはやめたんだ」翼をもがれたシルバークロウ。ハルユキが、ついに復活する――

か-16-7 1899

アクセル・ワールド5

―星影の浮き橋―

川原 礫

イラスト／H-M-A

とある時、ハルユキは新たなゲーム・ステージ出現の異変を知り、《宇宙》ステージ、そこに降り着いたハルユキは、歴史的なゲームイベントを体験する――

か-16-9 1953

アクセル・ワールド6 ―浄火の神子―

川原礫

イラスト／HIMA

〈災禍の想〉に侵されていたハルユキは、黒雲姫以外の大王から、〈浄火〉の命令を下される。その鍵を握るアバターは、意外な場所に見出されて……。

か16-11 2018

アクセル・ワールド7 ―災禍の鎧―

川原礫

イラスト／HIMA

〈奇襲〉に閉じ込められた〈シルバー・クロウ〉。脱走不可能と思われるところで、ハルユキは不思議な夢を見る。それは、〈災禍〉にまつわる二人の物語……。

か16-13 2082

アクセル・ワールド8 ―運命の連星―

川原礫

イラスト／HIMA

思わわしき強化料薬（ヘーダスキット）に蝕まれ、親友同士で戦うことになったタクムとハルユキ。人の心霊が強く共鳴し合い、激突する……！ その果ては？

か16-15 2135

アクセル・ワールド9 ―七千年の祈り―

川原礫

イラスト／HIMA

再び〈クロム・ディザスター〉となったハルユキ。滅ぼすべき敵を求めて〈加速世界〉を脱走する。そして、その最前線に〈神意〉のアバターの姿が立ちよみがかり……。

か16-17 2202

アクセル・ワールド10 ―Elements―

川原礫

イラスト／HIMA

ハルユキが新人生の扉扉に巻き込まれていたころ、黒雲姫は特殊飛行士の沖縄で、不思議なアバターから対戦を仕掛けられていた……。書ききりしつむ二編収録。

か16-18 2238

アクセル・ワールド 11

— 超硬の狼 —

川原礫

イラスト／HIMA

打倒（加藤研究会）で導き出された結末とは、シルバー・クロウの新アビリティ（超硬鋼鋼）種神作戦だった。狼の狼（レベル）アバターも登場、いったいどうなるか。

か-16-20 2307

アクセル・ワールド 12

— 赤の紋章 —

川原礫

イラスト／HIMA

神獣級エネミー・大天使メタトロン攻撃アビリティの習得とシンクンに挑むハルユキ。そこに立ちふさがる強敵アバター・サーベラスとの戦いは意外な結末を導く……

か-16-22 2376

アクセル・ワールド 13

— 水際の号火 —

川原礫

イラスト／HIMA

メタトロン 打倒を目指すハルユキたちの戦いの舞台は、リアルワールド／梅郷中学校文化祭へー 加藤世郎に復活を促めんとする「マゼンタ・シザー」の機手が迫り……

か-16-25 2487

アクセル・ワールド 14

— 激光の天使 —

川原礫

イラスト／HIMA

アウア・カレントと救出に挑むハルユキたち。しかし、青城学園で待っていた（国神セイリュウ）最大最強の攻撃（レベル）レインの発動がハルユキに迫る……

か-16-27 2549

アクセル・ワールド 15

— 終わりと始まり —

川原礫

イラスト／HIMA

纏われた二コを救うため、単身でラック・バイスを導くハルユキ。大天使メタトロンの加護を受け、ついにその（影）に手を届かせるが――

か-16-29 2620

アクセル・ワールド 16

— 白雪姫の微笑 —

川原 礫
イラスト／HIMA

〈加速研究会〉VS ハルユキ！ 事態はサーベラスに繋がる人格〈タスクテイカー〉が展開。さらに〈双頭の龍〉マークⅡまで誕生してしまう。この連続の騒ぎは——？

か16-31 2691

アクセル・ワールド 17

— 星の揺りかご —

川原 礫
イラスト／HIMA

緑のレギオン〈グレート・ウォール〉の本拠地に乗り込むはずが……なぜか高橋がテールのブルーに到着。ネガ・ネビュラス美少女メンバーの氷室と天は目の瞬間刊！

か16-35 2619

アクセル・ワールド 18

— 黒の双剣士 —

川原 礫
イラスト／HIMA

「あなたは……いったい誰なんですか？」
白の王打倒のため、緑のレギオンと共闘を結ぼうとした瞬間、〈氷入道〉が持ちかけってきた驚くべき提案とは——？

か16-38 2939

絶対ナル孤独者 1

〈アイソレータ〉 咀嚼者 The Biter

川原 礫
イラスト／シメジ

「絶対的な〈孤独〉を求める……だから、僕のコードネームは〈アイソレータ〉です」
「AW」「SAO」の加速世界による最後のウェブ小説。電撃文庫でついに登場！

か16-33 2749

絶対ナル孤独者 2

〈アイソレータ〉 発火者 The Igniter

川原 礫
イラスト／シメジ

「よしー 君は今日から〈ミイくん〉だ！」
人間の敵〈ルビーアイ〉を倒したミネル。彼はついに、〈加速世界〉の存在を知る。意外なロリっ娘とロインも登場する。禁断の第二章！

か16-37 2681

アニメ

ソードアート オンライン

THE PERFECT GUIDE: ANIMATION
SWORD ART ONLINE

全テ

ワールドガイド World Guide

「SAO」と「ALO」で知られた
人気アニメ設定アートボードの魅力を紹介。

ストーリーガイド Story Guide

アニメの物語と、TVスペシャル
「ソードアート・オンライン」の物語をプレイバック

キャラクター Character

個性豊かなキャラクターたちの
魅力と、アニメのキャラクターと、リアルでの夢を共有する。

イラスト・アニメ・ゲーム・音楽・その他 Etc

「ソードアート・オンライン」の制作陣・声優・音楽・イラスト・その他
「ソードアート・オンライン」の制作陣・声優・音楽・イラスト・その他
「ソードアート・オンライン」の制作陣・声優・音楽・イラスト・その他

・B5判 / 192ページ

・電撃文庫編集部・編

・カバーイラスト / abec

電撃の単行本

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」「電撃コミック各誌」からデビュー!

上遠野浩平（ブギーポップは笑わない）、高橋伸七郎（炎焔のシヤナ）、
成田岳彦（デュラララ!!）、支倉満砂（狼と香辛料）、
石川 浩（国書船戦争）、川原 礪（アクセル・ワールド）、
和ヶ原聡司（はたらく魔王さま!）など、
常に時代の一線を突くクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」、
新時代を切り開く才能を毎年募集中!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞・ 電撃コミック大賞

賞
(共通)

大賞……………正賞+副賞300万円
金賞……………正賞+副賞100万円
銀賞……………正賞+副賞50万円

(小説部のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞100万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞30万円

編集部から選評をお送りします!

小説部門・イラスト部門・コミック部門は1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします!

各部門(小説、イラスト、コミック)
郵送でもWEBでも受付中!

最新情報や詳細は電撃大賞公式ホームページをご覧ください。

<http://dengekitaisho.jp/>

編集者のワンポイントアドバイスや受賞者インタビューも掲載!